長岡京市埋蔵文化財発掘調査資料選

（四）

２０１４

公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

序　　文

平成 23 年度から刊行を始めた『長岡京市埋蔵文化財発掘調査資料選』も本冊で４冊目となりました。これまで報告してきた調査は、本冊も含めて主に昭和の終わり頃に行ったものです。

この頃は開発行為も数多く、年間30ヶ所前後の発掘調査を行っておりました。すでに調査を行ってから四半世紀が過ぎておりますが、それぞれの成果は、その後に刊行された『長岡京市史』などにも反映されております。

本書には、５地点の発掘調査で得られた弥生時代から長岡京期の資料を掲載しています。

右京第 228 次調査と右京第 459 次調査は弥生時代後期の環濠集落である長法寺遺跡に関係する資料です。また、右京第 227 次調査では今里遺跡の古墳時代豪族居館、右京第 376 次調査は開田古墳群の小規模古墳群や土壙墓など、右京第 301 次調査は長岡京期の倉庫・地鎮遺構と、いずれも地域史の解明には欠かせない重要な資料といえます。これらの調査研究にご指導ご協力頂きました皆さまに厚くお礼申し上げます。

そして、本書が乙訓の地域史研究、長岡京跡の研究に広くご活用頂ければ幸甚です。

当センターでは、今後とも埋蔵文化財の調査・研究事業、普及啓発活動事業などに積極的に取り組んでまいります。より一層のご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成２６年 ７月

公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

理事長　　芦　田　富　男

例　　言

1．本書は、公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センターがこれまでに実施した発掘調査、立会調査から、充分な成果報告がなされていなかった重要資料をまとめたものである。

2．本書収録の調査には、長岡京跡とその他の遺跡の調査がある。各遺跡の推定範囲は、『長岡京市遺跡地図』第５版（2006 年）によった。調査次数は各遺跡の調査回数を示し、長岡京跡では右京域と左京域に分けて通算したものである。また、調査地区名は、前半が奈良文化財研究所の遺跡分類表示、後半が京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』（1977 年）収録の旧大字小字名による地区割りと同地区内における調査回数を示す。また、立会調査は、最初の２桁が調査年度の西暦表記、後半が年度内の通算立会調査次数を示す。

3．長岡京跡の条坊名称は、山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第 38 巻第４号（1992 年）の復原案に従った。

4．本書で使用する地形区分は、特に断らない限り「長岡京市域地形分類図」『長岡京市史』資料編一（1991 年）によった。

5．本文の参考文献、（注）に示した報告書のうち、使用頻度の高いものについては、以下のように略記した。

・京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』○　→　『京都府概報』○

・公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』第○冊
　→　『京都府センター概報』第○冊

・公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査報告集』第○冊
　→　『京都府センター報告集』第○冊

・公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査報告書』第○冊
　→　『京都府センター報告書』第○冊

・公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府埋蔵文化財情報』第○号
　→　『京都府センター情報』第○号

・長岡京市『長岡京市史』○○編○　→　『長岡京市史』○○編○

・長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』第○冊　→　『長岡京市報告書』第○冊

・公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成○年度
　→　『長岡京市センター年報』平成○年度

・公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第○集
　→　『長岡京市センター報告書』第○集

・公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財発掘調査資料選』（○）
　→　『長岡京市センター資料選』（○）

・財団法人京都市埋蔵文化財研究所『京都市埋蔵文化財研究所調査概要』平成○年度
　→『京都市研究所概要』平成○年度
・財団法人京都市埋蔵文化財研究所『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第○冊
　→『京都市研究所報告』第○冊
・向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書』第○集　→『向日市報告書』第○集
・公益財団法人向日市埋蔵文化財センター『向日市埋蔵文化財調査報告書』第○集
　→『向日市報告書』第○集
・公益財団法人向日市埋蔵文化財センター『年報　都城』○　→『向日市センター年報』○
・大山崎町教育委員会『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第○集
　→『大山崎町報告書』第○集
・大山崎町教育委員会『大山崎町文化財年報』平成○年度　→『大山崎町年報』平成○年度
・長岡京跡発掘調査研究所『長岡京跡発掘調査研究所調査報告書』第○集
　→『長岡京跡研究所報告書』第○集
・長岡京跡発掘調査研究所『長岡京跡発掘調査研究所ニュース　長岡京』第○号
　→『長岡京ニュース』第○号

6．本書において使用している遺構番号は、長岡京跡に関する調査の場合、調査次数＋番号であるが、報告によっては煩雑さを避けるため調査次数を略している。「SD01」などの場合は、調査次数を冠した「SD ○○○ 01」が正式な番号である。

7．本書の挿図写真番号・付表番号は、各資料項目ごとに番号を付した。番号の重複を避けるために、まず、資料項目の順番を付し、次いで資料項目内での番号を記した。「1．長岡京跡右京第 228 次調査」に掲載した第 1 図の場合は、「第 1 － 1 図」と表記する。

8．本書で使用している方位と国土座標値は、旧座標系の第Ⅵ系によっている。

9．現地調査は、小田桐　淳、山本輝雄、木村泰彦、中島皆夫が担当した。

10．遺物写真は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に撮影を依頼した。

11．本書の執筆は、基本的に調査担当者が分担し、文末に氏名を記した。

12．本書の編集は、技術補佐員・整理員の協力のもとに中島皆夫が行った。

目　　次

序　文 …… i

例　言 …… iii

1．長岡京跡右京第 228 次調査 …… 1
～ 弥生時代　長法寺遺跡、環濠等出土資料 ～

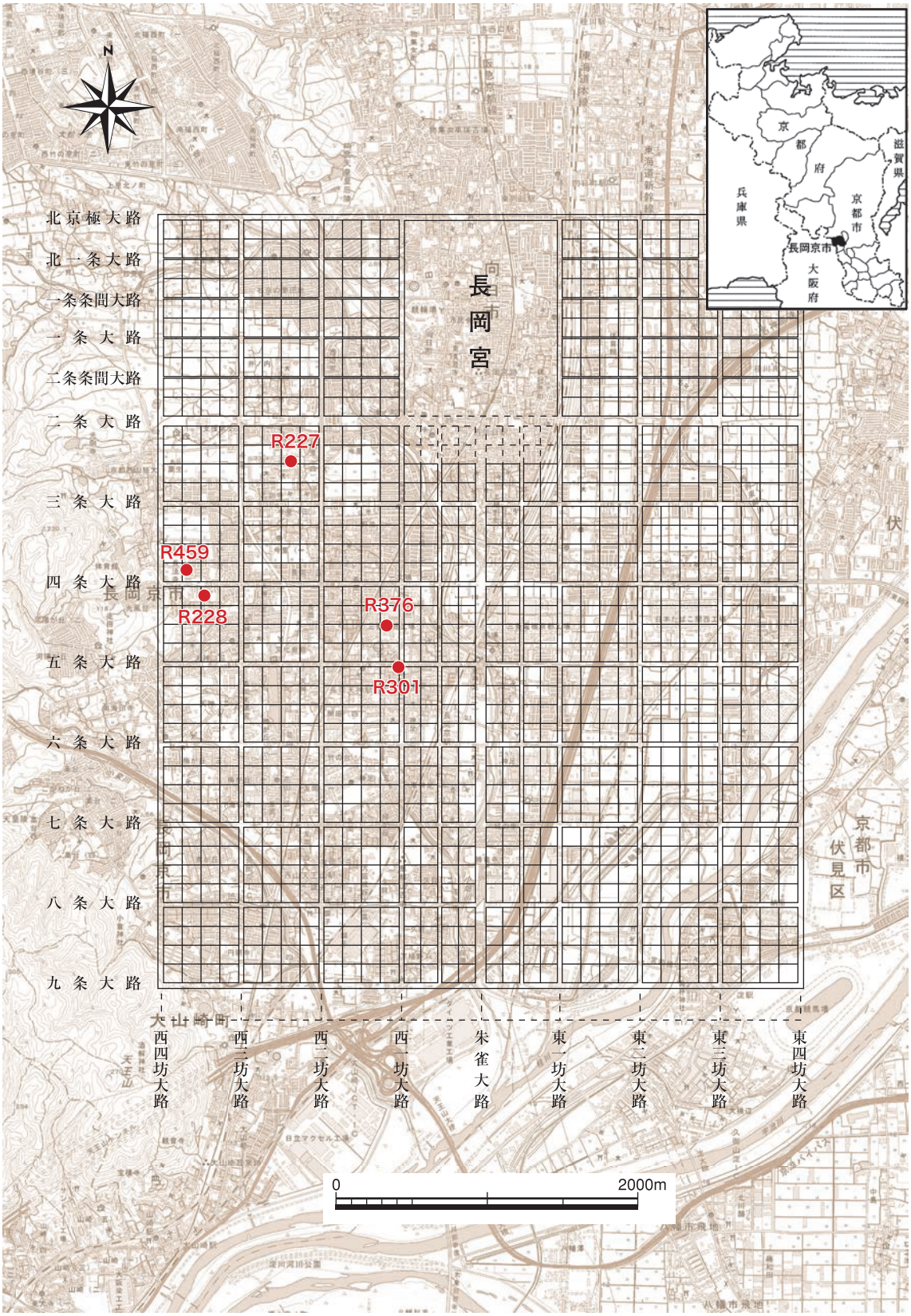
2．長岡京跡右京第 459 次調査 …… 31
～ 弥生時代　長法寺遺跡、溝出土資料 ～

3．長岡京跡右京第 227 次調査 …… 41
～ 弥生・古墳・飛鳥時代　今里遺跡、竪穴建物・掘立柱建物等出土資料 ～

4．長岡京跡右京第 301 次調査 …… 67
～ 長岡京跡、甕据え付け建物・土器埋納坑出土資料 ～

5．長岡京跡右京第 376 次調査 …… 79
～ 古墳時代・長岡京期　開田古墳群、古墳・土坑等出土資料 ～

＊ 表紙カット　右京第 228 次調査　溝 SD08 出土の高杯



長岡京と調査地の位置（1/40000）

1．長岡京跡右京第 228 次調査

～ 弥生時代　長法寺遺跡、環濠等出土資料 ～

調 査 地　長岡京市長法寺南野 20 － 1 他　　**地 区 名**　7ANJMM － 1 地区

調査期間　1986（昭和 61 年）年 4 月 1 日～ 5 月 13 日　　**調査面積**　300㎡

時　　期　弥生時代中期～後期　　**出土遺物**　55 箱

立　　地　段丘を覆う扇状地　　標高約 43.5 m

参考文献　「右京第 228 次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和 61 年度　1988 年

「長岡京跡右京第 228 次調査概要(1)」『長岡京市報告書』第 18 冊　1987 年

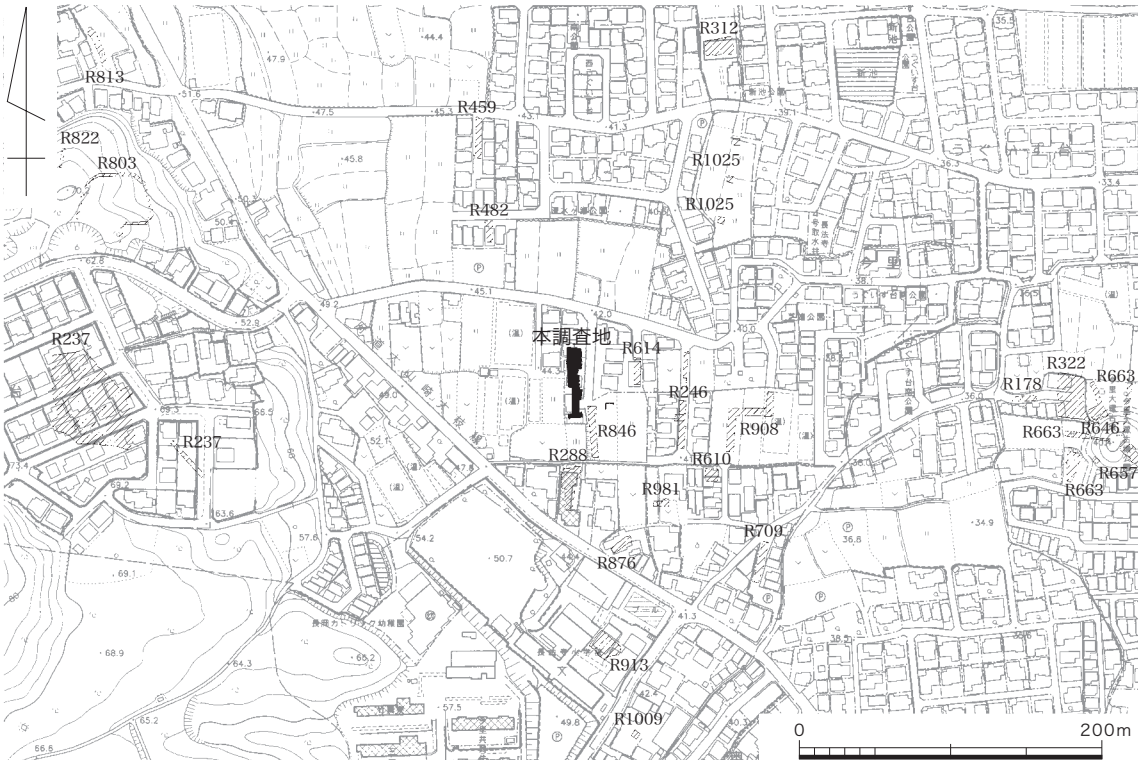
「長岡京跡右京第 228 次調査概要(2)」『長岡京市報告書』第 20 冊　1988 年

「弥生時代　長法寺遺跡」『長岡京市史』資料編一　1991 年

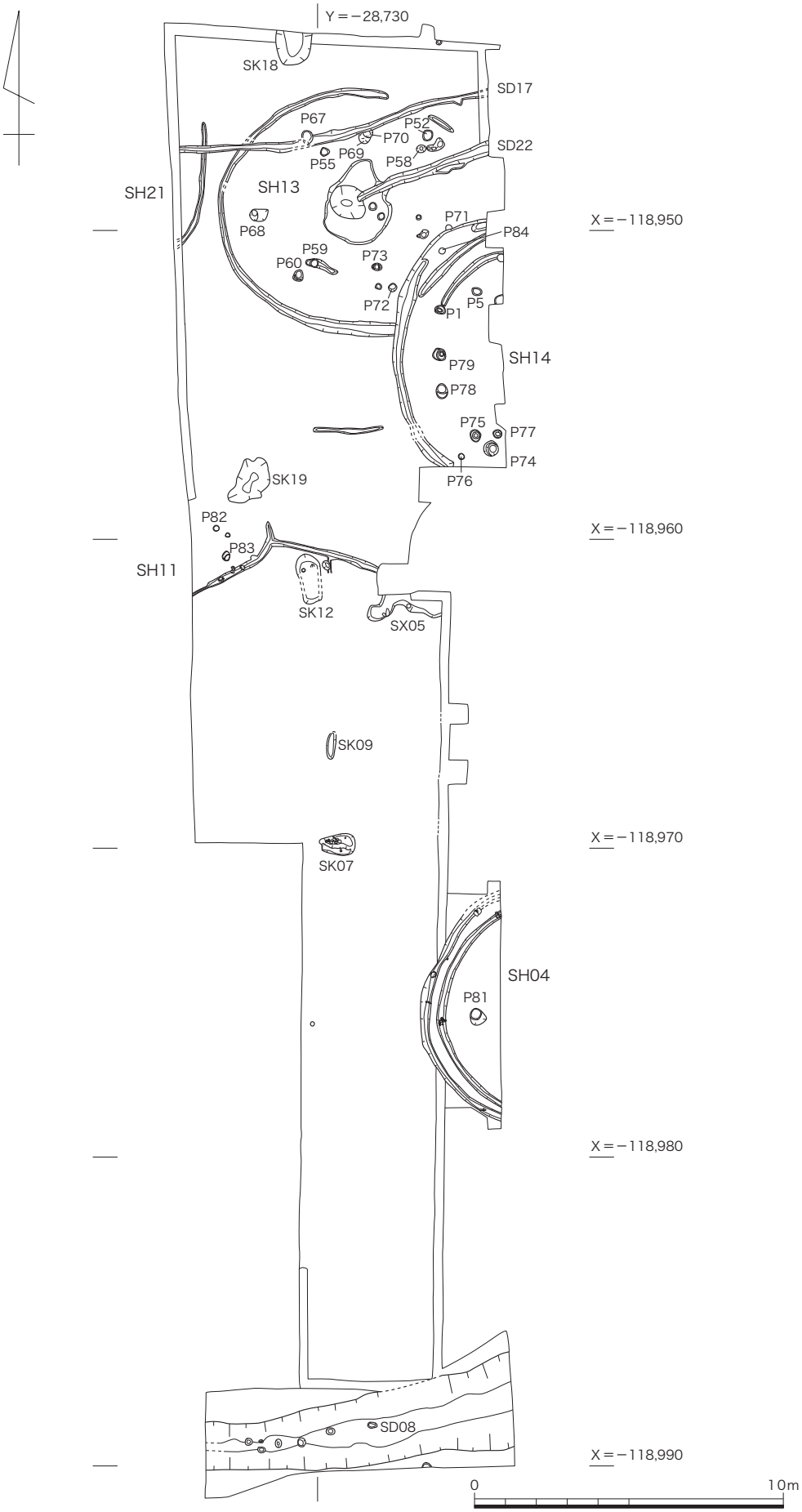
調査の概要

調査地は西山丘陵の裾部に展開する扇状地の扇頂部付近に位置しており、現在は西から東、南から北に向かって段々に低くなる田畑の区画によって分割されている。調査トレンチは南北に並ぶ２区画の水田で、北側水田面が南側より 50cm ほど低い面になっていた。

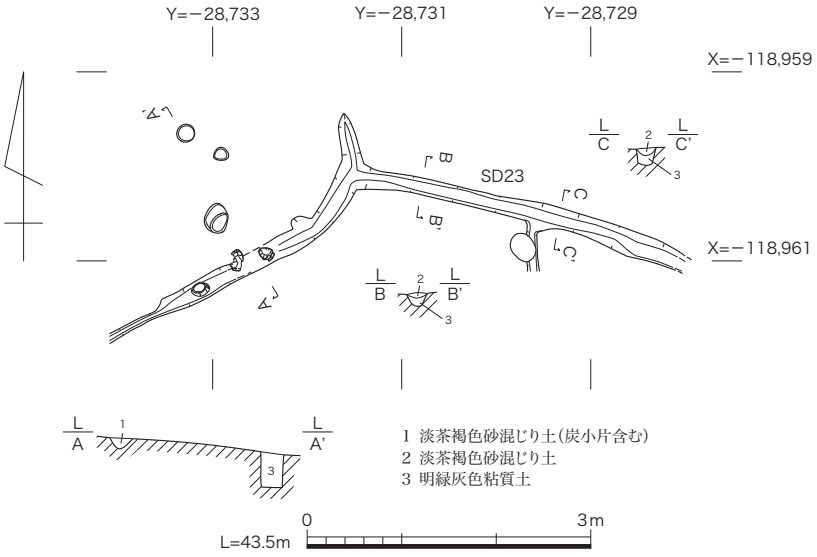
トレンチの基本層序は、現代の水田に伴う耕作土・床土層の下に部分的に近世までの遺物を包含する旧耕作土と考えられる層があり、地山層の黄灰色土層となる。地山面は若干の傾斜をもっており、その比高差はトレンチ東端と西端で約 40cm、南端と北端では約 70cm を測る。



第 1 － 1 図　発掘調査地位置図（1/5000）



第 1 − 2 図　弥生時代検出遺構図（1/200）



第 1 − 3 図　竪穴建物 SH11 実測図（1/80）

地山面からは飛鳥〜奈良時代の掘立柱建物などや弥生時代の竪穴建物、溝、土坑などが切り合って検出された。今回報告するのは弥生時代の遺構、遺物についてである。

検出遺構

竪穴建物 SH11　隅円方形の竪穴建物で、段差をもつ水田面の境目で検出されたため、北半部は残存していない。南半部でも最も残りのよい部分で深さ 8 cm であった。建物の南辺は東で北へ 29° 振れている。建物床面の周囲には壁溝が巡り、壁溝の中に落ち込んで 3 個体の甕が検出された。建物の南東コーナーからは壁溝から分岐する溝 SD23 が建物外に延びていく。溝 SD23 は幅 20cm 弱、深さは壁溝と繋がる部分では 14cm で、壁溝と同じ深さであるが、東部では 18cm となり、東へ深くなっている。溝埋土は建物の壁溝と同様の土で、平面精査では切り合い関係は認められず、建物の壁溝と一体となった排水施設であると考えられる。

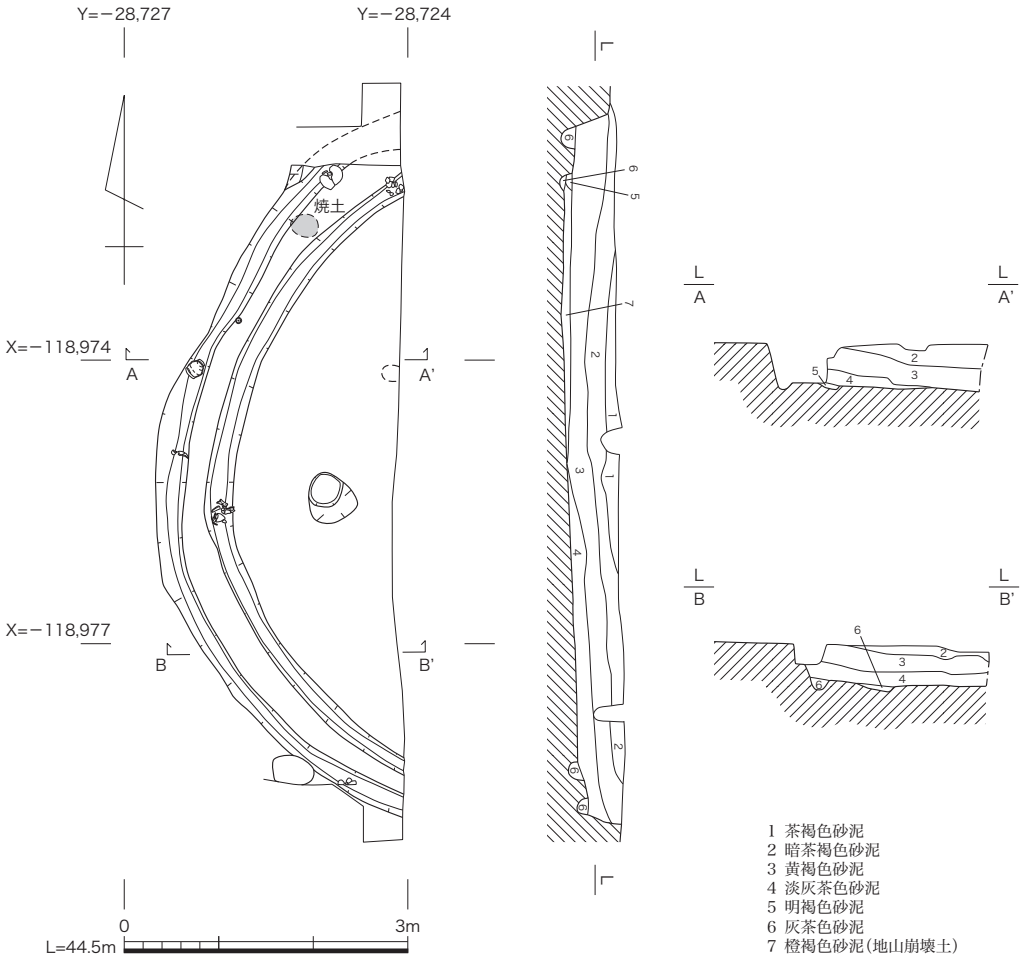
この建物の時期は、出土遺物から弥生時代末になると思われる。

竪穴建物 SH04　円形の竪穴建物で、西側 1/3 ほどが検出された。復元すると建物の直径は 8 mになる。床面までの深さは約 50cm であり、床の周囲には幅 20cm、深さ 10cm 前後の壁溝が巡っている。

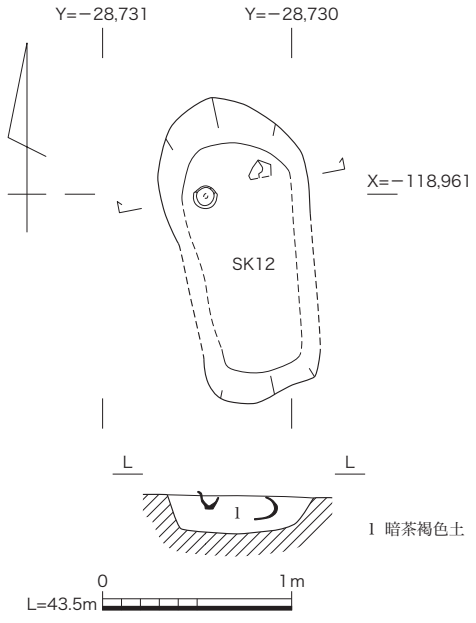
周壁溝の約 60cm 内側には、さらにもう 1 条溝が巡り、溝の内側床面は若干低くなっている。このことから竪穴建物 SH04 は拡張して建て直されており、第 12 層が古段階の建物埋土ないしは新段階の貼り床になると考えられる。遺物はほとんどが壁溝内から出土している。

竪穴建物 SH14　竪穴建物 SH13 を切る建物で、検出した平面形は南北に楕円気味を呈するが、復元すると直径 8 〜 9 mほどの円形住居になると考えられる。深さは 20cm ほどである。

壁溝は全周せず、部分的に途切れている。北部では内側に 2 条の溝が検出されており、建て替えられている可能性が考えられる。遺物は主に南西部の壁溝に近い床面や壁溝内から出土している。特に壁溝際の床面から出土した土製紡錘車は、直径 7.6cm、厚さ 2.9cm の大型品である。



第 1 − 4 図　竪穴建物 SH04 実測図（1/80）

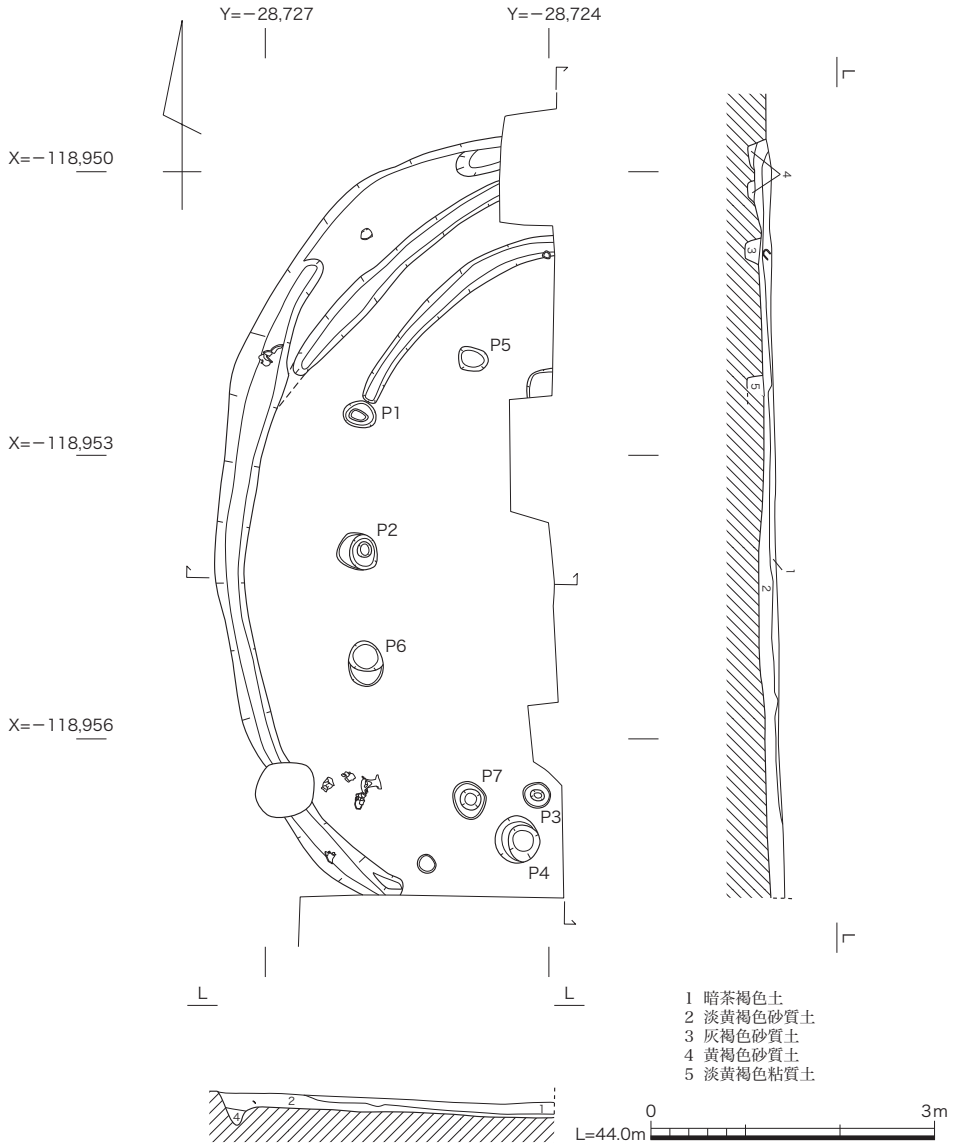


第 1 − 5 図　土坑 SK12 実測図（1/40）

竪穴建物 SH21　調査区北西端で検出され、壁溝と考えられる溝のみが検出されている。溝の幅は 20cm で、深さ 5 cm ほど、北部は削平により残存していないと考えられる。

土坑 SK12　南北 1.6 m、東西 0.7 m の長円形で、深さは 20cm の平らな底面となっている土坑である。中からは完形の鉢などの土器類が出土している。

溝 SD08　調査地南端で検出された大溝で、方向は東西方向にわずかに弧を描いている。規模は、西端では幅 1.5 m、深さ 0.7 m程であるが、東端では幅 3.3 m、深さ 1.1 mとなっている。これは西から東へ



第 1 − 6 図　竪穴建物 SH14 実測図（1/80）

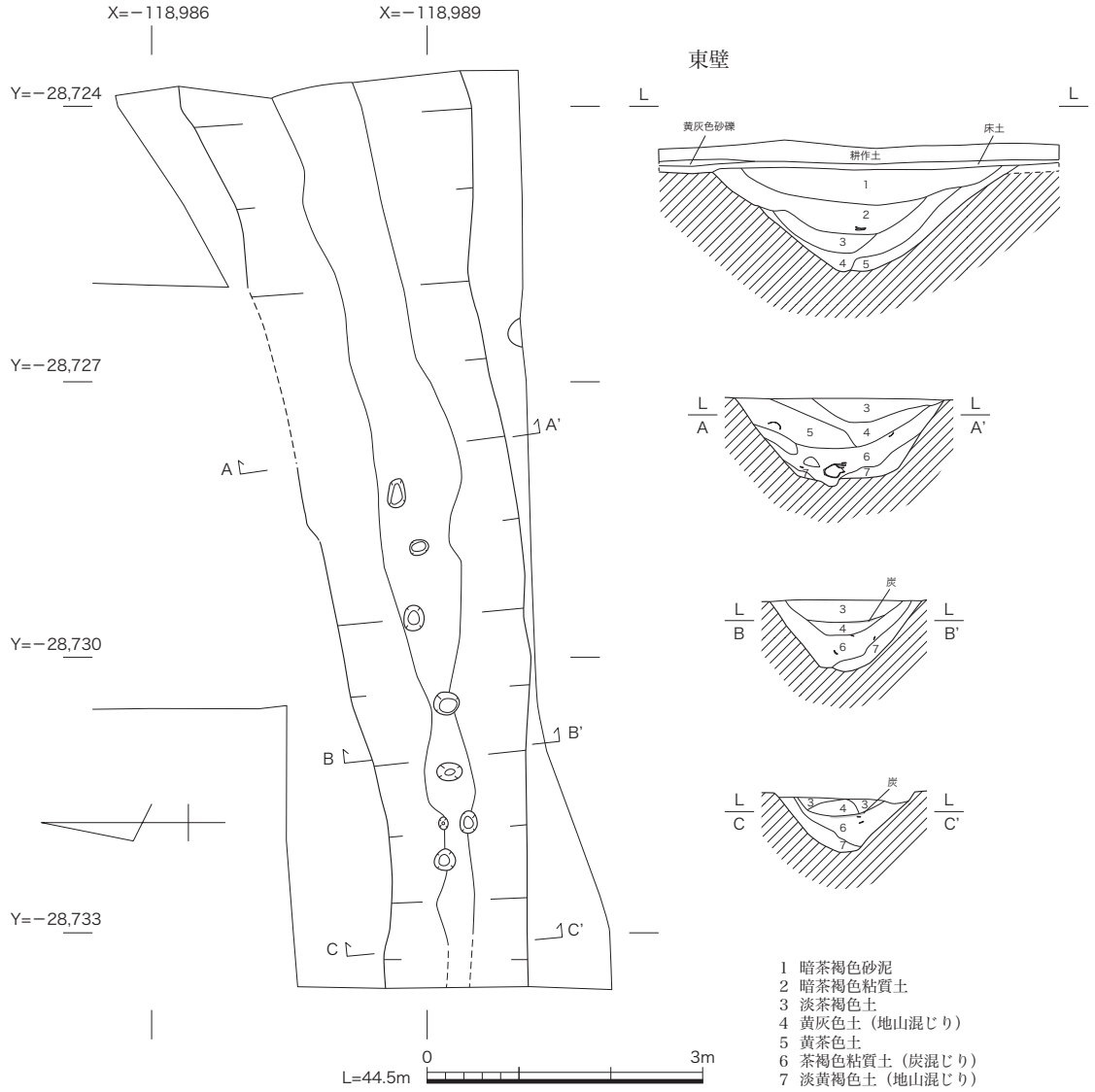
傾斜する地形を棚田状の水田としているためと考えられ、この溝は断面の形状や規模から環濠になるものと考えられる。

溝 SD17　幅 20 ～ 30cm、深さ 7 ～ 10cm の緩やかに蛇行する溝である。竪穴建物 SH13・21 を切っている。断面形態、埋土の状況が竪穴建物 SH11・13 と類似することから、調査区のさらに西方にある竪穴建物の排水溝である可能性が高い。

これらの遺構は弥生時代後期の遺構群で、他に土坑 SK07・18 もこの時期に属すものである。

竪穴建物 SH13　南北 8 m、東西は復元すると 9 m弱になる若干楕円形の建物である。深さは残りのよいところで 10cm 弱、東部は床面まで削平されている。建物の内周には壁溝が巡っている。壁溝は幅 20 ～ 40cm、深さは 5 ～ 20cm で、建物北東部では壁溝が途切れている。主柱穴は 6 本（P55・58・60・68・71・72）である。

建物中央からは中央ピットが検出された。中央ピットは直径 1.1 mほどの不定形プランで、

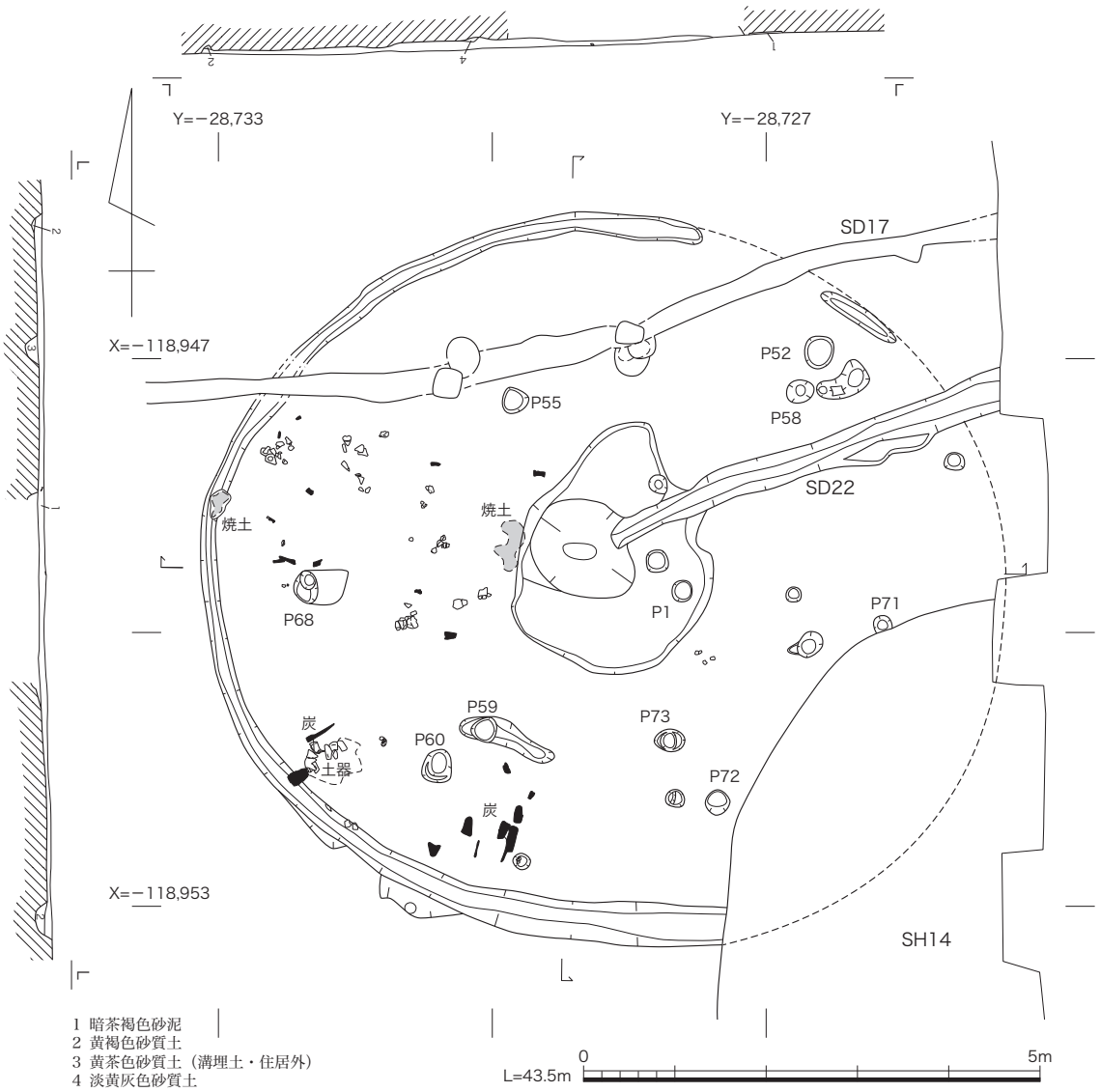


第 1 − 7 図　溝 SD08 実測図（1/80）

10cm ほど窪んで平坦面をつくった後、西寄りで直径 0.5 mの円形にさらに 0.5 m 掘り窪められている。埋土には炭が混じり、1 段目の平坦面には炭が層になって堆積していた。また、中央ピット北部では、炭層の他に炭と灰からなる層が中央ピット最深部に流れ込んでいる様子が確認されている。中央ピット西肩に接する建物床面には焼土塊があり、この付近には炭も多く、床面から中央ピットの 1 段目にかけて若干焼けて赤変していた。

中央ピットの 1 段目から東方建物外に延びる溝 SD22 は幅 40cm 前後で、深さは 20cm の規模である。溝底は東へ順次低くなっており、この建物に付属する排水溝であると考えられる。

建物の床面遺物は主に建物西部に認められ、材木が炭化したものも多いことから火災にあった可能性が考えられる。土器類は小片がほとんどであるが、主柱穴 P60 と P68 の間の壁溝寄りのところから 1 個体の壺が潰れた状態で出土している。この壺の形態や他に出土している水差し形土器の把手などから竪穴建物 SH13 は弥生時代中期の建物であると考えられる。



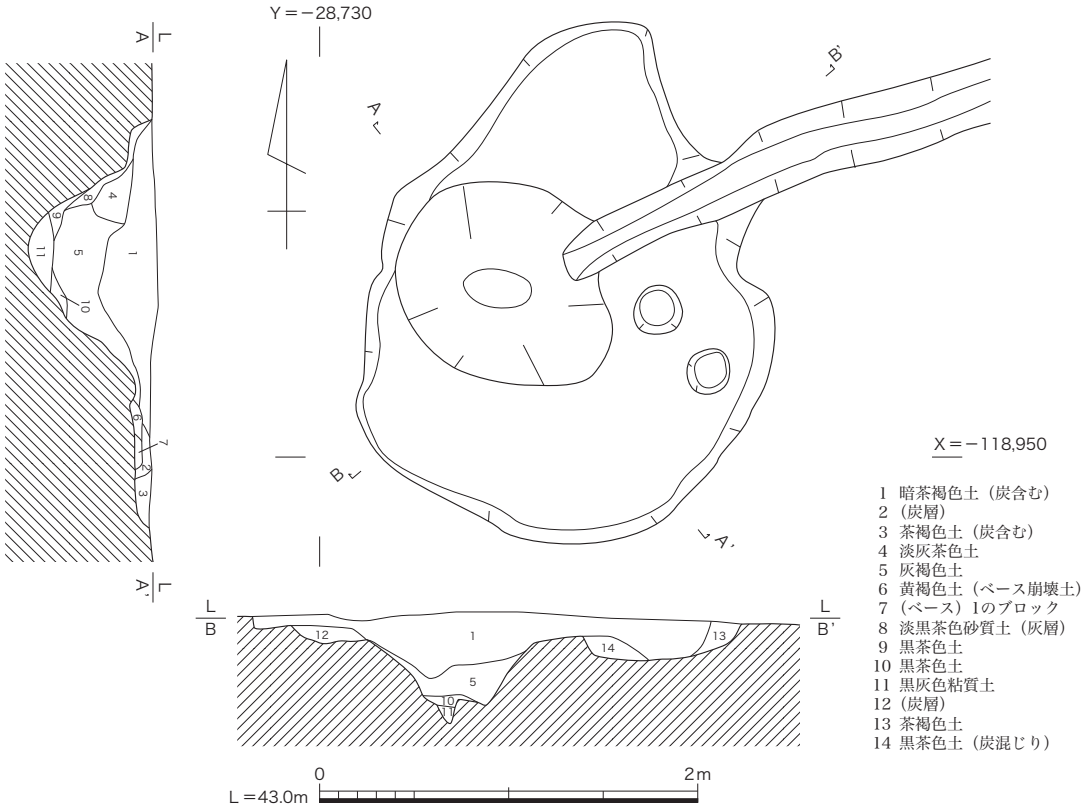
第 1 – 8 図　竪穴建物 SH13 実測図（1/80）

出土遺物

今回の調査地では大部分で耕作土・床土層を除去した面が遺構検出面であることから、出土遺物のほとんどが遺構から出土したものである。

竪穴建物 SH11 出土遺物（第 1 –10 図）　一部しか残存していない建物であるが、残存部分の壁溝にはまり込んだ形で 1 ～ 4 の甕が出土した。3 と 4 は同一個体と考えられる。いずれも口縁部外面に面をつくり、内面は上方につまみ上げるように強くなでてあり、受け口状に仕上げている。1 と 2 は大小の違いはあるものの、同じ技法によってつくられている。3 は頸部に櫛描直線文、竹管文、列点文を施しており、近江地域の影響を受けたものと考えられる。内外面の調整は摩滅により不明である。これらの時期は後期後半～末と考えられる。

竪穴建物 SH04 出土遺物（第 1 –11 図）　5 は口縁部外面に幅広の面をつくり、肩部に刻み目を施している。6 は直立気味に立ち上がる口縁をもち、頸部には穿孔が 1 ヶ所認められる。7



第 1－9 図　竪穴建物 SH13 中央ピット実測図（1/40）

は頸部から緩やかに開く短い口縁で上面に外傾する面をつくっている。体部外面は丁寧になで、内面はケズリ調整される。底部には短い脚が付けられている。搬入品と考えられる。8 は高杯、9 は直径 6 cm 弱、厚さ 3.3cm の大型紡錘車で、重さは 109 g を測る。

竪穴建物 SH14 出土遺物（第 1 –13 図）　17 は小型脚付甕、18・20 は器台である。19 は摂津地域に見られる鉢の把手と考えられるもので、逆「U」字形をした耳状把手である。21 は長さ 7.7cm、厚さ 3 cm 弱の大型紡錘車で、重さは 179 g である。端面には刻み目が施されている。

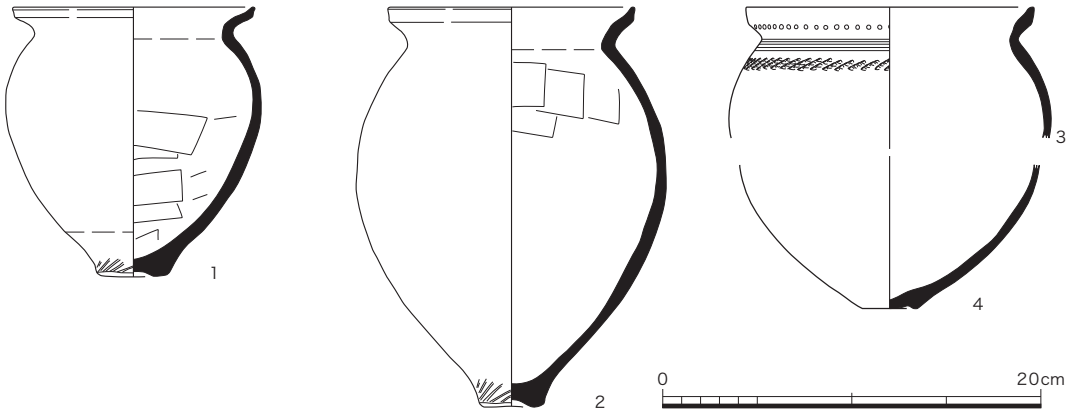
土坑 SK12 出土遺物（第 1 –12 図）　10・11 は口縁端部に幅広の面をつくる甕で、11 の口縁端部には 3 条の擬凹線が施される。13 は鉢で厚手のつくりとなっている。14 は浅い大型の鉢と考えられる。

溝 SD08 出土遺物（第 1 –14 ～ 17 図）　広口壺（22 ～ 27）には端部を丸くおさめる 22 と、外側に「ハ」字状に開いて端部外面に面をつくるもの（23 ～ 27）がある。法量は大・小の 2 種がある。26 の胎土は生駒西麓産と考えられる。27 は直立気味に立ち上がり、端部を水平まで急激に開いた後、内傾する広い面をつくり、擬凹線を施すもので、備前地域の特徴を有するものである。胎土は当地のものを使用していると考えられる。

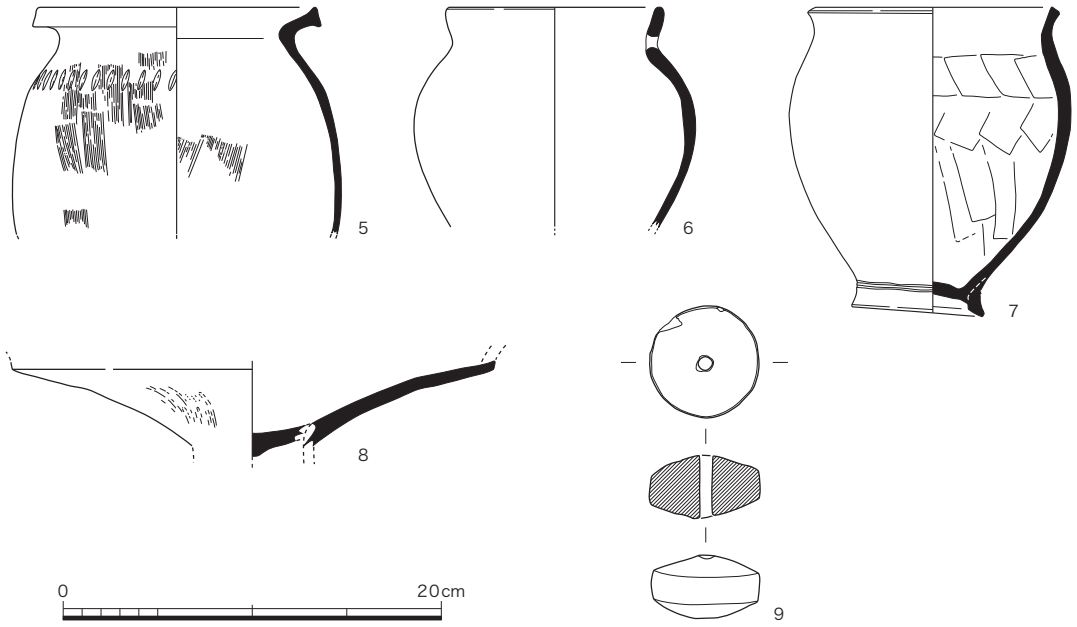
長頸壺（29 ～ 32）には直立して端部が外側に開いて終わるもの（31）がある。短頸壺（33 ～ 35）は、33 は体部にタタキ痕を残すものである。35 の頸部には刺突文を巡らしている。

36・37 はミニチュア壺と思われる。

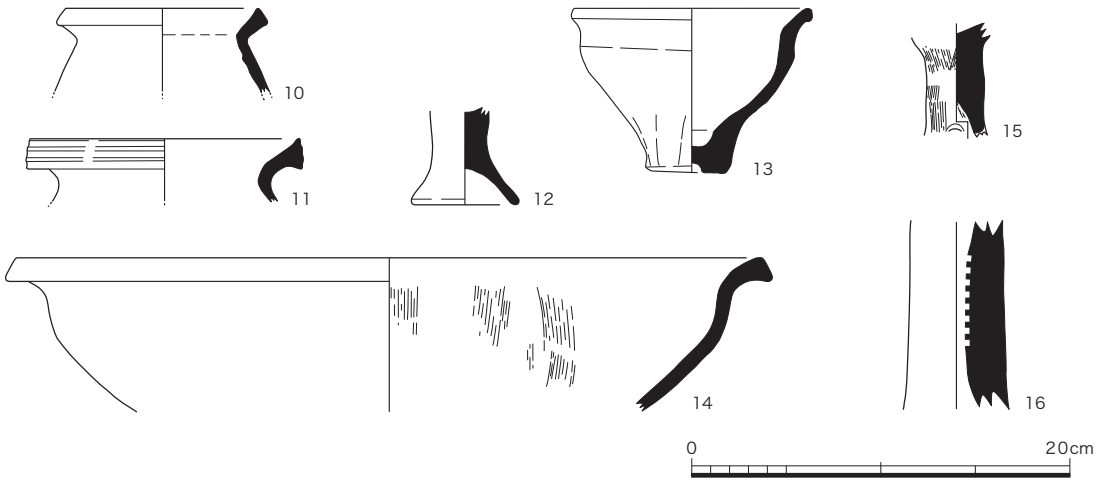
甕（38 ～ 50）は口縁部が短く「く」字形に折れ曲がり、端部に面をつくる。調整は体部内面



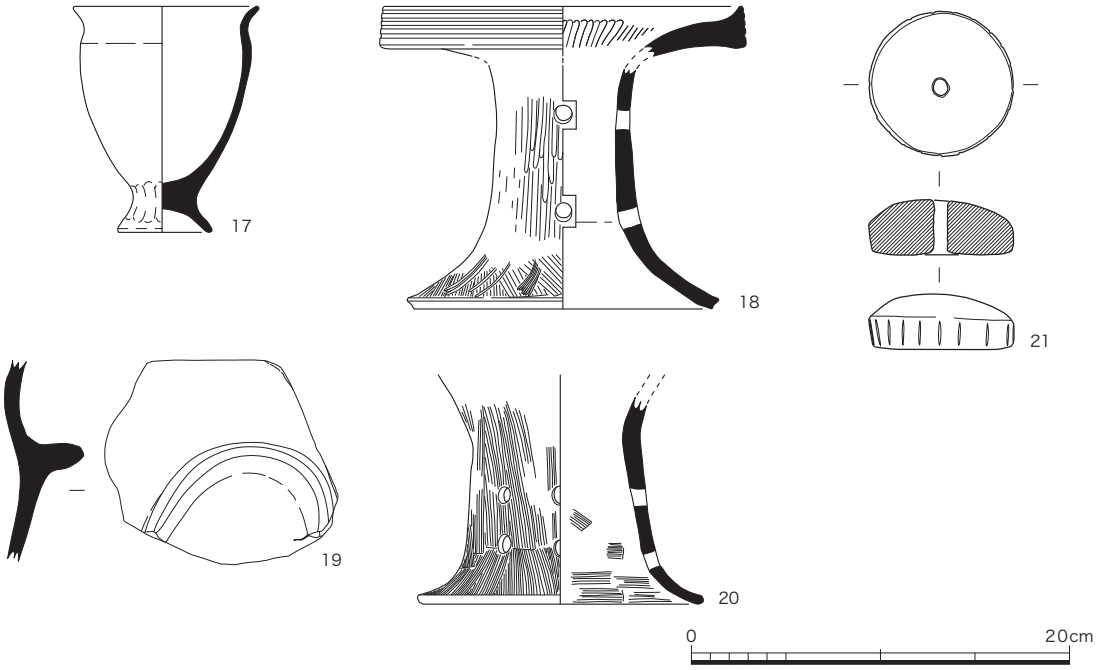
第 1 –10 図　竪穴建物 SH11 出土遺物実測図（1/4）



第 1 –11 図　竪穴建物 SH04 出土遺物実測図（1/4）



第 1 –12 図　土坑 SK12 出土遺物実測図（1/4）



第 1 –13 図　竪穴建物 SH14 出土遺物実測図（1/4）

をヘラケズリするものがほとんどである。法量は大・中・小の 3 種ある。47 は口縁端部を上方につまみ上げ、受け口状となっている。48 は口縁を短く水平近くまで折り曲げ、端部を上方に拡張して外面に広い面をつくり、擬凹線を施している。

高杯には、杯部が椀状になるもの（52 〜 55）と皿状になるもの（56・59・60）がある。51 の形態は河内地域中期の無頸壺を起源とするものであろうか。61・62 は杯部と脚部に有段をもつ形態で、高杯になると考えられる。

器台は鼓形を呈したもの（65 〜 67）が出土している。竪穴建物 SH14 から出土している形態と合わせて 2 種となる。64 は生駒西麓産の胎土で、口縁端部に円形浮文を 3 個 1 単位で付けている。広口壺の口縁部になる可能性も考えられる。

他に有孔鉢（68・69）・四方透かしの脚部（70）・近江系鉢（71）・耳状把手の鉢（72）などが出土している。73・74 は土製鋳型と考えられるもので、外面に縄を掛ける突起が成形され、凹面になる内面は荒いケズリ調整となっている。鋳型面となる真土は残っていない。

75 は細長い針状の鉄製品である。

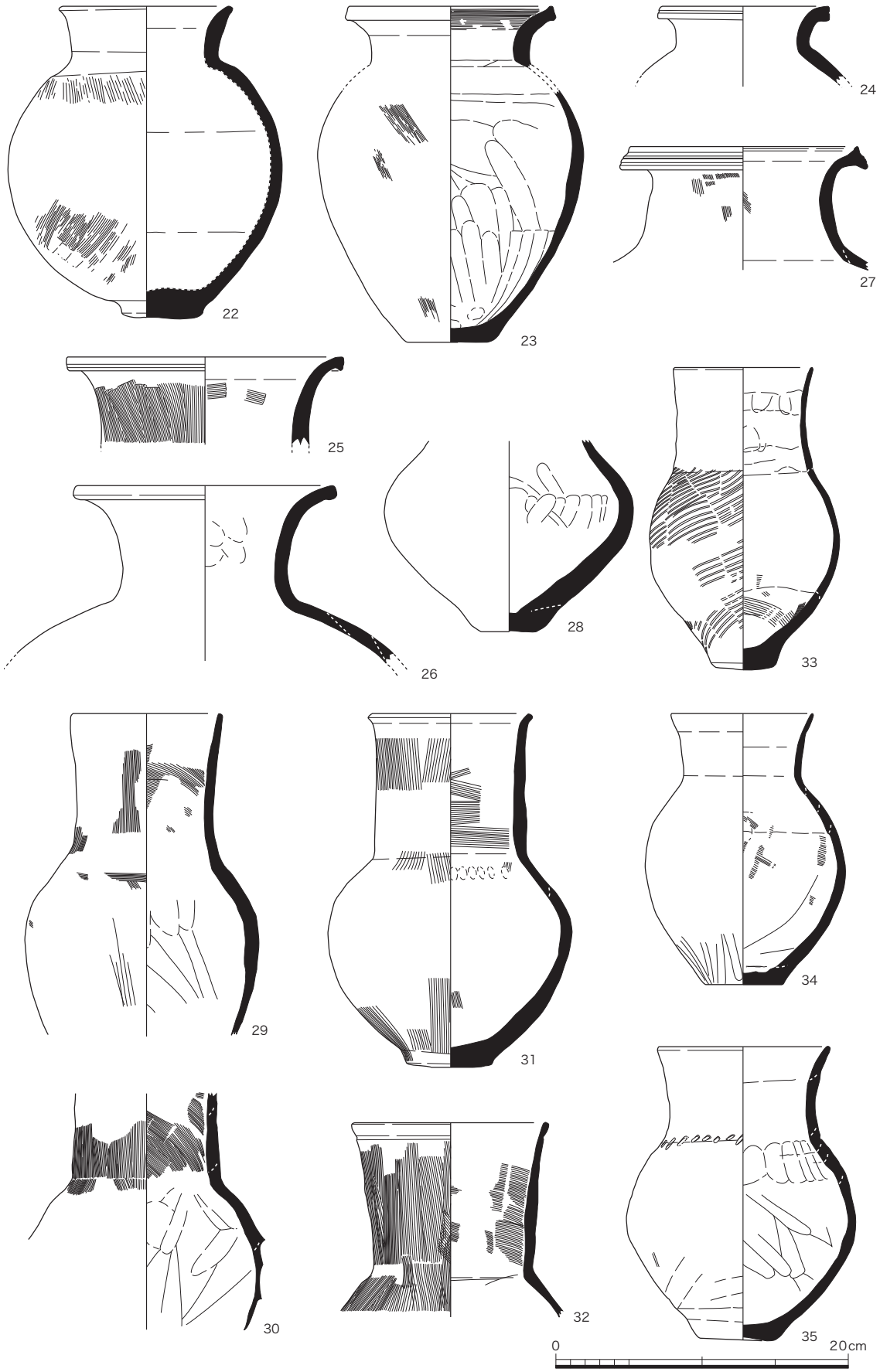
これらの竪穴建物、土坑、溝から出土した遺物は後期後半代に位置付けられる。

竪穴建物 SH13 出土遺物（第 1 –18 図）　76 の広口壺は完形に復元できたもので、卵形の体部から口頸部にかけてなだらかに開き、口縁端部に面をつくる。時期は中期後葉に位置付けられる。

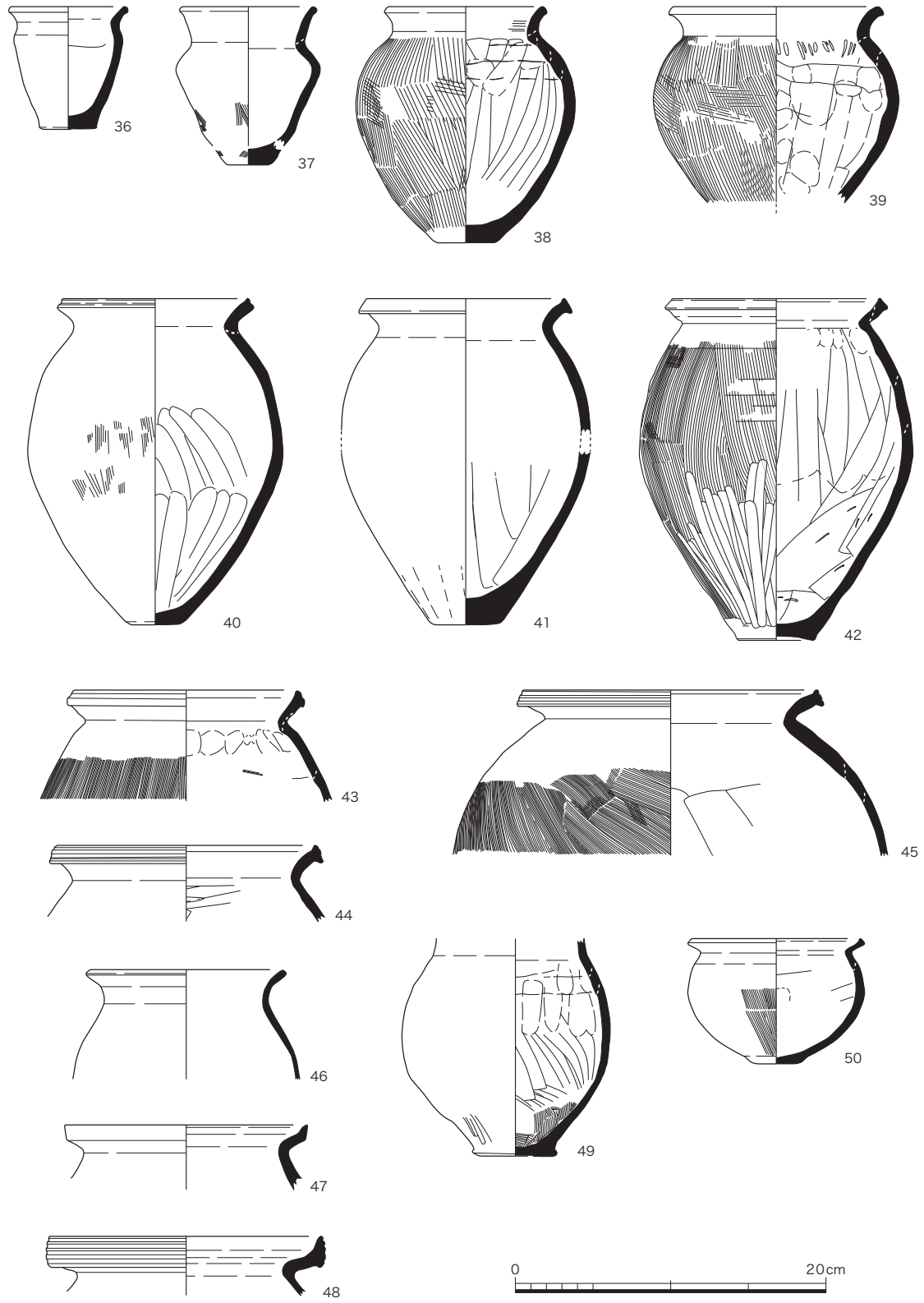
小　　結

長法寺遺跡は今回の調査によって発見された弥生時代、奈良時代の集落遺跡である。

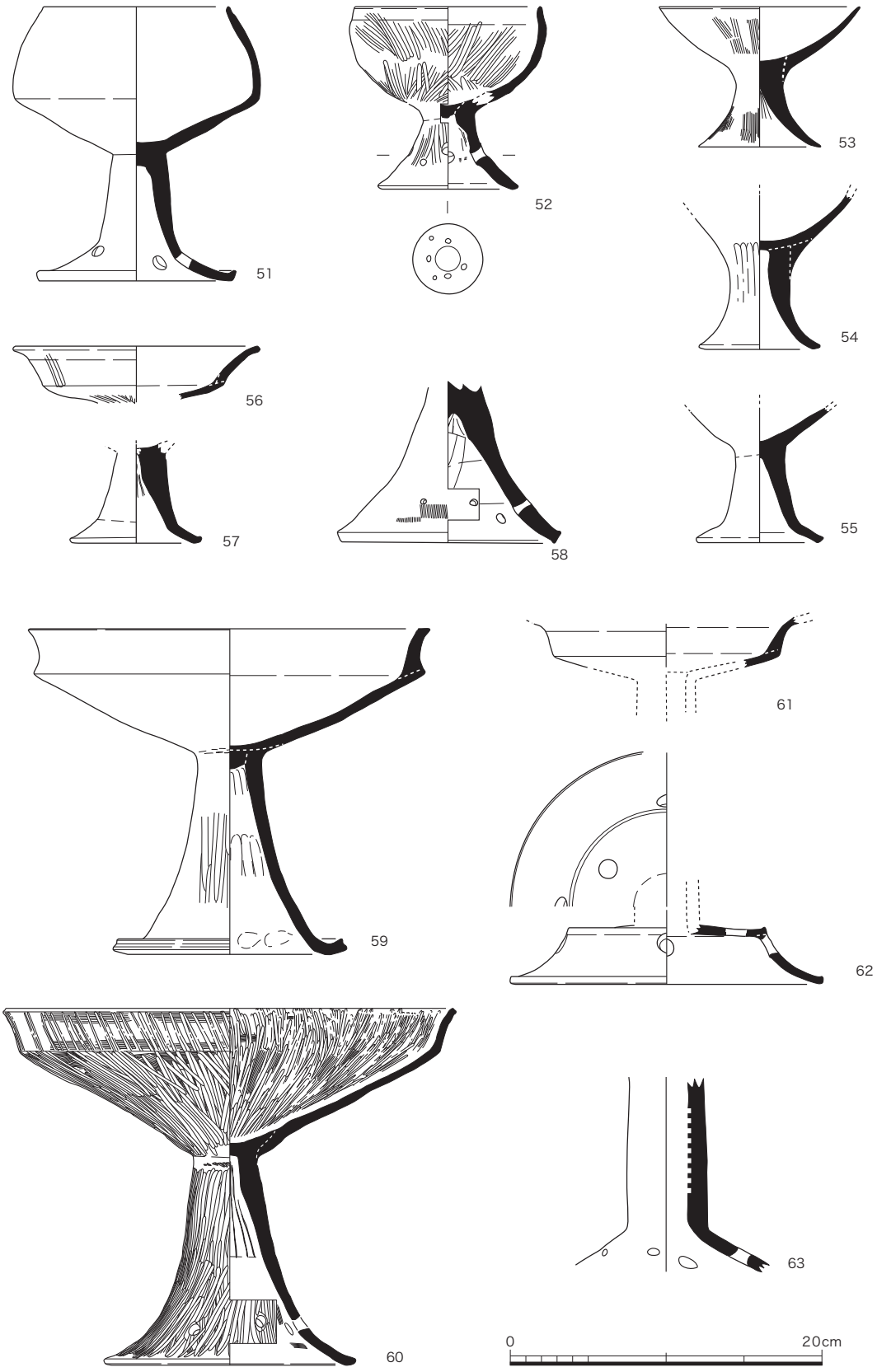
竪穴建物の特徴としては、中期の SH13、後期の SH04・14 などいずれも直径 8 m以上の大型建物であり、特に後期の建物は数回建て替えられていること、中期の竪穴建物 SH13 と後期末の



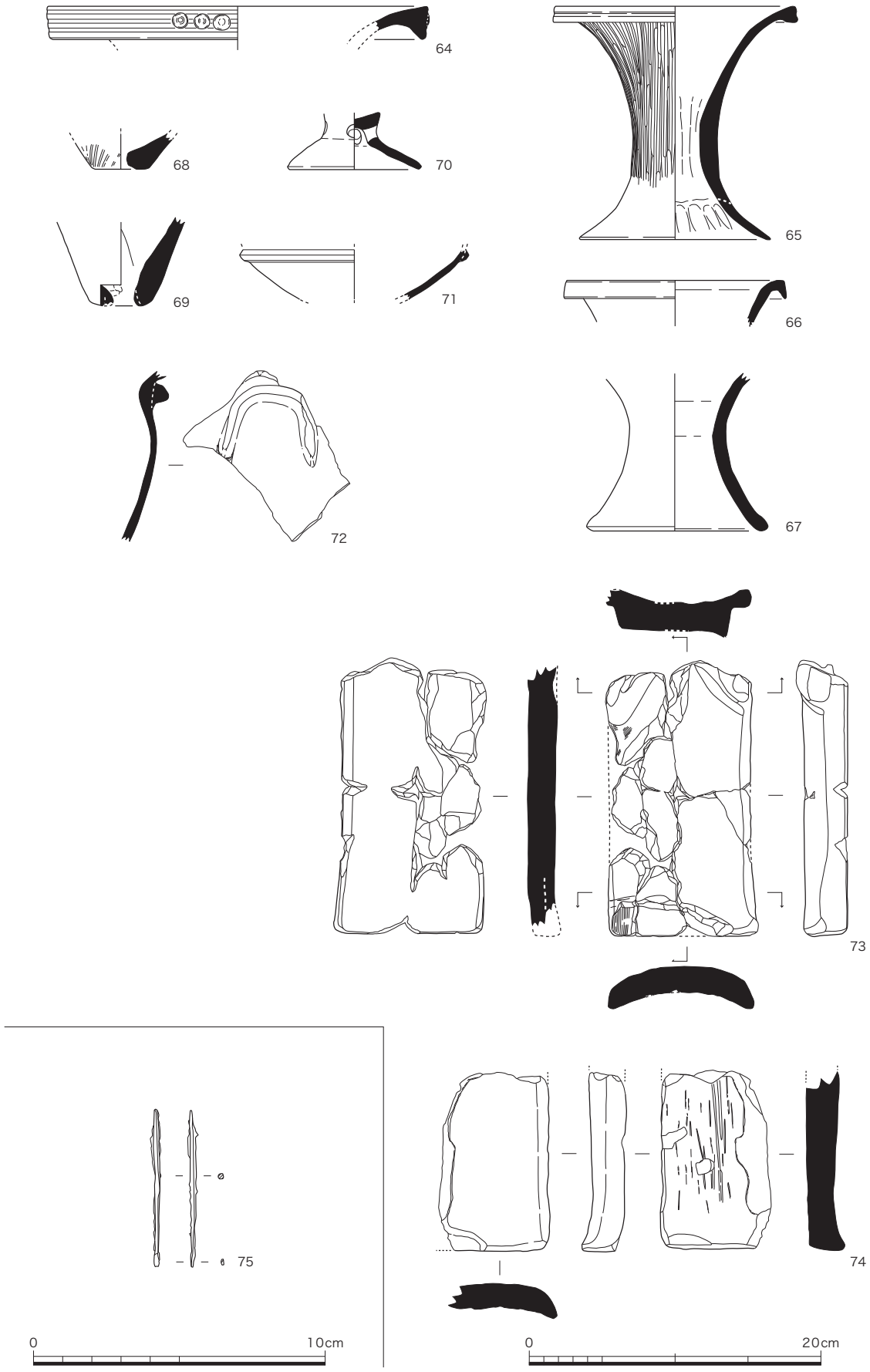
第 1 –14 図　溝 SD08 出土遺物実測図– 1 （1/4）



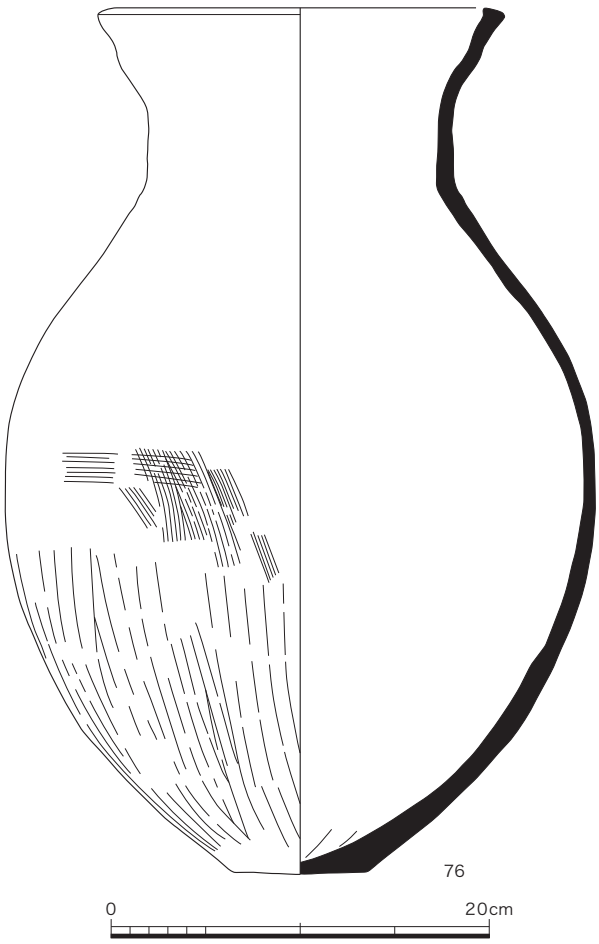
第 1 –15 図　溝 SD08 出土遺物実測図– 2 （1/4）



第 1 –16 図　溝 SD08 出土遺物実測図– 3 （1/4）



第 1 –17 図　溝 SD08 出土遺物実測図– 4 （1/2・1/4）



第 1 –18 図　竪穴建物 SH13 出土遺物実測図（1/4）

竪穴建物 SH11 には、排水溝が建物外の東方に掘られていることなどがあげられる。建物の西半部しか検出されていない竪穴建物 SH04・14 についても排水溝を伴う可能性は高い。

集落の存続期間は弥生時代中期後葉から後期末まで継続することが判明した。さらに後期には環濠集落となり、集落内では鉄製品を所有し、土製鋳型による金属器生産を行うなど、乙訓地域の弥生時代後期集落のなかでも有力な集落であったことが想定される。また土器からは近江地域、河内地域はもちろん、瀬戸内地域との交流も窺い知ることができる。

本調査後、調査地周辺域では複数回の発掘調査が行われ、長法寺遺跡に関する資料が増加している。また長法寺遺跡に接する丘陵上からは後期に属する高地性集落の谷山遺跡が発見され、長法寺遺跡と谷山遺跡が密接な関係を有するものであることが指摘されている。

今後、長法寺環濠集落の規模や構造、時期的変遷、土器組成の詳細を検討し、谷山遺跡との関係をより具体的に検証することが望まれる。

（小田桐　淳）

付表 1－1　出土遺物観察表

器形	番号	法量（cm）			色調	調整	地区 層位	備考
		口径	器高	底径				
甕	1	12.8	14.3	3.9	内面：淡黄褐色 外面：淡赤褐色	内面：ヘラケズリ　外面：体部にナデ、底部はタタキ後ナデ	SH11	
	2	13.0	21.15	3.4	内面：灰褐色 外面：淡茶褐色	内面：ヘラケズリ　外面：体部上半部はナデ、下半部はタタキ	SH11	
	3	15.2	(6.9)	－	浅黄色	内面：ナデ　外面：ナデの後に竹管文、5条の櫛描直線文、列点文を施す	SH11	
	4	－	(7.6)	2.9	浅黄色	内外面：ナデ	SH11	
	5	14.8	(12.0)	－	にぶい黄褐色	内面：ケズリ後タテハケ　外面：タテハケ後に体部上半部に刻み目を施す	SH04	
	6	11.4	(11.6)	－	橙色	内面：ケズリ　外面：摩滅のため調整不明、頸部に 1 ヶ所穿孔	SH04	
	7	12.5	16.4	7.0	内面：黒灰色 外面：黄褐色	内面：ケズリ　外面：ナデ、口縁端面に沈線を 2 条施す	SH04	
高杯	8	－	(5.1)	－	にぶい黄橙色	内面：ナデ　外面：縦方向のヘラミガキ	SH04	
紡錘車	9	幅 5.8	長 5.9	厚 3.3	淡黄褐色	ナデ	SH04 A 区床直	
甕	10	10.2	(4.4)	－	明赤褐色	内面：ナデ　外面：ハケ	SK12	
	11	14.4	(3.4)	－	明黄褐色	内面：ナデ　外面：幅広い口縁端面に 3 条の擬凹線を施す	SK12	
高杯	12	－	(5.1)	5.7	橙色	内面：ナデ　外面：摩滅のため調整不明	SK12	
鉢	13	12.6	8.7	3.8	内面：黄褐色 外面：淡赤褐色	内面：ナデ　外面：上半部はナデ、下半部は板ナデ	SK12	
	14	39.6	(8.15)	－	内面：黄橙色 外面：褐灰色	内面：タテハケ　外面：摩滅のため調整不明	SK12	
高杯	15	－	(6.0)	－	橙色	内面：ナデ　外面：タテハケ	SK12	円形透かし
	16	－	(10.0)	－	浅黄橙色	内外面：摩滅のため調整不明	SK12	
甕	17	9.8	11.9	5.0	淡橙色	内面：摩滅のため調整不明　外面：脚部に指頭圧痕が残る	SH14	
器台	18	19.0	16.0	15.8	黄褐色	受部内面：縦方向のヘラミガキ　口縁部外面：4 条の擬凹線　脚柱部外面：ヘラミガキ　脚部外面：ナナメハケ後ヘラミガキを施す	SH14	円形透かし 2 段
鉢	19	－	(10.85)	－	橙色	内外面：ナデ	SH14	
器台	20	－	(12.1)	15.1	淡黄橙色	脚柱部内面：ナデ　脚柱部外面：タテハケ 脚部内面：ヨコハケ　脚部外面：タテハケ	SH14	円形透かし 3 方 2 段

器形	番号	法量（cm）			色調	調整	地区 層位	備考
		口径	器高	底径				
紡錘車	21	幅 7.6	長 7.7	厚 2.9	暗褐色	外面：ナデ　側面：刻み目を施す	SH14 D-7 区 壁溝埋土	
広口壺	22	11.9	21.4	5.5	淡黄白色	内面：口縁部ナデ、体部ハケ後ナデ　外面：体部上半部はタテハケ、下半部にナナメハケ	SD08 D-1 区 3 層	
	23	14.0	(28.0)	6.0	明橙色	内面：口縁部はヨコハケ、体部はヘラケズリ　外面：ハケ後ヘラミガキ	SD08 B-1 区 3 層	黒斑
	24	11.6	(5.2)	–	淡橙色	内面：ナデ　外面：ナデ、口縁端面に 1 条の擬凹線	SD08 A-1 区 1 層	
	25	19.0	(6.0)	–	暗茶灰色	内面：ヨコハケ　外面：体部はタテハケ、口縁端面に 1 条の擬凹線	SD08 A-2 区 3 層	
	26	17.7	(12.1)	–	茶褐色	内面：ナデ　外面：体部ハケ、口縁部はナデ	SD08 A 区 3 層下	
	27	15.7	(8.4)	–	内面：淡黄白色 外面：淡橙白色	内面：ナナメハケ後ヘラミガキ　外面：タテハケ後ヘラミガキ、口縁端面に 3 条の擬凹線	SD08 西壁 3･4 層	
	28	–	(13.1)	3.8	内面：淡黄白色 外面：橙白色	内面：体部に指頭圧痕　外面：調整不明	SD08 B 区 3 層下	
長頸壺	29	10.3	(22.0)	–	内面：暗茶褐色 外面：暗橙褐色	頸部内面：ナナメハケ後ナデ　頸部外面：タテハケ後ヘラケズリ　体部内面：ヘラケズリ後ナデ　体部外面：ハケ後ヘラケズリ	SD08 B-C 区 4 層	
	30	–	(16.1)	–	内面：淡橙褐色 外面：淡黄褐	頸部内面：ナナメハケ　頸部外面：タテハケ　体部内面：ヘラケズリ　体部外面：調整不明	SD08 C-2 区 3 層	
	31	11.2	24.2	5.8	淡黄褐色	頸部内面：ヨコハケ　頸部外面：タテハケ　体部内面：タテハケ後ナデ　体部外面：タテハケ	SD08 C-1 区 4 層	
	32	13.5	(13.3)	–	淡茶褐色	頸部内面：ヨコハケ　頸部外面：タテハケ　体部内面：ヘラケズリ　体部外面：タテハケ	SD08 B-C 区 4 層	
短頸壺	33	9.6	20.7	4.45	淡橙黄色	頸部内面：ナデ　頸部外面：ナデ　体部内面：上半部は縦方向にユビナデ、下半部にナナメハケ　体部外面：タタキ	SD08	
	34	9.7	18.5	5.3	内面：淡褐色 外面：淡黄白色	内面：体部上半部はナナメハケ後ナデ、下半部はハケ後ヘラケズリ　外面：底部はヘラミガキ	SD08 D-1 区 3 層	
	35	11.7	20.1	5.2	内面：淡灰褐色 外面：淡黄褐色 ～淡褐色	内面：体部下半部はヘラケズリ　外面：頸部に棒状刺突文を施す	SD08 B-C 区 4 層	
ミニチュア壺	36	7.7	7.9	3.8	淡橙白色	内外面：ナデ	SD08 D-1 区 3 層	
	37	8.8	10.2	2.9	暗黄褐色	内面：摩滅のため調整不明　外面：体部下半部にタテハケ残る	SD08 サブトレ 2 層	
甕	38	10.2	15.2	4.2	内面：淡褐色 外面：淡茶褐色	内面：ヨコハケ後ナデ、体部は縦方向のヘラケズリ　外面：体部にナナメハケ、タテハケ	SD08 C-1 区 4 層	
	39	13.2	(12.6)	–	内面：黒茶色 外面：明褐色～茶黒色	内面：体部はヘラケズリ　外面：体部はタテハケとヨコハケ	SD08 C-1 区 4 層	外面スス付着

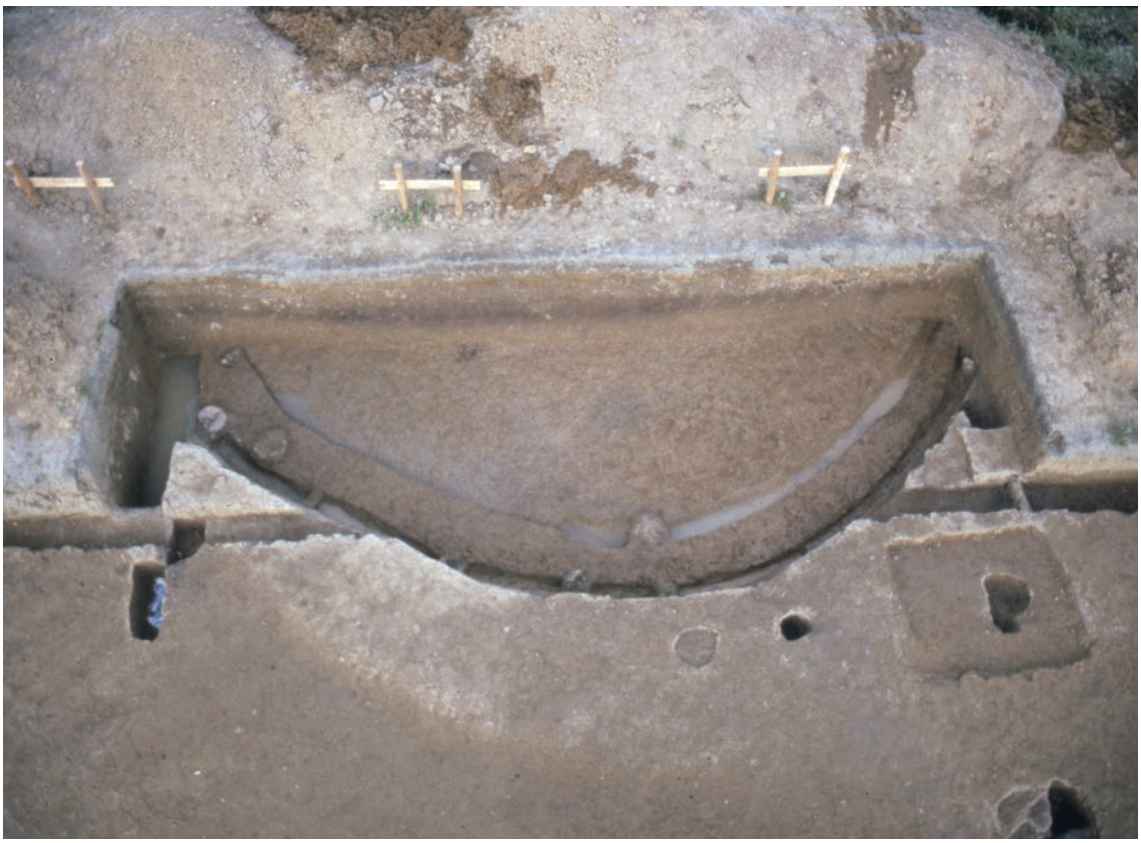
器形	番号	法量（cm）			色調	調整	地区 層位	備考
		口径	器高	底径				
甕	40	12.0	21.0	3.5	橙白色	内面：体部下半部は縦方向のヘラケズリ 外面：体部の一部にタテハケ	SD08 D区中央３層	
	41	12.8	21.0	4.4	黄褐色	内面：ケズリ　外面：上半部はナデ、下半部は板ナデ	SD08 東壁４層	
	42	13.5	22.0	5.0	淡茶褐色	内面：頸部に指頭圧痕、体部はヘラケズリ 外面：タテハケ後ヘラミガキ	SD08 C-1 区４層	
	43	14.5	(7.1)	–	内面：暗橙白色 外面：淡橙白色	内面：ヨコハケ後ナデ　外面：体部上半部はナデ、下半部はタテハケ、口縁端面に１条の沈線	SD08 西壁 3･4 層	
	44	17.0	(4.9)	–	暗灰褐色	内面：体部はヘラケズリ　外面：口縁端面に擬凹線３条	SD08 C-1 区４層	
	45	19.1	(10.6)	–	内面：橙白色 外面：淡橙褐色	内面：体部上部はナナメ方向のナデ、下部はヘラケズリ　外面：体部上半部はナナメハケ後ナデ、下半部はナナメハケ、口縁端面に２条の擬凹線	SD08 B-C 区４層	
	46	12.9	(7.0)	–	暗黄灰褐色	内外面：調整不明	SD08 C-2 区３層	
	47	15.6	(4.1)	–	内外面：黄橙色 断面：黒灰色	内外面：調整不明	SD08 A 区３層下	
	48	17.7	(3.8)	–	内面：淡黄白色 外面：淡黄褐色	内面：体部はヘラケズリ　外面：口縁端面に４条の擬凹線	SD08 B-C 区４層	
	49	–	(14.1)	5.4	淡黄褐色	内面：体部上半部はナナメナデ、下半部はハケ　外面：体部下半部はヘラケズリ	SD08 B-1 区３層	
	50	11.0	8.1	3.2	淡黄褐色	内面：ヘラケズリ、一部に指頭圧痕　外面：体部下半部はタテハケ	SD08 C-1 区２層	
高杯	51	12.0	17.6	12.4	黄褐色	内外面：摩滅のため調整不明	SD08 C-1 区４層	円形透かし ５方
	52	12.0	11.7	9.0	淡橙褐色	杯部内面：縦方向のヘラミガキ　杯部外面：不定方向のヘラミガキ　脚部内面：ハケ後ナデ　脚部外面：縦方向のヘラミガキ	SD08 C-D 区３層	円形透かし ６方
	53	12.8	9.0	7.8	橙白色	杯部内面：ナデ　杯部外面：ハケ　脚部内面：ナデ　脚部外面：ハケ	SD08 C-1 区４層	
	54	–	(9.9)	7.8	内面：黄白色 外面：明赤灰色	内面：脚部はナデ　外面：脚部は縦方向のヘラミガキ	SD08 C-2 区３層	
	55	–	(8.65)	8.2	淡橙色	内面：ナデ　外面：杯部はナデ、脚部はヘラミガキ	SD08 D-1 区３層	
	56	15.8	(3.6)	–	内面：淡橙褐色 外面：暗黄褐色	内面：ヘラミガキ　外面：杯部上部は縦方向のヘラミガキ、下部はヘラケズリ後ヘラミガキ	SD08 C-1 区３層	
	57	–	(6.3)	8.2	乳白色	内面：ヘラケズリ　外面：ヘラミガキ	SD08 D-2 区３層	
	58	–	(10.4)	13.7	淡黄褐色	内面：ヘラケズリ　外面：ヘラミガキ、裾部に一部タテハケが残る	SD08 C-1 区４層	円形透かし

器形	番号	法量（cm）			色調	調整	地区 層位	備考
		口径	器高	底径				
高杯	59	25.7	20.9	15.0	乳橙色	杯部内面：ナデ　杯部外面：ヘラミガキ 脚部内面：ナナメ方向のナデ　脚部外面：縦方向のヘラミガキ、脚部と杯部の接合部に爪形状圧痕が残る	SD08 C-1 区 3 層	
	60	29.1	22.9	16.2	浅黄橙色	杯部内面：ヨコハケ後縦方向のヘラミガキ 杯部外面：ヨコハケ後ナナメ方向のヘラミガキ　脚部内面：ヨコハケ後ナデ　脚部外面：縦方向のヘラミガキ、脚部と杯部の接合部に刻み目	SD08 B-1 区 3 層	円形透かし 3 方
	61	–	(3.2)	–	内面：明黄褐色	内外面：調整不明	SD08 D-2 区 2 層	有段器台 杯部
	62	–	(3.8)	20.0	内面：明黄褐色 外面：淡黄褐	内外面：調整不明	SD08 D-2 区 2 層	有段器台脚部、円形透かし 4 方2段
	63	–	(12.5)	–	明黄褐色	内面：ナデ　外面：摩滅のため調整不明	SD08 B-1 区 3 層	円形透かし 6 方
器台	64	26.1	(2.3)	–	暗茶褐色	外面：口縁端面に 3 条の擬凹線、3 個 1 対の円形浮文	SD08 A-2 区 3 層	生駒西麓系胎土
	65	16.5	16.0	13.1	乳橙色	内面：ナデ　外面：口縁部はナデ後 1 条の沈線、脚柱部は縦方向のヘラミガキ	SD08 C-1 区 4 層	
	66	14.9	(2.85)	–	淡黄褐色	内外面：調整不明	SD08 D-2 区 2 層	
	67	–	(10.8)	12.4	淡黄白色	内外面：調整不明	SD08 B-2 区 3 層	
有孔鉢	68	–	(2.4)	4.0	淡黄白色	内面：摩滅のため調整不明　外面：タタキ	SD08 B-C 区 1 層	底部に穿孔
	69	–	(6.0)	4.3	内面：淡黄灰色 外面：暗黄褐色	内面：ヘラケズリ　外面：ヘラミガキ	SD08 サブトレ 2 層	底部に穿孔
脚	70	9.1	3.9	–	暗黄褐色	内外面：調整不明	SD08 D-2 区 3 層	円形透かし 4 方
鉢	71	–	(3.4)	–	内面：暗黄褐色 外面：淡黄褐色	摩滅のため調整不明	SD08 D-2 区 3 層	
	72	–	(11.7)	–	橙色	内外面：ナデ	SD08 A-2 区 2 層	
鋳型外枠	73	幅 (10.3)	長 (18.9)	厚 2.0	内面：淡灰褐色 外面：淡灰褐色 ～明橙白色	外面：ケズリ	SD08 西壁 3･4 層	
	74	幅 (7.6)	長 (12.3)	厚 2.7	にぶい黄橙色	内面：ケズリ　外面：ナデ	SD08 東壁 4 層	
針状鉄製品	75	幅 0.25	長 5.9	厚 0.2			SD08 2 層	
壺	76	21.5	45.9	7.3	淡黄褐色	外面：体部タタキ後ハケ、下半部はケズリ、口頸部は縦方向のハケ　内面：ナデ	SH13	

第 1 –19 図　調査地遠景（北から）

第 1 –20 図　調査地全景（北から）

第 1 –21 図　遺構検出状況（南から）



第 1 –22 図　竪穴建物 SH04 全景（西から）

第 1 –23 図　竪穴建物 SH04・遺物出土状況（西から）

第 1 –24 図　竪穴建物 SH13・遺物出土状況（南から）

第 1 –25 図　溝 SD08 全景（東から）

第 1 –26 図　溝 SD08 東壁断面（西から）

第 1 –27 図　溝 SD08・遺物出土状況（西から）

第 1 –28 図　溝 SD08・遺物出土状況（北から）

第 1 –29 図　溝 SD08・遺物出土状況（東から）

第 1 –30 図　出土遺物– 1

第 1 –31 図　出土遺物 – 2

第 1 –32 図　出土遺物 – 3

第 1 –33 図　出土遺物 – 4

第 1 –34 図　出土遺物 – 5

75

73

76

第 1 –35 図　出土遺物 – 6

2．長岡京跡右京第 459 次調査

～ 弥生時代　長法寺遺跡、溝出土資料 ～

調 査 地　長岡京市長法寺清水ヶ瀬２－３　　**地 区 名**　7ANJMN － 1 地区

調査期間　1994（平成６）年２月 16 日～３月４日　　**調査面積**　107㎡

時　　期　弥生時代　　**出土遺物**　15 箱

立　　地　段丘を覆う扇状地　　標高約 44 m

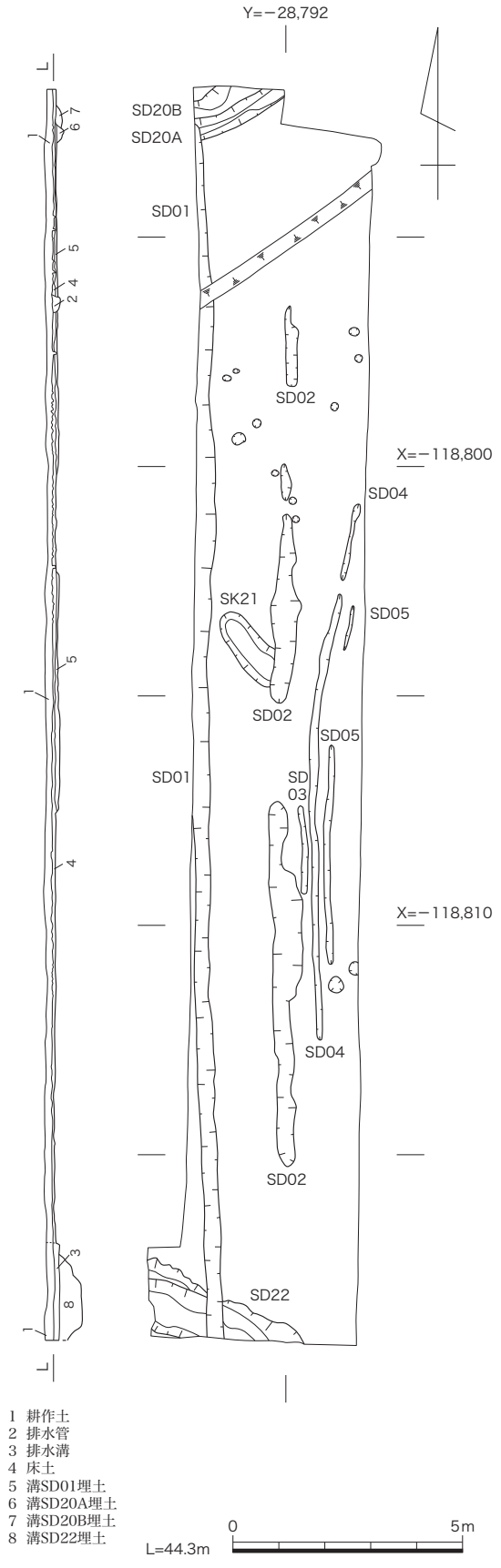
参考文献　「右京第 459 次調査略報」『センター年報』平成５年度　1995 年

調査の概要

調査地は西山丘陵の裾から東に広がる扇状地にあたり、周辺地域は主に田圃として利用されてきた。調査地の周辺では、右京第 228[(注1)]・288[(2)]・351[(3)] 次調査などが行われ、長法寺遺跡が弥生時代中期から後期にかけての環濠集落として周知されていた。また、南西約 300 mの丘陵上では右京第 237[(4)] 次調査が行われ、弥生時代後期の高地性集落である谷山遺跡が発見されている。

調査地は､直前まで畠地として利用されていたために盛土が施されていなかった。発掘調査は、幅約４mで長さ約 23 mの南北方向に長い調査区を設定し、まず、重機によって耕作土と床土の除去を行った。その後、作業員を動員して調査を進めた結果、調査区の南北両端で弥生時代の遺構を検出したため、遺構の範囲確認などを目的とした調査区の拡張を行った。なお、調査区の中心は第 VI 座標系 Y ＝−28,792、X ＝−118,805 に位置する。

第２－１図　発掘調査地位置図（1/5000）



第２－２図　調査区検出遺構図・土層図（1/150）

検出遺構

調査区の層序は、耕作土と床土が厚さ 0.3 m 程度堆積し、地山である淡黄褐色粘質土ないし砂礫土に至る。この地山面は平坦ではなく、西から東に向かって緩やかに傾斜していた。

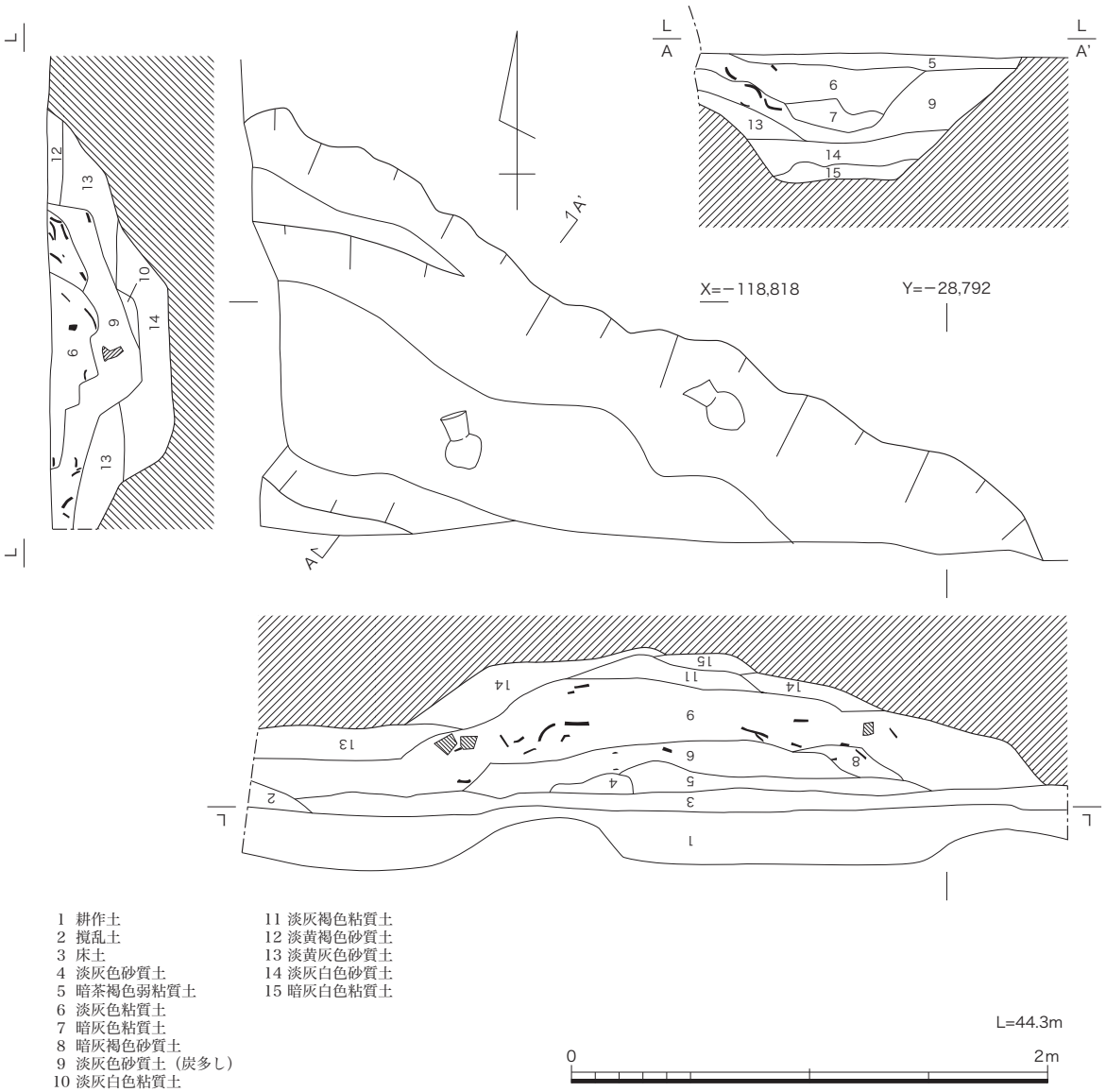
検出した遺構には、弥生時代後期の溝３条・土坑、近世以降の溝５条のほか、時期が明確でない小穴が 10 数基あり、これらすべてを地山面上で検出している（第２－２図）。

溝 SD22（第２－３～５図）　調査区の南西隅で、真北に対して西に 65° 程度振る溝を検出した。溝は最深部で約 0.6 mを測るが、底部の深さが一定でなく南東方向に傾斜している。溝の幅については調査区を拡張して確認に努めたが、調査区域内で南肩が検出されず確定できなかった。しかし、北肩の傾斜を考慮すれば、幅は 1.6 m程度と考えられる。

溝内には第５～ 15 層の 11 層に区分した堆積が認められた。断面観察により看取される溝の埋没過程は、第 12 ～ 15 層の堆積で溝が一旦埋没した後に、再掘削が行われる。そして、第７～ 11 層が堆積した段階で溝は放棄され、埋め立て土の可能性を持つ第５・６層によって完全に埋没したものと考えられる。また、第９層には炭化した木片が多数含まれていた。

溝埋土には多くの弥生土器が含まれており、その量は整理箱にして 10 箱程度になる。特に、第６～９層から出土する遺物が多く、一方で第 12・13 層には僅かしか遺物が含まれていない。

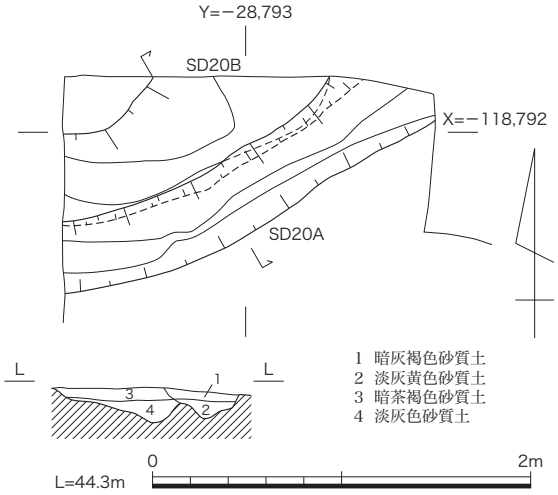
溝 SD20（第２－６・７図）　調査区の北西隅で重複する２条の溝を検出した。重複関係からより南側の新しい溝を溝 SD20A、古いものを溝 SD20B とした。溝の輪郭は円弧状を呈しており、幅は溝 SD20A が約 0.5 mと若干広く、溝 SD20B は約 0.3 mであった。深さは両溝と



第 2 − 3 図　溝 SD22 実測図（1/30）

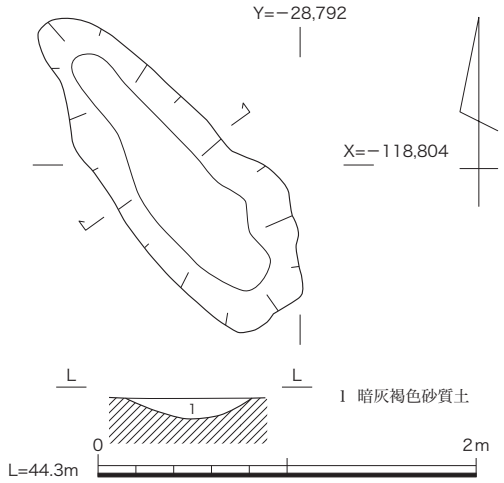
第 2 − 4 図　溝 SD22 堆積状況（北西から）

第 2 − 5 図　溝 SD22 遺物出土状況（北東から）



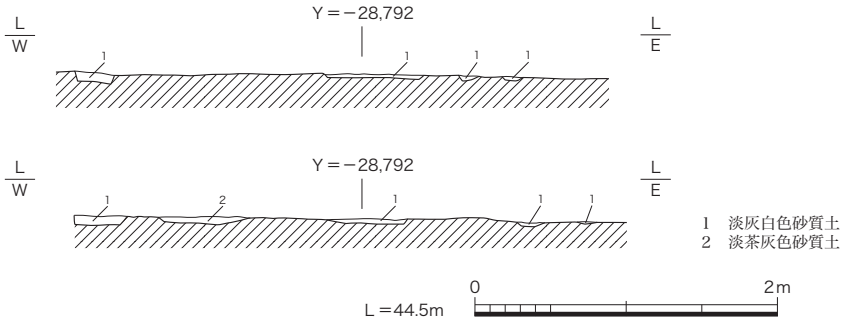
第 2 − 6 図　溝 SD20 実測図（1/40）

第 2 − 7 図　溝 SD20（北東から）



第 2 − 8 図　土坑 SK21 実測図（1/40）

第 2 − 9 図　土坑 SK21（北から）



第 2 −10 図　調査区横断面図（1/50）

もに約 0.2 mである。２条の溝からは弥生時代後期の土器が少量出土しているが、時期差を認めることはできなかった。

溝 SD20 は円弧状を呈しており、竪穴建物の周壁溝とも考えられる。竪穴建物周壁溝と想定した場合、建て替えに伴って溝 SD20A へ建物が若干拡張されたものと推測できる。なお、溝 SD20 の南北両側、想定される竪穴建物の内外では、検出面の高低差や異質な埋土などは確認できなかった。

土坑 SK21（第２－８・９図）　調査区のほぼ中央で検出した不整形な土坑である。土坑の規模は北西～南東方向の長さが約２ｍで、幅は約 0.7 ｍを測る。埋土には弥生時代後期の土器が細片となって含まれていた。

出土遺物

本調査では整理箱にして 15 箱の遺物が出土した。遺物には弥生時代・古墳時代・長岡京期・江戸時代のものがあるが、多くが溝 SD22 から出土した弥生時代のものである。

溝 SD22 出土遺物（第２－11 図、付表２－１）　出土遺物は概ね弥生時代後期の前半に位置付けられるが、中期末の特徴を有する遺物も僅かながら出土している。また、出土遺物は層序を意識した取り上げを行ったが、層位による時期差を明らかにできなかった。出土遺物には、広口壺・長頸壺・甕（在地系および近江系）・鉢・有孔鉢・高杯・器台があり、なかでも完形の長頸壺の存在や、高杯個体数の多さが目立っていた。

長頸壺の４はほぼ完全な形を残すもので、器高約 23cm、体部最大径約 15cm を測る。甕の 10・11 は近江系受け口状口縁を有する個体で、外面の口縁部下半と体部上半には櫛工具による列点文・横線文・波状文などが施されている。鉢の 12 についても体部上半に横線文・列点文が施されており、近江地域からの影響を窺うことができる。しかし、口縁部の受け口は不明瞭で、体部も球形に近い形態を呈していた。

溝 SD20・土坑 SK21 出土遺物（第２－12 図、付表２－２）　遺物は整理箱にして１箱程度が出土している。

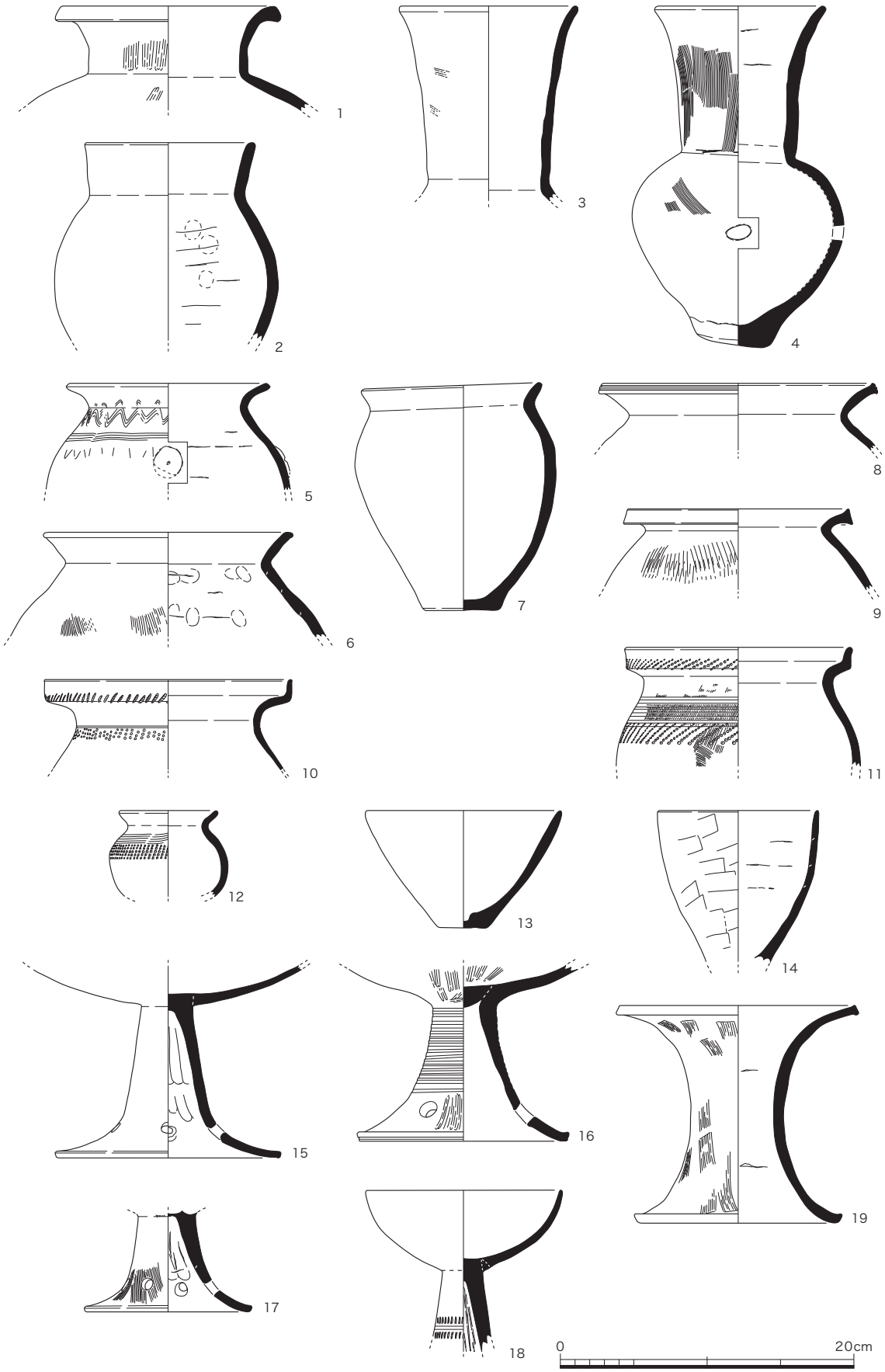
溝 SD20 からは 20 の弥生土器底部片の他、高杯・器台の破片が、土坑 SK21 では 21・22 の底部片などが出土している。溝 SD20・土坑 SK21 ともに時期的な検討に耐える資料は得られなかったが、溝 SD22 に近い時期のものと考えられる。

小　　結

今回の調査地は、推定される長法寺遺跡のほぼ中央に位置していた。調査では、弥生時代後期前半の大規模な溝１条と竪穴建物周壁溝とも考えられる溝２条を検出している。長法寺遺跡およびその周辺の扇状地では、本調査地点・右京第 228・288・351・482[(5)]・614[(6)]・846[(7)]・1070[(8)] 次調査の８地点で弥生時代後期の大規模な溝が検出されている。

このうち、竪穴建物との位置関係などから、集落の居住域を画するものと考えられるのが、右京第 228 次調査の溝 SD08、右京第 288 次調査の溝 SD06、右京第 614 次調査の溝 SD02 である。これらの溝は、断面形状がＵ字状・Ｖ字状・逆台形を呈し、規模は幅約３ｍ、深さ１ｍ前後を測る。本調査で検出した溝 SD22 はこれらの溝より小規模であるが、これは溝 SD22 が最も遺構の遺存状態が悪い調査地西辺で検出されたことに起因するものとも考えられる。しかし、溝 SD22 の埋土には砂や砂礫が多く含まれるのに対して、右京第 228 次調査などの溝では砂礫の堆積が顕著に認められない。

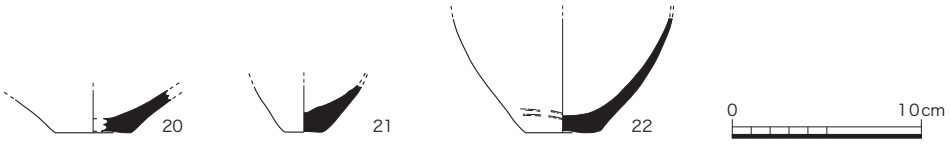
本調査の溝 SD22 のように、埋土に砂礫の堆積が顕著な例は、右京第 482 次調査地点において検出された溝 SD01・02 である。右京第 482 次調査は本調査地の南約 50 ｍで行われており、



第 2 –11 図　出土遺物実測図– 1 （1/4）

付表２－１　出土遺物観察表１

器形	番号	法量（cm）			調整等	地区 層位	残存率
		口径	器高	底径			
広口壺	1	15.4	(7.1)	–	内面：調整不明、外面：口縁～頸部上半ヨコナデ・頸部下半と肩部ミガキ 口縁外面を下方に肥厚	第６層	口縁部2/3
短頸壺	2	11.6	(13.5)	–	内外面：ナデ（口縁部外面にやや強いナデ）、内面：体部上半に指圧痕	東区 第９層	口縁部～ 体部1/2
長頸壺	3	12.2	(13.3)	–	内外面：口縁端部ナデ、内面：頸部上半ナデ、外面：頸部ナナメハケのちナデ	第６層	口頸部1/3
	4	11.7	23.3	5.1	内外面：口縁部～頸部上部ヨコナデ、内面：頸部下半～底部ナデ、外面：頸部タテハケ・体部ナナメハケのちナデ・底部未調整 体部最大径直下に穿孔１箇所	東区 第９層	ほぼ完形
甕	5	13.9	(7.3)	–	内面：口縁部ヨコナデ・体部ナデ、外面：調整不明 肩部外面に波状文（３条１帯）・横線文（４条１帯）・波状文、体部最大径上に直径２cmの円形浮文（浮文中央に刺突）	東区 第９層	口縁部～ 体部1/3
	6	17.0	(7.1)	–	内外面：口縁部ヨコナデ、内面：体部指圧痕のちナデ、外面：肩部ナデか・体部タテハケ 口縁端部を僅かに外側へ摘む	第14層	口縁部～ 体部2/5
	7	12.3	15.5	5.1	内外面：ヨコナデ、内面：体部ナデ、外面：ナデか	東区 第６層	ほぼ完形
	8	19.0	(4.6)	–	内外面：調整不明 口縁端部を上下に拡張、外端面に２条の沈線	東区北 第14層	口縁部～ 体部1/4
	9	15.1	(5.5)	–	内外面：口縁部ヨコナデ、内面：体部ナデ、外面：タテハケ	東区 第６層	口縁部は ほぼ完存
甕（近江系）	10	16.9	(6.2)	–	内外面：調整不明 受け口状口縁の顎部に櫛描刺突文、頸部に１条の沈線・櫛描刺突列点文（３本１単位）	第９層	口縁部1/6
	11	15.5	(8.1)	–	内外面：口縁部ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ナナメハケ 受け口状口縁の顎部に櫛描刺突列点文（６本１単位）、肩部に櫛描横線文（10条１帯）・櫛描刺突列点文（10本１単位）、体部最大径直下に波状文	第14層	口縁部は ほぼ完存
鉢	12	6.8	(5.9)	–	内外面：ナデ 口縁部は僅かに受け口状を呈する、体部上半に櫛描横線文（５条１帯）・櫛描刺突列点文（５本１単位）	第６層	口縁部～ 体部2/3
	13	13.4	8.0	3.4	内外面：調整不明 底部内面が窪む	第14層	完形
	14	11.0	(10.3)	–	内外面：口縁端部ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ケズリのちナデ	第９層	底部付近 欠損
高杯	15	–	(13.1)	15.4	内面：脚部ナデ、外面：ミガキか 脚部に透孔（４方向か）	第６層	杯部下半 ～裾部2/5
	16	–	(11.9)	14.5	内外面：脚端部ヨコナデ、内面：杯部ミガキ・脚部ナデ、外面：杯部・脚部下半ミガキ 脚部上半と外端面に沈線文、脚部に透孔（３方向）	第６層	杯部下半 ～裾部2/3
	17	–	(6.8)	15.4	内面：脚部上半未調整・脚部下半～端面ナデ、外面：脚部タテハケか 脚部に透孔（６方向）	西区 第14層	脚部はほ ぼ完存
	18	13.4	(11.0)	–	内外面：調整不明 脚部外面に篦描斜線文のち沈線文	東区 第９層	杯部～脚 部上半1/2
器台	19	16.5	14.8	14.2	内外面：口縁端部と裾端部付近ヨコナデ、内面：ナデ、外面：タテハケ	西区 第14層	残存率全 形の3/4



第２–12 図　出土遺物実測図– ２（1/4）

付表２– ２　出土遺物観察表２

器形	番号	法量（cm）			調整	出土遺構等	残存率
		口径	器高	底径			
壺ないし甕	20	–	(2.3)	4.0	内面：ナデか、外面：調整不明	SD20A	体部下半～底部 1/4
	21	–	(2.5)	2.0	内外面：調整不明	SK21 北部	体部下半～底部は完存
	22	–	(6.0)	4.0	内面：ナデか、外面：調整不明（底部付近にタタキ痕跡を残す）	SK21 セクション内	体部下半～底部は完存

調査区の南半部では開析谷も確認されている。本調査の溝 SD22・右京第 482 次調査溝 SD01・02 のように、開析谷に近接して検出された溝は、右京第 228 次調査地点などのものとは異なり、谷への排水を主目的としたものとも考えられる。

一方、本調査地点の北側では右京第 351 次調査において大規模な溝が検出されているが、周辺調査例が少なく溝の性格は明らかでない。また、本調査地点との間にも東西方向の開析谷が埋没しているものと考えられ、一連の溝とすることは困難であろう。

現在得られている知見から長法寺遺跡の姿を復元することは難しいが、最も南側の右京第 228 次調査地点周辺から、本調査地周辺、右京第 351 次調査地点周辺の少なくとも３箇所に集落居住域が点在していた可能性があり、それぞれ、居住域を画するための溝を有していたことが想定される。しかし、これら居住域の相互関係は明らかでなく、長法寺遺跡の規模など重要な問題の解明には、更に詳細な検討が必要である。

（中島　皆夫）

注１）　小田桐　淳「右京第 228 次調査概要（１）」『長岡京市報告書』第 18 冊　1987 年
　　「右京第 228 次調査概要（２）」『長岡京市報告書』第 20 冊　1988 年
　　本書所収
２）　木村泰彦「右京第 288 次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和 62 年度　1989 年
３）　千喜良　淳「右京第 351 次調査概報」『長岡京市センター年報』平成２年度　1992 年
４）　木村泰彦「右京第 237 次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和 61 年度　1988 年
５）　山本輝雄「右京第 482 次調査概報」『長岡京市センター年報』平成６年度　1996 年
６）　原　秀樹「右京第 614 次調査略報」『長岡京市センター年報』平成 10 年度　2000 年
７）　木村泰彦「右京第 846 次調査概報」『長岡京市センター年報』平成 16 年度　2006 年
８）　平成 26 年度報告予定

第 2 –13 図　調査区全景（南から）

第 2 –14 図　溝 SD22 完掘状況（北西から）

第 2 –15 図　溝 SD22 完掘状況（北東から）

第２–16 図　調査区全景（北から）

3．長岡京跡右京第 227 次調査

～ 弥生・古墳・飛鳥時代　今里遺跡、竪穴建物・掘立柱建物等出土資料 ～

調 査 地　長岡京市今里四丁目 253 － 5 他　　**地 区 名**　7ANIAE － 5 地区

調査期間　1986（昭和 61）年 3 月 27 日～ 5 月 23 日　　**調査面積**　335㎡

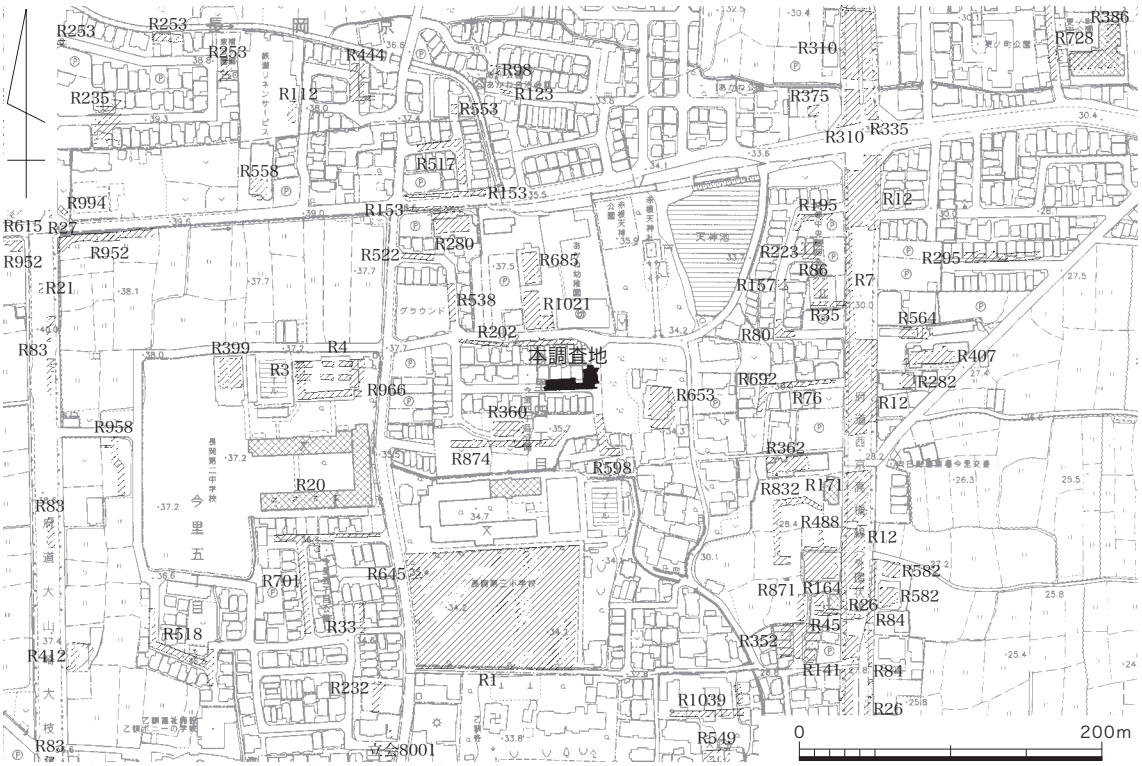
時　　期　弥生時代、古墳時代、飛鳥時代　　**出土遺物**　40 箱

立　　地　低位段丘　　標高 36 m

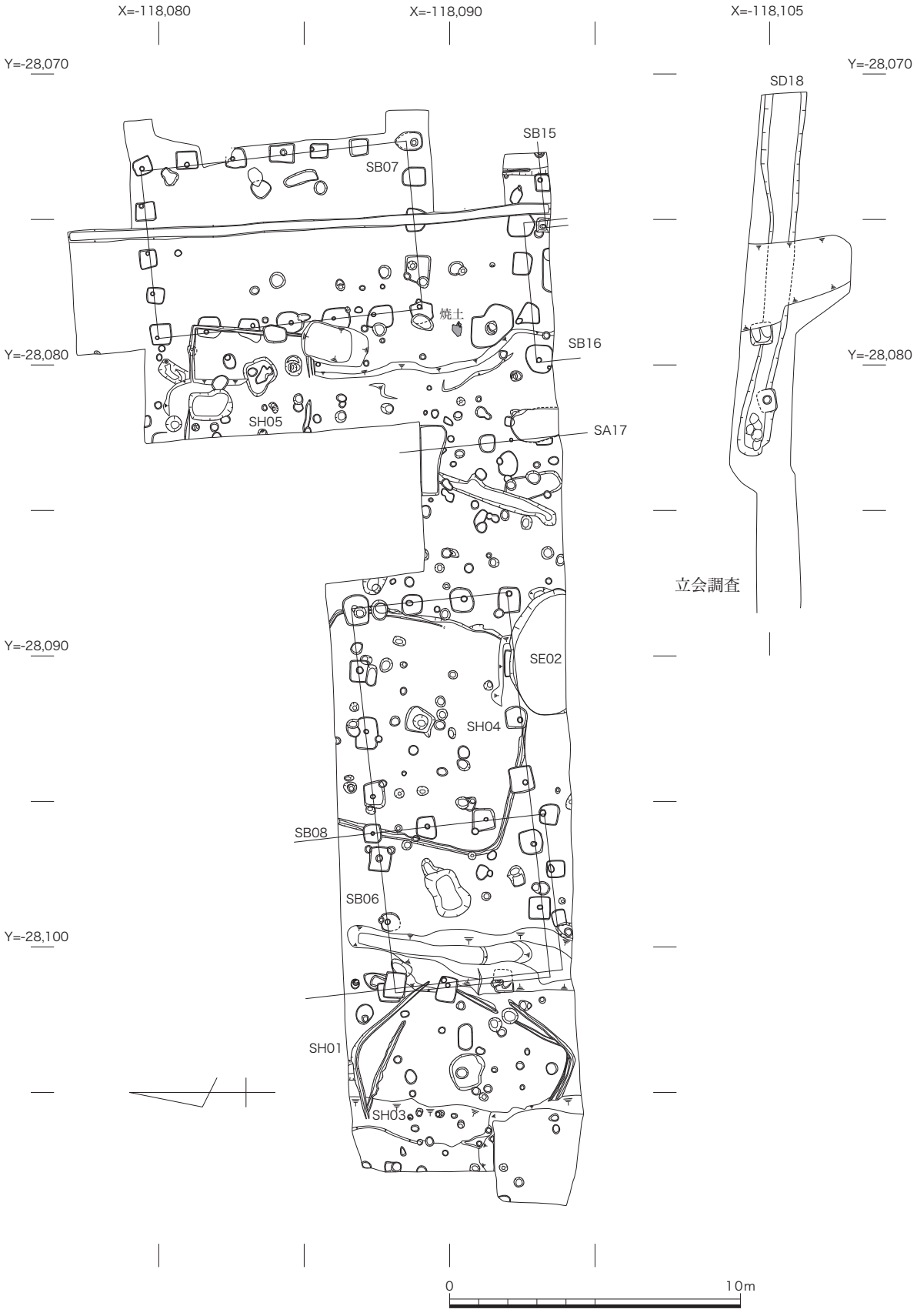
参考文献　「右京第 227 次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和 61 年度　1988 年

調査の概要

本調査は宅地造成工事に伴って実施したものである。調査地は西山山地から南東に広がる低位段丘上の東端に位置していて、すぐ東には南北方向に延びる段丘崖がある。この段丘上と東側の氾濫原一帯には、旧石器時代から中世にかけての複合遺跡である今里遺跡が広がっていて、これまでの調査により多くの遺構、遺物が検出されている。今回の調査地は竹薮として利用されていたが、開発に伴って伐採・整地が行われていた。調査は開発地の道路予定部分に幅 4 m、南北 16 m、東西 34 mの「L」字型トレンチを設定して行った。調査の結果、弥生時代の竪穴建物、古墳時代の掘立柱建物と溝、飛鳥時代の竪穴建物、江戸時代の井戸などが検出され、遺構追求のため適宜拡張を行った。また調査地南側で調査と並行して行われた擁壁工事中に古墳時代の溝と遺物が検出されたことから、急遽立会調査を行っている。



第 3 – 1 図　発掘調査地位置図（1/5000）

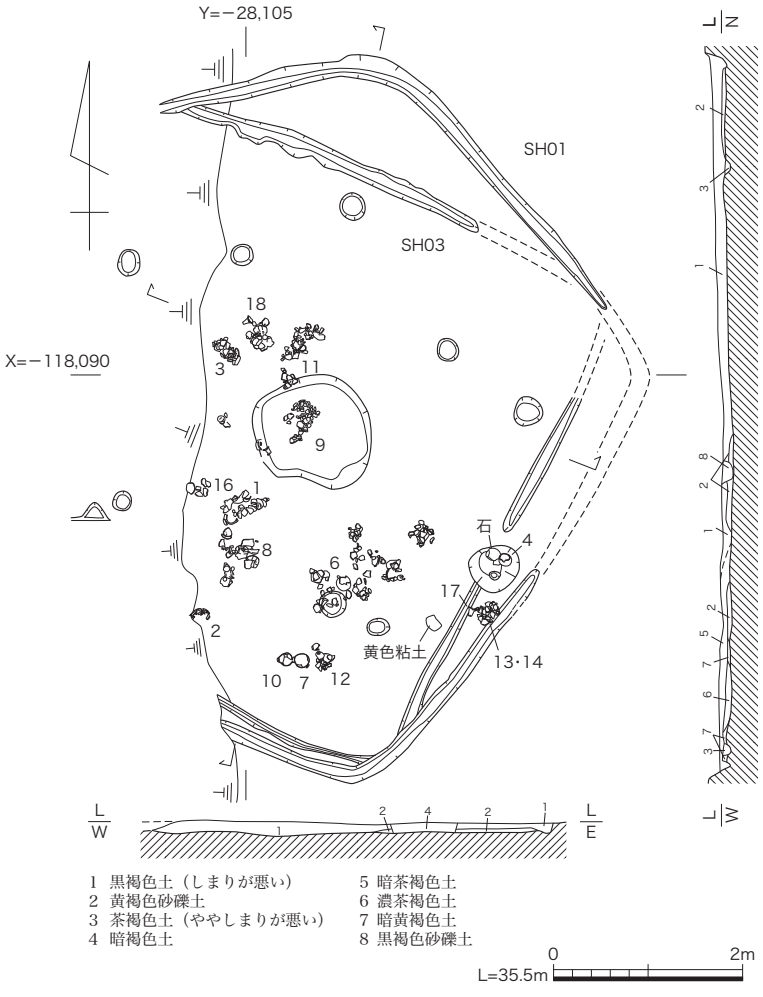


第３－２図　調査区検出遺構図（1/200）

検出遺構

弥生時代の遺構　竪穴建物が３棟検出された。このうちの２棟は同一個所に建て替えられたものである。

竪穴建物 SH01・03（第 3–3 図）　調査地西端で検出された２棟の竪穴建物で、西側を地境溝によって削平されているが、平面隅円方形のもの（SH03）から平面五角形のもの（SH01）へと建て替えられている。平面隅円方形の竪穴建物 SH03 は、南北 5.8 m、東西 5 m以上、深さ 0.2 mで、周囲には幅 0.1 ～ 0.25 mの周壁溝が巡っている。主柱穴は抽出が困難であるが、対角線上に位置するものを主柱穴として認識している。直径 0.2 ～ 0.3 m、深さ 0.1 ～ 0.3 mで、柱痕は確認できない。平面五角形の竪穴建物 SH01 は竪穴建物 SH03 の南辺をほぼ共有して、北側に約 1 m、東側に約 0.5 m拡張する形で平面五角形にしている。削平されている西側も同様の状況と考えられる。南北約 7 m、深さ 0.2 mで、幅約 0.2 mの周壁溝を持っている。主柱穴は対角線上に五角形に位置するものを抽出しており、直径 0.2 ～ 0.3 m、深さ 0.1 ～ 0.4 mで、柱痕は確認できない。中央付近は直径約 1.2 mにわたってわずかに 5 cm ほど窪んでいるが、焼土・炭などは確認できないため、炉は存在しなかったとみられる。また東辺の中央には直径 0.5 m、深さ 0.4 mの小穴があり、上面から線刻を持つ長頸壺（第３–11 図４）が出土している。このほか小穴の南西では黄色粘土の堆積が認められた。遺物は床面の中央から南半部にかけて、弥生時代後期の遺物がまとまって出土している。



第３–３図　竪穴建物 SH01・03 実測図（1/80）

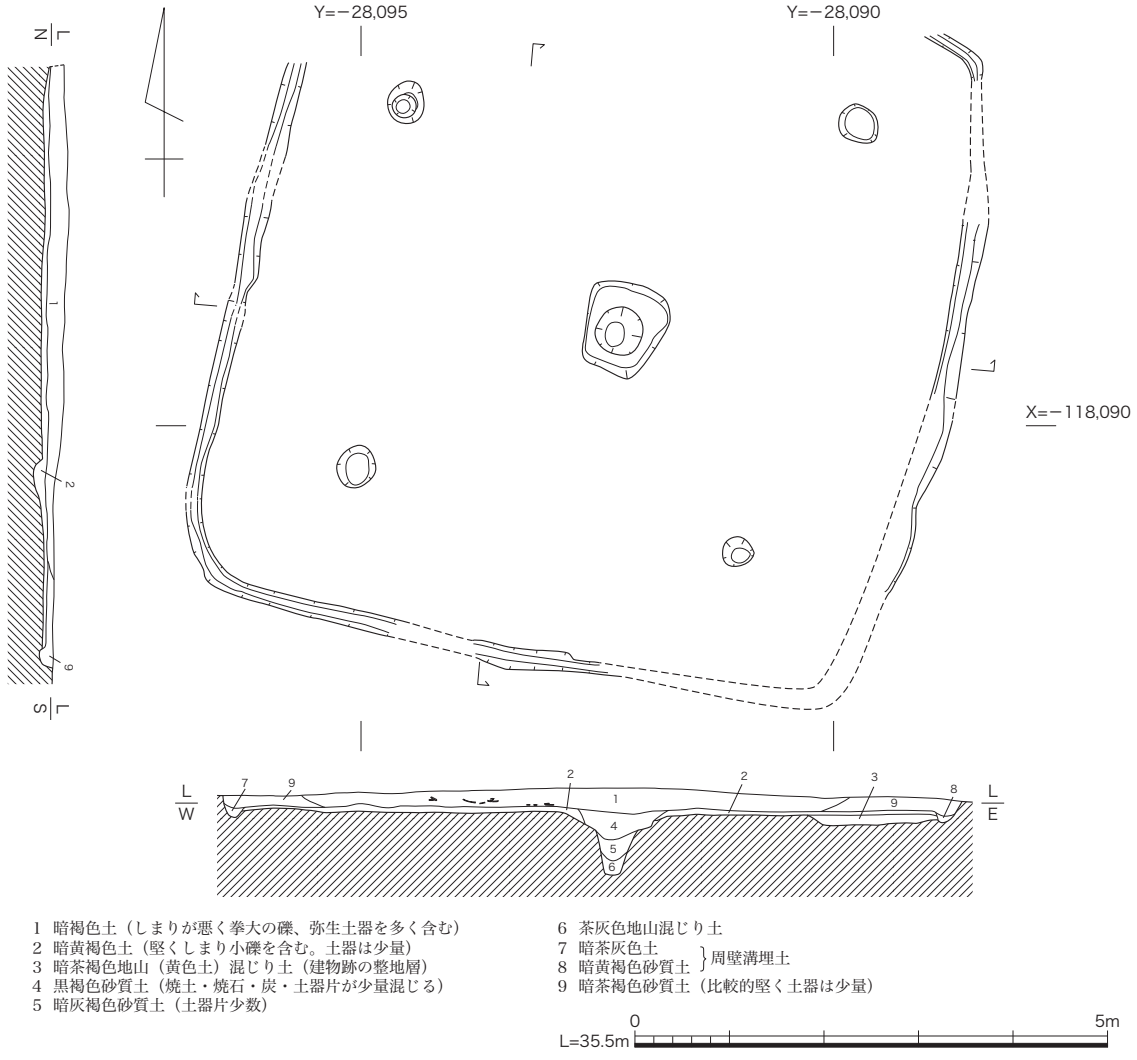
竪穴建物 SH04（第３–４図）

調査地中央付近で検出された平面隅円方形の大型の竪穴建物である。東西 7.8 m、南北 7.5 m以上、深さ 0.3 mで、主柱穴は直径約 0.4 m、深さ 0.2 ～ 0.4 mで、明確な柱痕跡は確認できなかった。竪穴建物の中央には炉があり、上面では一辺約 1 mの台形を呈し、底部付近では円形となる。深さは 0.65 mで、上層には焼土・炭・焼け石と土器片が

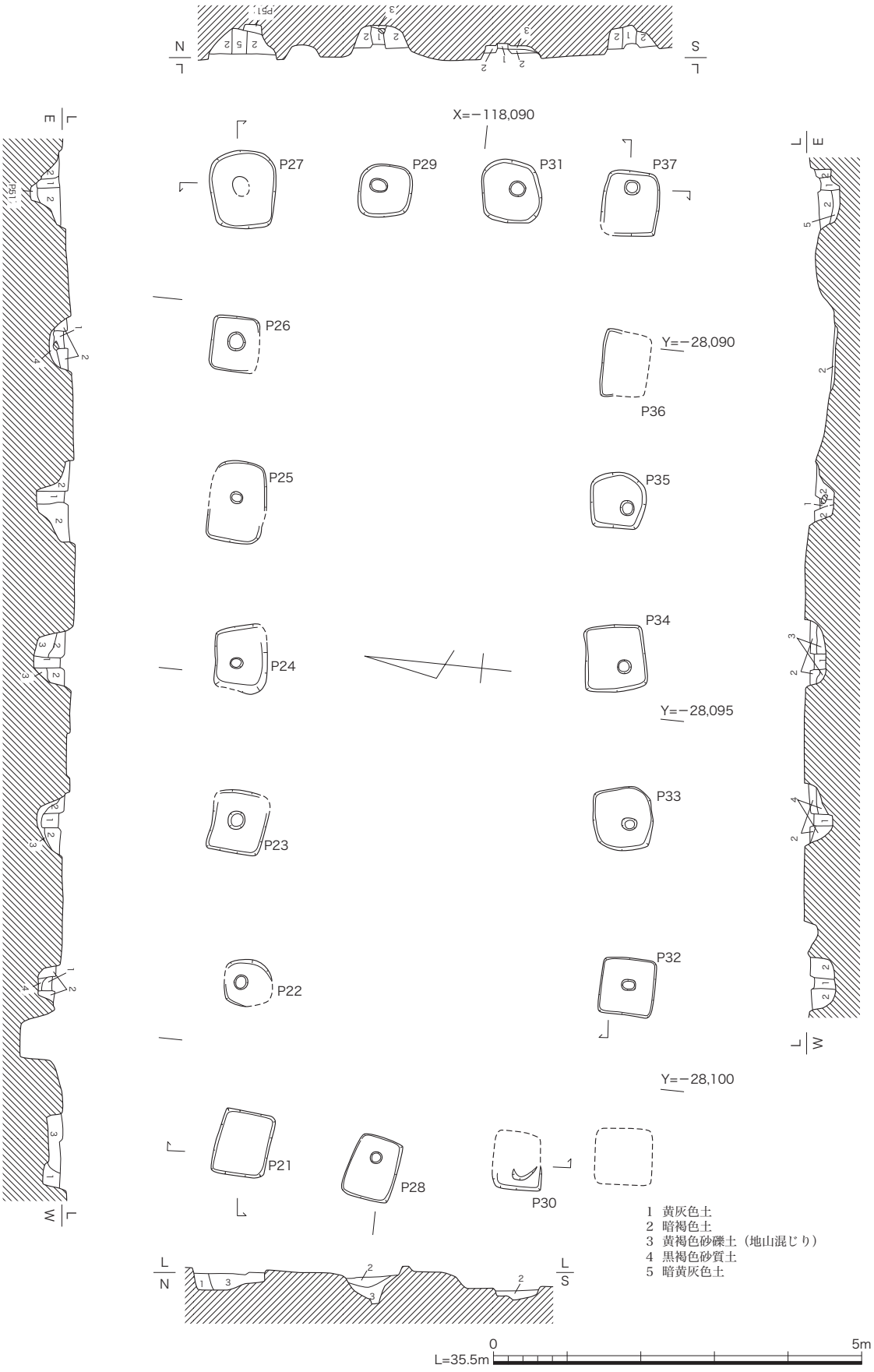
多く含まれている。中層は少量の土器片があり、下層に焼土や遺物はみられなかった。床面には厚さ約 0.1 mの堅く叩きしめられた暗黄褐色土が全体に広がっている。遺物は床面に残るものは無く、すべて埋土内から破片で出土している。

古墳時代の遺構　掘立柱建物 5 棟、柵列 1 条、東西方向の溝 1 条がある。このうち掘立柱建物群はいずれも方位を揃えていて、計画的に配置されたものとみられる。方位は北で 6° ～ 7° 西に振っている。また建物は切り合いを有し、掘立柱建物 SB06 は掘立柱建物 SB08 を切っている。同じく掘立柱建物 SB15・16 も重なっているが切り合いは確認できない

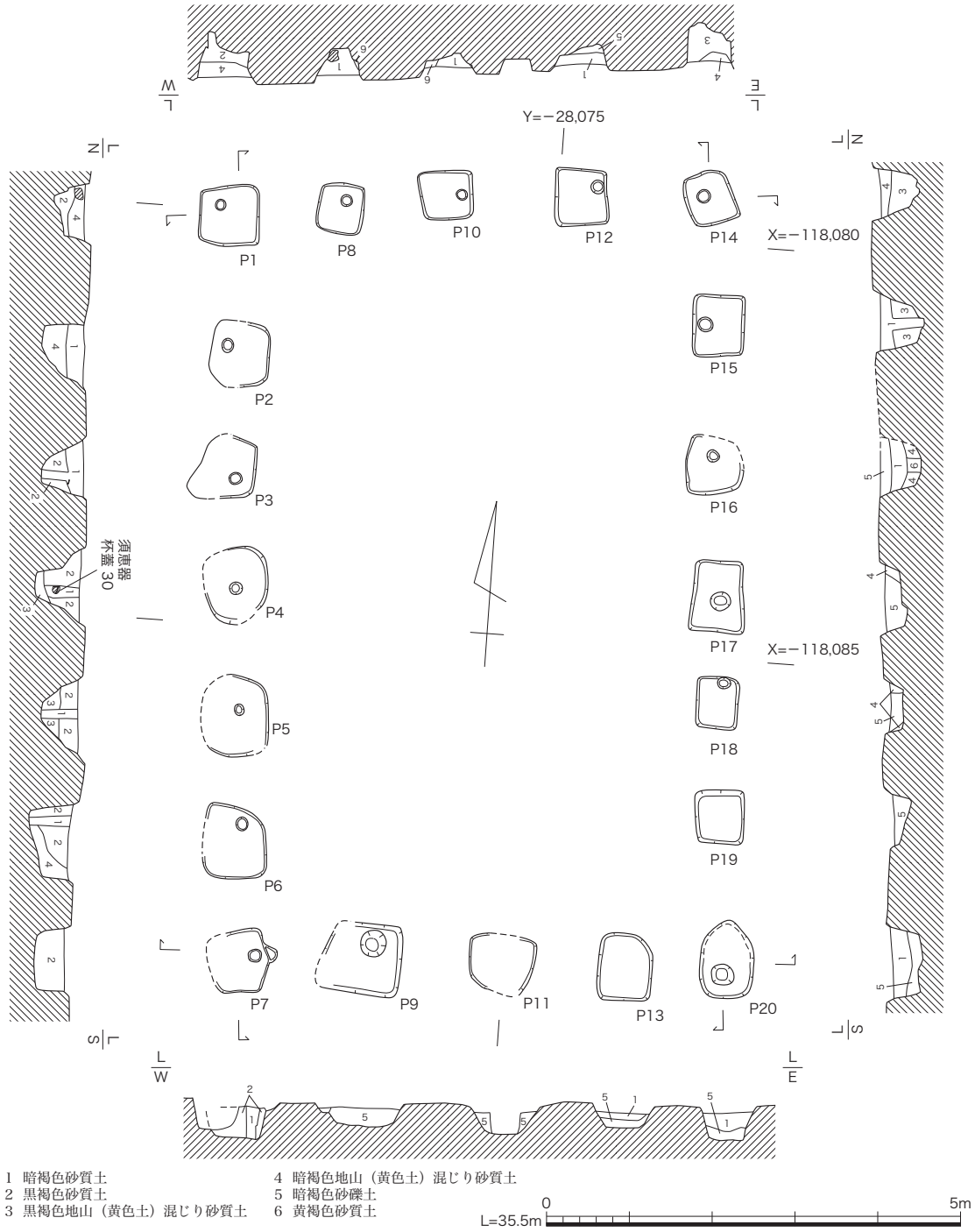
掘立柱建物 SB06（第 3 – 5 図）　調査地西半部で検出された南北 3 間、東西 6 間の東西棟建物で、拡張により全体が明らかとなった。柱掘形は小さなものは一辺 0.6 ～ 0.7 m、大きなものでは 0.9 ～ 1.1 mの隅円方形～長方形を呈し、深さは浅いもので 0.2 m、深いもので 0.5 mあり、断面は台形～擂鉢状である。掘形内には直径約 0.15 ～ 0.2 mの柱痕が残る。柱間は東西が 2.1 ～ 2.25 m、南北は南 1 間分のみが 1.55 mと狭く、北 2 間分では 1.9 mとなっている。建物南西部は削平されているため、同じような柱間であったのかは不明である。



第 3 – 4 図　竪穴建物 SH04 実測図（1/80）

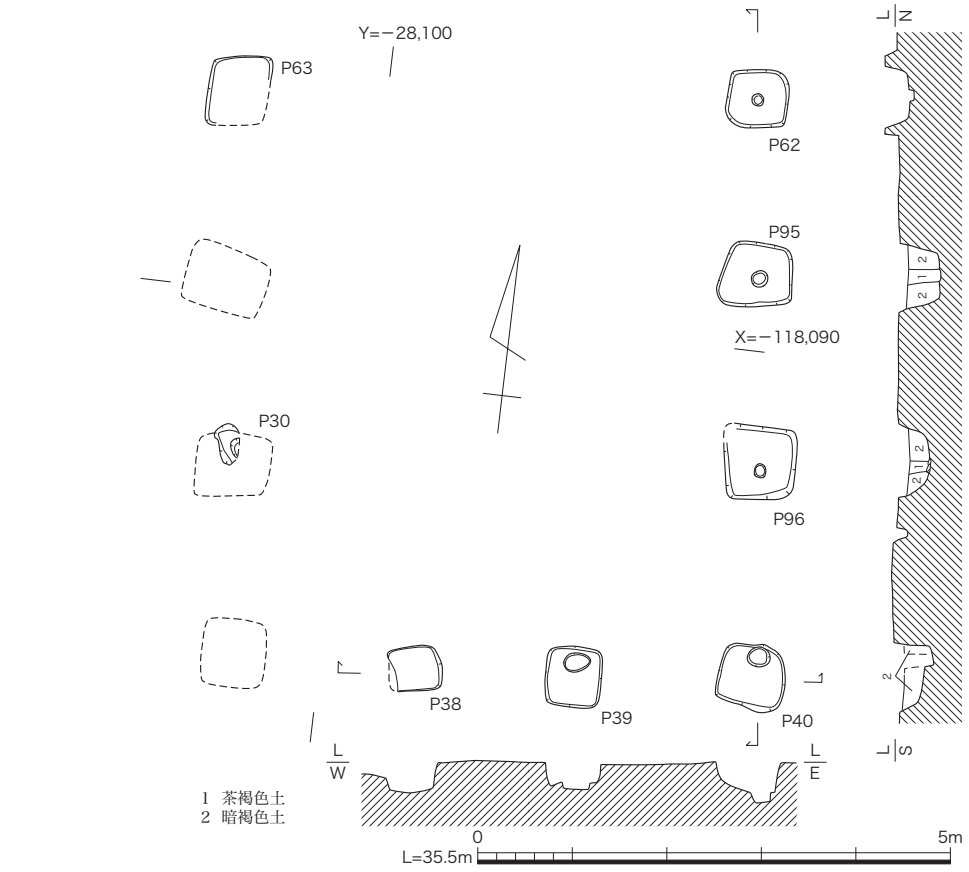


第 3 − 5 図　掘立柱建物 SB06 実測図（1/80）

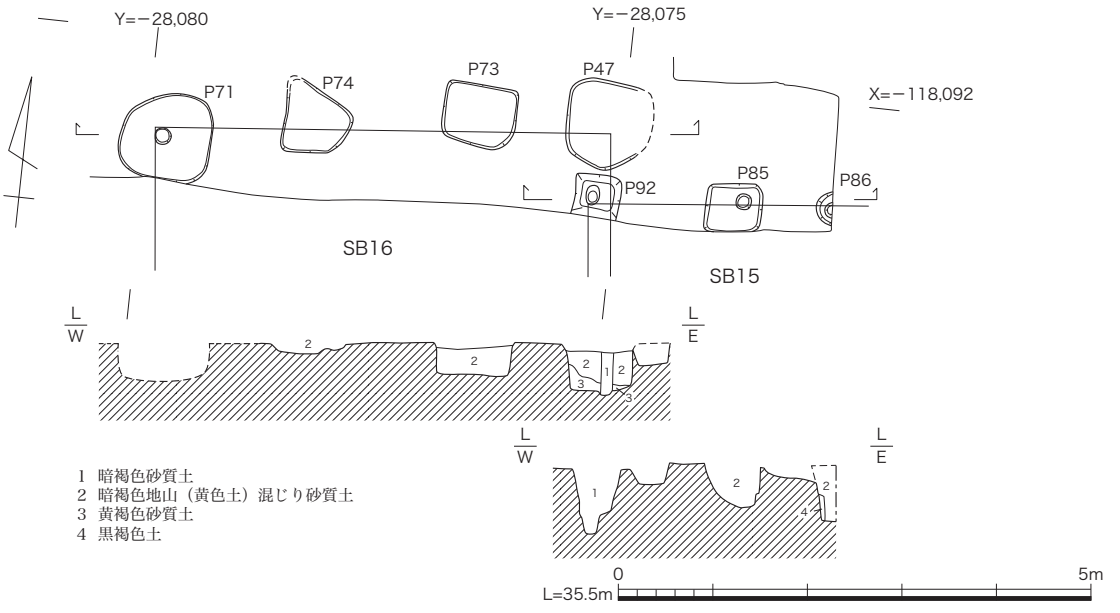


第 3 – 6 図　掘立柱建物 SB07 実測図（1/80）

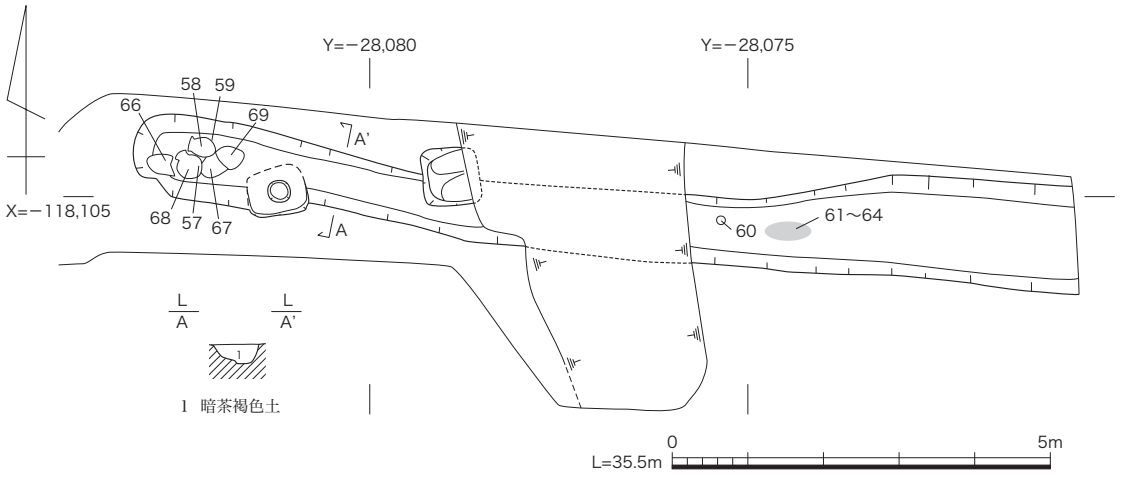
掘立柱建物 SB07（第 3 – 6 図）　調査地東端で検出された南北棟建物で、こちらも拡張により全体が明らかとなっている。南北 6 間、東西 4 間で、柱掘形は一辺 0.5 m前後の小さなものから 0.9 ～ 1.0 mの大きなものがあり、平面はやや不整形な隅円方形である。深さは 0.3 ～ 0.6 mで断面は台形～擂鉢状を呈している。柱痕は断ち割りおよび掘り下げで確認できたものが多い。柱の直径は 0.1 ～ 0.2 mとやや細く、柱間は南北共に 1.0 ～ 1.7 mで、掘立柱建物 SB06 に比べると全体に狭くなっており、間隔にもばらつきがある。



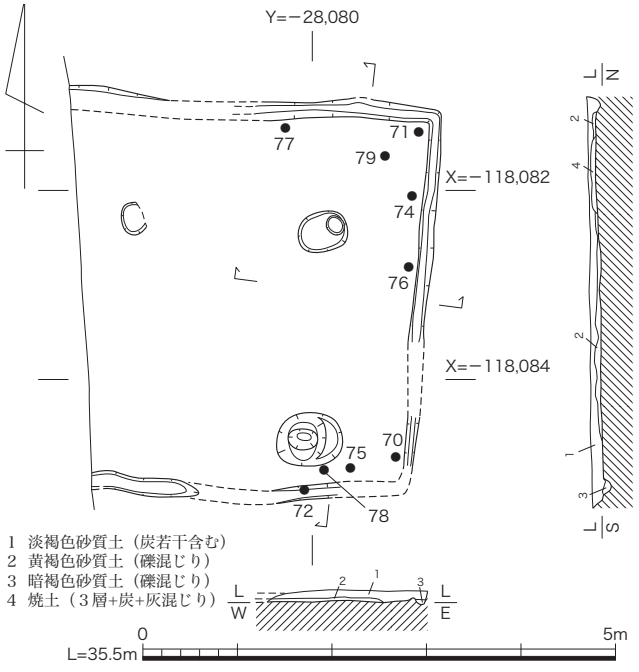
第 3 − 7 図　掘立柱建物 SB08 実測図（1/80）



第 3 − 8 図　掘立柱建物 SB15・16 実測図（1/80）



第 3 − 9 図　溝 SD18 実測図（1/100）



第 3 −10 図　竪穴建物 SH05 実測図（1/80）

掘立柱建物 SB08（第 3 − 7 図）　調査地西部で掘立柱建物 SB06 に切られる形で検出された南北棟の建物である。北側は調査地外に延びており、東西 3 間、南北 3 間以上である。柱掘形は一辺 0.5 〜 0.8 m、深さは 0.3 〜 0.5 mの隅円方形である。西側の柱列は切り合いと撹乱により不明な部分が多いが、直径 0.1 〜 0.2 mの柱痕が残り、柱間は 1.9 〜 2.0 mである。

掘立柱建物 SB15・16（第 3 − 8 図）　調査地南東部で北辺部が検出された、重なり合う 2 棟の建物である。切り合いが確認できず、前後関係は不明である。掘立柱建物 SB15 は東西 2 間分が検出されている。一辺約 0.5 mの一回り小さな隅円方形の柱掘形を主とするもので、柱痕は直径約 0.15 m、柱間は 1.6 mと 0.9 mである。

掘立柱建物 SB16 は東西 3 間分が検出されたもので、南北棟の可能性が高い。柱掘形は 0.6 〜 0.9 mの不整隅円方形で、深さは 0.1 〜 0.5 mである。柱痕は確認できたのは直径 0.15 mの 1 基のみであるため柱間は不明であるが、北側の掘立柱建物 SB07 とは柱掘形の間隔が類似しており、同様の数値となる可能性がある。

柵列 SA17（第 3 − 2 図）　調査地中央付近で検出された南北に並ぶ 3 基の柱穴で、撹乱により削平が激しいが、掘立柱建物 SB06 と掘立柱建物 SB07 のちょうど中間部分に位置することから、関連する遺構と判断したものである。柱掘形は一辺 0.5 〜 0.6 mの隅円方形で、柱痕は確認できていないが、柱掘形の位置から柱間は 2 m前後とみられる。

溝 SD18（第３－９図）　調査地南側で、発掘調査と並行して行われた擁壁工事中に検出された東西方向の溝である。部分的に撹乱を受け、重機掘削により上面が削平されているが幅は 0.7 ～ 1.4 m、深さ 0.3 m前後で、溝は西側で途切れており、この部分に集中して遺物が出土している。また溝と切り合う柱掘形が２基検出された。溝の方位は建物群とは異なっており、出土遺物からやや古い時期とみられる。西側の遺物集中部分では、須恵器の小型甕４個体、中型甕１個体、土師器の長胴甕１個体、その他土師器の杯、須恵器杯身・杯蓋が出土している。これらの甕は横倒しや、倒立状態のものもあり、また底部を欠失するものが含まれている。

飛鳥時代の遺構　竪穴建物が１棟ある。当該時期の遺構はこれ以外には確認できなかった。

竪穴建物 SH05（第３－10 図）　調査地北東部で掘立柱建物 SB07 の西側柱列を切る状況で検出された平面方形の竪穴建物である。南北 4.2 m、東西４m以上、深さは 0.15 mで、西半分は竹薮開墾により削平を受けており、周壁溝のみが残る。周壁溝は幅 0.2 m、深さは 0.1 mである。東半部で確認された主柱穴は直径 0.4 ～ 0.7 m、深さ 0.4 mで、北東の主柱穴付近では部分的に焼土の堆積が認められた。貼り床は確認できなかったが、床面からは完形に近い須恵器杯身・杯蓋、土師器杯などが出土している。

出土遺物

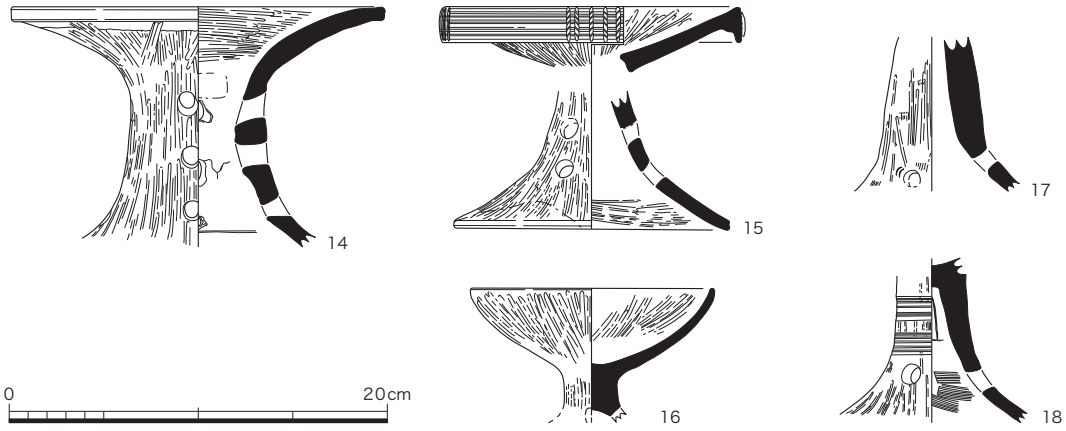
今回の調査で出土した遺物には、竪穴建物出土の弥生時代と飛鳥時代の一括遺物、古墳時代の溝出土一括遺物および掘立柱建物の柱掘形出土遺物がある。このほかに井戸や薮土などから出土した中近世のものがある。

竪穴建物 SH01 出土遺物（第３－11・12 図）　床面から一括して出土した弥生時代後期後葉の遺物である。主に建物の南半部を中心に出土しており、比較的形状を保ったものが多い。壺・甕・鉢・器台・高杯などが出土している。壺には肩部に櫛描直線文と波状文を描くもの（１）や記号状の線刻を持つもの（４）、二重口縁のもの（２・３）がある。このうち２は外面に粘土貼り付けによる円形浮文を持つ。甕は外面に右上がりのタタキ痕を持つものが大半であるが平行のもの（８）もみられる。鉢（13）は近江系の受け口状口縁を持ち、口縁部と肩部に刺突列点文・櫛描直線文を施す。器台（14）は大きく開く受け部を持ち、脚部には縦３個の透かし孔を４方向に穿っている。高杯には端部を拡張させて凹線と棒状浮文で飾るもの（15）、椀状の杯部のもの（16）、脚部に櫛描直線文を持つもの（18）などがある。いずれも丁寧にヘラミガキする。

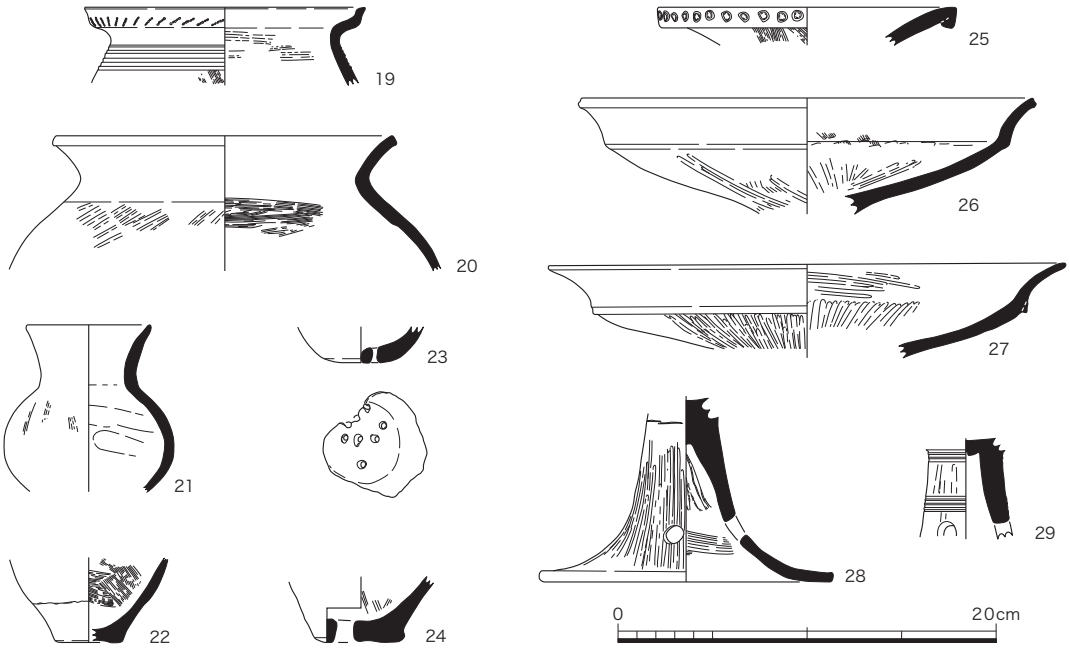
竪穴建物 SH04 出土遺物（第３－13 図）　遺物は床面のものはなくすべて埋土内から出土している。いずれも小片で、甕・壺・器台・高杯・底部穿孔土器などがある。同じく後期後葉の遺物である。甕は口縁部が受け口状を呈し、口縁部に刺突列点文、肩部に櫛描直線文を持つ近江系のもの（19）と外反する口縁部で、体部にタタキを持つもの（20）がある。壺は小型の長頸壺（21）がある。外反する口縁部と球形の体部を持つ。器台（25）は端部を拡張させて外面に竹管文を巡らす。高杯は屈曲して外反する口縁部を持ち（26・27）、脚部は大きく広がって、円孔を３方向に穿つ（28）。また、脚部に櫛描直線を持つもの（29）がある。底部穿孔土器には小さな孔を８個以上穿つもの（23）と、１個のみ穿つもの（24）がある。

第 3 –11 図　竪穴建物 SH01 出土遺物実測図– 1 （1/4）

掘立柱建物 SB06 ～ 08・15・16 出土遺物（第 3 –14 図）　ほとんどの遺物は柱掘形内から出土していて、柱穴から出土したものは 1 点である（30）。もっとも多くの遺物が出土したのは掘立柱建物 SB07 で、その他の建物は非常に少量であった。いずれも小片で、須恵器杯身・杯蓋の破片が大半を占め、ほかに高杯脚部・有蓋高杯蓋・壺・甕、土師器鍋・把手などがある。この



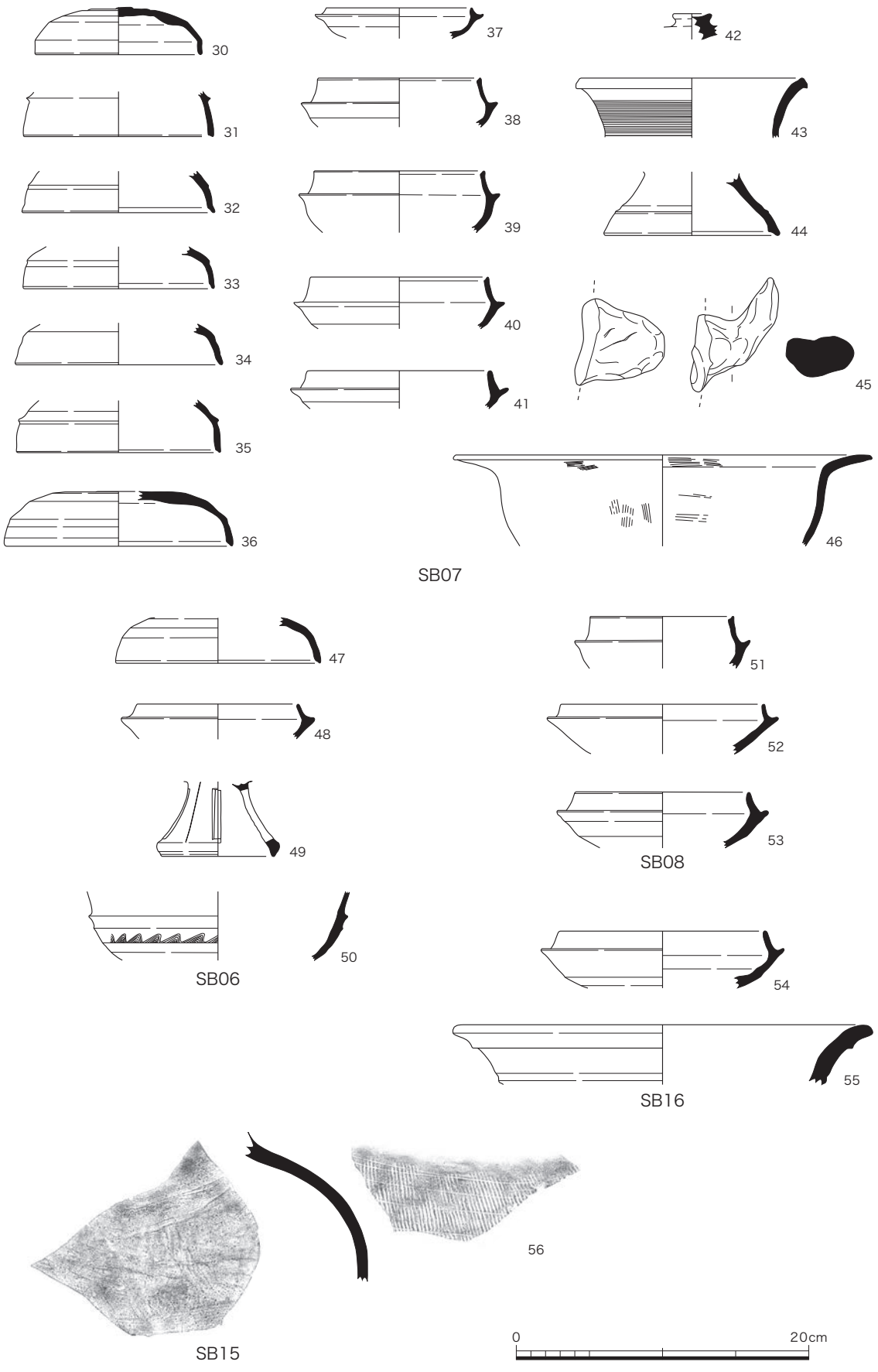
第 3 –12 図　竪穴建物 SH01 出土遺物実測図– 2（1/4）



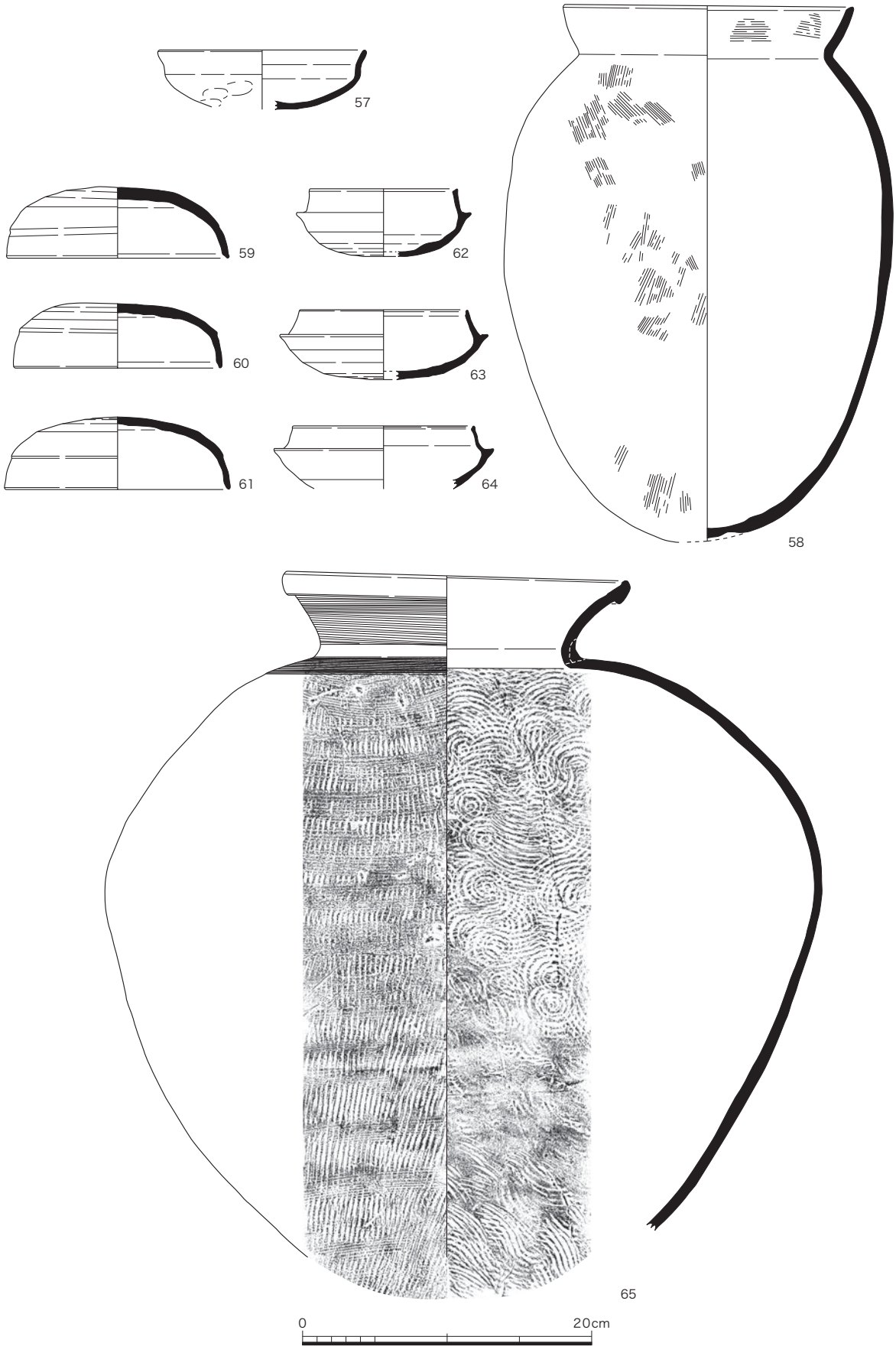
第 3 –13 図　竪穴建物 SH04 出土遺物実測図（1/4）

うち 56 は韓式系土器である。須恵器の杯身・杯蓋共に時期幅があるが、掘立柱建物 SB07 では柱穴出土のものが新しい様相を呈するものの、おおむね TK209 型式、他の建物の出土遺物では TK43 型式前後と見られる。

溝 SD18 出土遺物（第 3 –15・16 図）　溝の途切れる部分で須恵器の胴部径 30cm 前後の小型甕 4 個体と胴部径 50cm の中型甕 1 個体、長胴の土師器甕 1 個体が固まって出土している。小型の須恵器甕は西から口縁を上に向けた底部を欠くもの（66）、口縁を斜め下に向けた完形に近いもの（68）、横倒しで底部を欠くもの（67）、同じく横倒しで完形に近いもの（69）の順で、これらの北側に完形で横倒しの土師器甕（58）が出土している。中型の須恵器甕（65）は重機掘削により原位置は失われているが、意識的に底部を打ち欠いている。須恵器甕は口縁端部を肥厚させ、内面に同心円の当て具痕、外面は平行タタキの後カキメを施すもの（65・66・68・69）と口縁端部は丸くおさめ、外面タタキ、内面スリ消しするもの（67）がある。土師器甕（58）



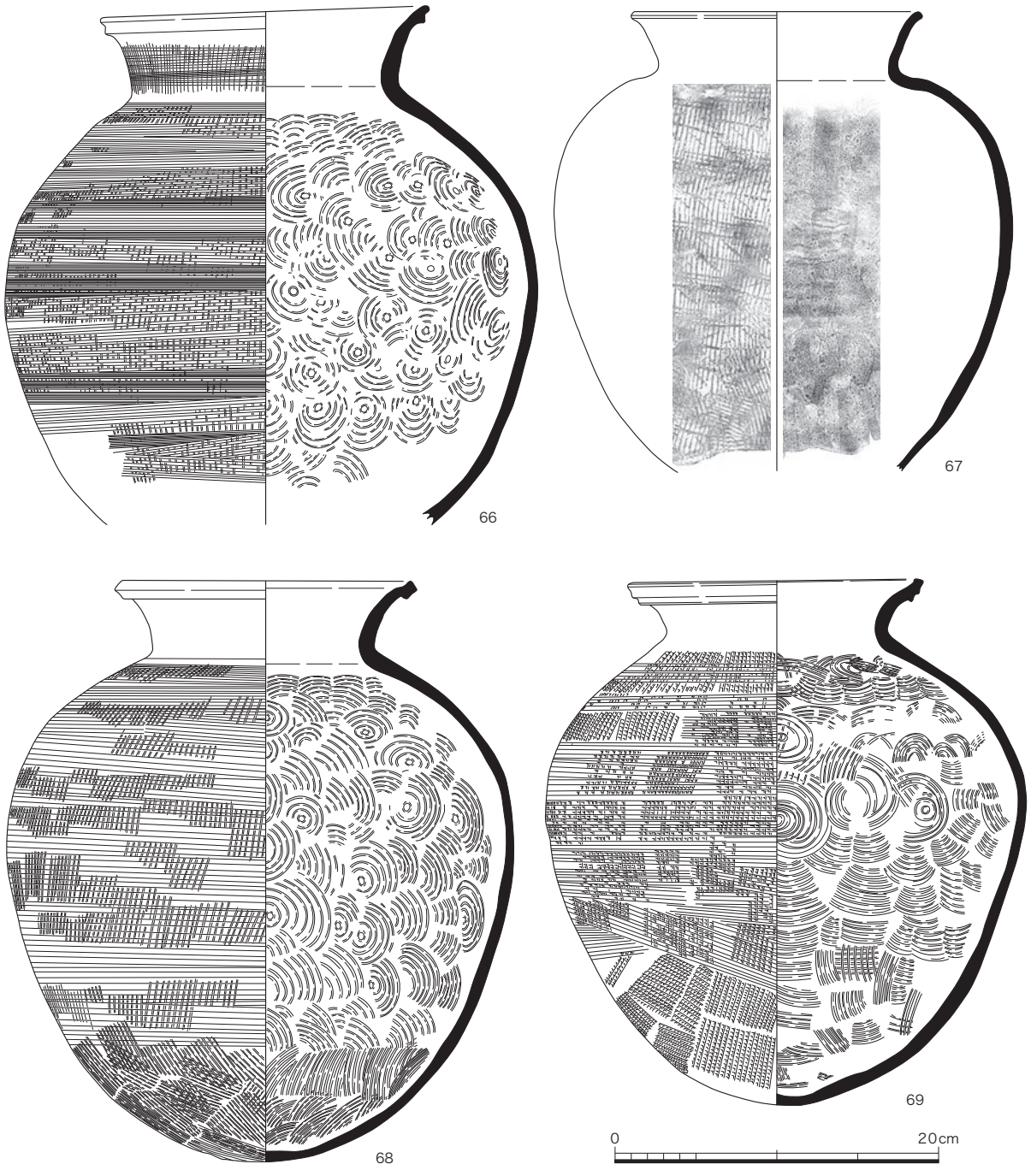
第 3 –14 図　掘立柱建物 SB06 ～ 08・15・16 出土遺物実測図（1/4）



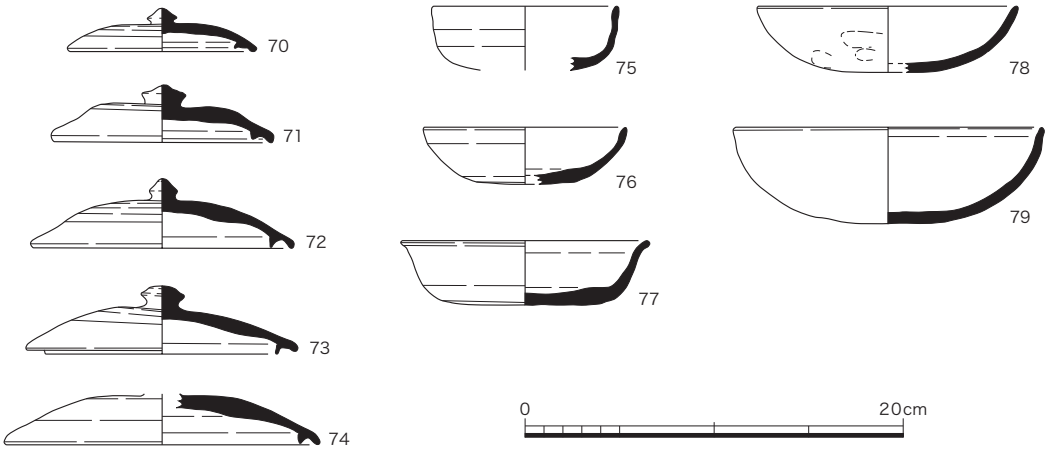
第 3 –15 図　溝 SD18 出土遺物実測図（1/4）

は内湾しながら広がる口縁部と丸みを帯びた長胴を持つ。またこれらの甕の下から土師器杯（57）、須恵器杯蓋（59）が出土している。この他に約 7 m東側では、須恵器杯身・杯蓋（60 ～ 64）がまとまって出土している。これらの須恵器は TK10 型式に比定されるものである。

竪穴建物 SH05 出土遺物（第 3 –17 図）　竪穴建物東半部の床面付近から、須恵器杯身･杯蓋、土師器杯などが出土している。杯蓋は内面を上に向けた状態のものが多く、周壁溝周辺に分布している。いずれの杯蓋も宝珠型のつまみを持ち、内面のかえりが口縁部よりも下に突出するもの（73）､同じ高さのもの（72･74）､低いものがある（70･71）。杯身は口縁部が直立するもの（75）、



第 3 –16 図　溝 SD18 出土遺物実測図（1/4）



第 3 –17 図　竪穴建物 SH05 出土遺物実測図（1/4）

平らな底部で口縁が外反するもの（77）、丸みを帯びた底部で口縁部が内湾するもの（76）がある。土師器杯は内湾する口縁部を持つもの（78・79）で、内面は摩滅しているが、79 にはわずかに放射状の暗文が確認できる。飛鳥Ⅳに比定されよう。

小　　結

今回の調査では、弥生時代後期、古墳時代後期、飛鳥時代後期に関しての遺構、遺物が検出された。弥生時代後期の資料のうち竪穴建物 SH01・03 は、方形住居から五角形住居への拡張状況が確認できる珍しい例であり、床面出土の土器資料と共に当該期の重要な資料といえる。同時期の遺構は東側の氾濫原一帯にも広がっているが、段丘上の今回の調査地とは立地が大きく異なり、同じ今里遺跡でも何らかの差異が存在していたと見られる。

古墳時代後期の掘立柱建物群は方位を揃えた建物が、切り合いを有して 5 棟検出された。その後南側で行われた右京第 598 次調査[(注 1)]でも同一方向の掘立柱建物が検出されており、これらの遺構が南側にさらに広がっているのは確実であろう。ただ南西 30 m で行われた右京第 360 次調査[(2)]では、東西方向の開析谷が確認されていて、これ以上南には広がらないことも判明している。これらの建物群が検出された当初は、継体天皇の「弟国宮」に関連する遺構として期待する向きもあったが、残念ながら出土遺物からは六世紀後半～七世紀初めに比定されるため、現段階ではこの時期乙訓地域に勢力を持っていた首長層の居館の一部と推定している。いずれにせよ、このような掘立柱建物群は乙訓地域では例を見ないものであり、貴重な発見例である。

飛鳥時代の竪穴建物はこの時期としては珍しい遺構といえる。東側の氾濫原ではすでに掘立柱建物が出現しており、弥生時代と同じく段丘上と氾濫原部分では様相が異なる可能性もある。この時期の竪穴建物は今里周辺では類例が少なく、一括出土した遺物と共に貴重な成果であろう。

以上、各時代にわたって今里遺跡に関する重要な成果を上げることができた。特に古墳時代の掘立柱建物に関しては、乙訓の首長墓との関連も考慮すべきものであり、向後に期したい。

（木村　泰彦）

注 1）小田桐　淳「右京第 598 次調査概報」『長岡京市センター年報』平成 10 年度　2000 年

2）山本輝雄「長岡京跡右京第 360 次調査概要」『長岡京市報告書』第 27 冊　1991 年

付表３－１　出土遺物観察表

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構地区	備考
			口径	器高	底径				
弥生土器	壺	1	10.2	(5.4)	-	にぶい黄橙色	内面：ナデ、外面：調整不明	SH01	肩部に櫛描直線文(12 条)、波状文
		2	17.1	(8.7)	-	橙色	内面:横方向のヘラミガキ、ナデ、外面:縦方向のヘラミガキ	SH01	口縁部に円形浮文(2 対 1 組 7 方向)
		3	15.0	(14.6)	-	橙色	内面：ナナメハケ、外面：タテハケ後ナデ、体部タタキ後タテハケ後ミガキ	SH01	
		4	-	(15.5)	3.6	にぶい黄橙色	内面：ナデ、体部下半部にナナメハケ、外面：タテハケ、底部ナデ	SH01	肩部に線刻 外面スス付着
		5	-	(12.6)	2.7	にぶい黄橙色	内面：頸部ナデ、体部にナナメハケ、外面：縦方向のヘラミガキ	SH01 C-6 区	
		6	-	(14.8)	4.3	橙色	体部内面:ナナメハケ、ナデ、体部外面:横方向のヘラミガキ	SH01	底部木の葉痕
		7	-	(9.0)	2.4	にぶい黄橙色	内面：ナデ、底部タテハケ、外面：縦方向のヘラミガキ、底部ナデ	SH01	
	甕	8	18.0	(17.0)	-	明赤褐色	内面:板ナデ、外面:上半部ヨコタタキ、下半部ヨコタタキ後タテハケ	SH01	
		9	14.8	21.95	4.9	にぶい黄橙色	内面：ナナメハケ後ナデ、外面：ナナメタタキ、体部下半部にナナメタタキ後ハケ、底部ナデ	SH01	
		10	13.0	16.1	4.2	橙色	内面：ナデ、底部タテハケ、外面：体部上半部にヨコタタキ、下半部にナナメタタキ、底部ナデ	SH01	
		11	13.4	(14.2)	-	橙色	内面：ナデ、外面：ヨコタタキ	SH01	外面にスス付着
		12	15.0	口縁(7.4) 底部(4.8)	3.8	にぶい黄橙色	内面：ナデ、底部ナナメハケ後ナデ、外面：ナナメタタキ後ナデ、体部下半部ヨコタタキ、底部ナデ	SH01	
	鉢	13	13.6	12.8	4.4	橙色	内外面：ナナメハケ、底部ナデ	SH01	近江系、口縁・頸部に列点文、頸部櫛描直線文
	器台	14	19.8	(12.7)	-	橙色	内面：口縁部横方向のヘラミガキ、ケズリ、ナデ、外面：口縁部ヨコナデ、縦方向のヘラミガキ、脚部ヨコナデ	SH01	円孔（4方向、3段）
	高杯	15	15.8	杯部(3.4) 脚部(7.35)	14.6	橙色	杯部内面：縦方向のヘラミガキ、杯部外面：垂下口縁貼り付け時のナデ、脚部内面：ナデ、横方向のヘラミガキ、脚部外面：ハケ後ミガキ	SH01 B-6 区	口縁部に櫛描直線文（8 条）、棒状浮文（5 本×4）、脚部に円孔(3 方向,2 段)
		16	12.8	(6.7)	-	橙色	杯部内外面：縦方向のヘラミガキ、脚部内面：ナデ、脚部外面：縦方向のヘラミガキ	SH01	円孔 (2 方向のみ残存)
		17	-	(8.15)	-	にぶい黄橙色	内面：ナデ、外面：タテハケ後縦方向のヘラミガキ	SH01	円孔（3 方向）
		18	-	(8.7)	-	にぶい橙色	杯部内面：ナデ、脚部内面：ナデ、ヨコハケ、脚部外面：縦方向のヘラミガキ	SH01	櫛描直線文（7 条×2）、円孔（3 方向）

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構地区	備考
			口径	器高	底径				
弥生土器	甕	19	14.8	(4.1)	-	橙色	内面：ヨコハケ、外面：ナナメハケ	SH04 E-4 区	近江系、口縁部に櫛描列点文、肩部に櫛描直線文（8 条）、外面にスス付着
		20	18.2	(7.15)	-	にぶい黄橙色	内面：ヨコハケ後ナデ、外面：ナナメタタキ	SH04 E-5 区	
	壺	21	6.6	(8.8)	-	橙色	内面：ナデ、外面：ナナメハケ後ナデ	SH04 F-5 区	
		22	-	(4.5)	3.6	灰黄色	内面：ナナメハケ、外面：ナデ	SH04 E-4 区	
	底部	23	-	(1.9)	4.0	浅黄橙色	内面：ナデ、外面：調整不明	SH04 E-4 区	底部穿孔 8 ヵ所
		24	-	(3.5)	4.6	にぶい黄橙色	内面：ナナメハケ、外面：ナデ	SH04 G-4 区	底部穿孔 1 ヵ所
	器台	25	15.8	(2.0)	-	橙色	内面：ナデ、外面：口縁部ナデ、タテハケ後ナデ	SH04 G-4 区	口縁部に竹管文
	高杯	26	24.2	(6.1)	-	浅黄橙色	内外面：ハケ後縦方向のヘラミガキ	SH04 G-4 区	
		27	27.4	(5.0)	-	橙色	内面：横方向のヘラミガキ、杯部下部縦方向のヘラミガキ、外面：口縁部ヨコナデ、杯部下部縦方向のヘラミガキ	SH04 G-4 区	黒斑
		28	-	(9.7)	15.5	浅黄橙色	杯部内面：しぼり痕、脚部内面：ヨコハケ、脚部外面：縦方向のヘラミガキ、ヨコナデ	SH04 F-4 区	円孔（3 方向）
		29	-	(5.3)	-	にぶい黄橙色	杯部内面：ナデ、脚部内面：ナデ、外面：縦方向のヘラミガキ	SH04 E-5 区	櫛描直線文（3 条、4 条）、円孔（3 方向）
須恵器	杯蓋	30	11.4	3.2	-	灰白色	内外面：ロクロナデ、外面：天井部ヘラケズリ	SB07 P4 柱穴	
		31	13.0	(3.05)	-	灰色	内外面：ロクロナデ	SB07 P20	
		32	13.2	(2.85)	-	灰色	内外面：ロクロナデ	SB07 P16	
		33	13.1	(2.9)	-	灰色	内外面：ロクロナデ	SB07 P17	
		34	14.2	(2.8)	-	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：天井部ヘラケズリ	SB07 P1	
		35	14.0	(3.6)	-	灰白色	内外面：ロクロナデ	SB07 P4	外面に自然釉
		36	15.6	3.7	-	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：天井部ヘラケズリ	SB07 P2	
	杯身	37	10.0	(2.1)	-	灰色	内外面：ロクロナデ	SB07 P17	
		38	11.2	(3.4)	-	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：回転ヘラケズリ	SB07 P8	

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構地区	備考
			口径	器高	底径				
須恵器	杯身	39	11.7	(4.25)	-	灰白色	内外面：ロクロナデ	SB07 P3	
		40	12.3	(3.5)	-	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：回転ヘラケズリ	SB07 P6	
		41	12.6	(2.6)	-	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：回転ヘラケズリ	SB07 P6	
	高杯蓋	42	-	(1.8)	-	灰色	内面：ナデ、外面：つまみ貼り付け時のナデ	SB07 P6	
	甕	43	15.8	(4.1)	-	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：カキメ	SB07 P15	
	壺	44	-	(4.35)	12.0	灰色	内外面：ロクロナデ	SB07 P2	
土師器	把手	45	幅 (5.9)	長 (7.8)	厚 (2.8)	浅黄橙色	ナデ、指圧痕	SB07 P17	
	鍋	46	28.6	(6.3)	-	浅黄橙色	内外面：ヨコハケ後ヨコナデ、外面：体部タテハケ	SB07 P2	
須恵器	杯蓋	47	14.0	(3.1)	-	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：回転ヘラケズリ	SB06 P26	
	杯身	48	11.1	(2.4)	-	灰色	内外面：ロクロナデ	SB06 P35	
	高杯	49	-	(5.1)	8.4	灰白色	内外面：ロクロナデ	SB06 P27	外面に線刻　長方形穿孔（4ヵ所か）
	無蓋高杯	50	-	(4.7)	-	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：底部ヘラケズリ	SB06 P31	外面に波状文
	杯身	51	9.8	(3.6)	-	灰色	内外面：ロクロナデ	SB08 P63	
		52	14.0	(3.4)	-	灰色	内外面：ロクロナデ	SB08 P95	
		53	12.0	(3.8)	-	灰白色	内外面：ロクロナデ、外面：回転ヘラケズリ	SB08 P95	
		54	14.2	(3.9)	-	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：回転ヘラケズリ	SB16 P71	
	甕	55	28.8	(4.1)	-	灰白色	内外面：ロクロナデ	SB16 P71	
		56	-	(10.2)	-	内面：灰色 外面：灰赤色	内面：ナデ、外面：平行タタキ後カキメ	SB15 P85	韓式系
土師器	杯	57	14.4	(4.1)	-	浅黄橙色	内外面：口縁部ヨコナデ、内面：ナデ、外面：オサエ	SD18 A 区 67･68の間	
	長胴甕	58	20.1	(37.1)	-	にぶい橙色	内外面：口縁部ヨコナデ、内面：ヘラケズリ、ナデ、外面：ナナメハケ	SD18 A 区	
須恵器	杯蓋	59	15.4	4.95	-	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：天井部回転ヘラケズリ	SD18 A 区 58 直下	

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構 地区	備考
			口径	器高	底径				
須恵器	杯蓋	60	14.4	4.5	-	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：天井部回転ヘラケズリ	SD18 C 区	
		61	15.6	5.0	-	灰色	内外面：ロクロナデ、内面：同心円当て具痕、外面：天井部回転ヘラケズリ	SD18 C 区一括	
	杯身	62	10.3	4.7	-	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：底部回転ヘラケズリ	SD18 C 区一括	
		63	11.7	4.8	-	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：底部回転ヘラケズリ	SD18 C 区一括	
		64	12.6	(4.4)	-	黄灰色	内外面：ロクロナデ、外面：底部回転ヘラケズリ	SD18 C 区一括	
	甕	65	23.5	(49.6)	-	暗青灰色	内面：同心円当て具痕、外面：平行タタキ後カキメ	SD18 A 区	底部欠失
		66	20.3	(32.1)	-	灰色	内面：同心円当て具痕、外面：平行タタキ後カキメ	SD18 A 区	底部欠失
		67	18.0	(28.4)	-	灰色	内面：同心円当て具痕後ナデ、外面：平行タタキ	SD18 A 区	外面に火襷痕 底部欠失
		68	18.6	36.0	-	灰色	内面：同心円当て具痕、外面：平行タタキ後カキメ	SD18 A 区	
		69	18.2	32.5	-	灰白色	内面：同心円当て具痕、外面：格子目タタキ後カキメ	SD18 A 区	
	杯蓋	70	7.7	2.3	-	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：回転ヘラケズリ、天井部ツマミ貼付時のナデ	SH05 C 区南端	
		71	9.6	3.05	-	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：回転ヘラケズリ、天井部ツマミ貼付時のナデ	SH05 北東隅	
		72	11.7	3.65	-	素地：灰色 釉：暗オリーブ色	内外面：ロクロナデ、外面：自然釉、回転ヘラケズリ、天井部ツマミ貼付時のナデ	SH05 C 区南端	
		73	12.4	3.6	-	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：回転ヘラケズリ、天井部ツマミ貼付時のナデ	SH05	
		74	14.7	(2.7)	-	素地：灰白色 釉：暗オリーブ色	内面：ロクロナデ、外面：調整不明	SH05 B 区 2	口縁部重ね焼き痕 外面に自然釉付着
	杯身	75	10.0	(3.4)	-	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：底部ヘラ切り後ナデ	SH05 D 区南端	
		76	10.8	3.0	-	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：底部ヘラ切り	SH05 B 区 4	
		77	13.2	3.4	-	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：底部ヘラ切り後ナデ	SH05 北辺中央	
土師器	杯	78	13.8	3.5	-	橙色	内外面：口縁部ヨコナデ、内面：ナデ、外面：オサエ	SH05 D 区	
		79	16.4	5.15	-	橙色	内外面：口縁部ヨコナデ、内外面：ナデ	SH05 A 区	内面わずかに放射状暗文

第 3 –18 図　調査地全景（西から）

第 3 –19 図　調査地全景（上が北）

第 3 –20 図　竪穴建物 SH01・03（南から）

第 3 –21 図　竪穴建物 SH04（南から）

第 3 –22 図　掘立柱建物 SB06・08（東から）

第 3 –23 図　竪穴建物 SH05・掘立柱建物 SB07・15・16（北から）

第 3 –24 図　溝 SD18 遺物出土状況（南から）

第 3 –25 図　掘立柱建物 SB07・竪穴建物 SH05 検出状況（南から）

第 3 –26 図　竪穴建物 SH01 出土遺物

66

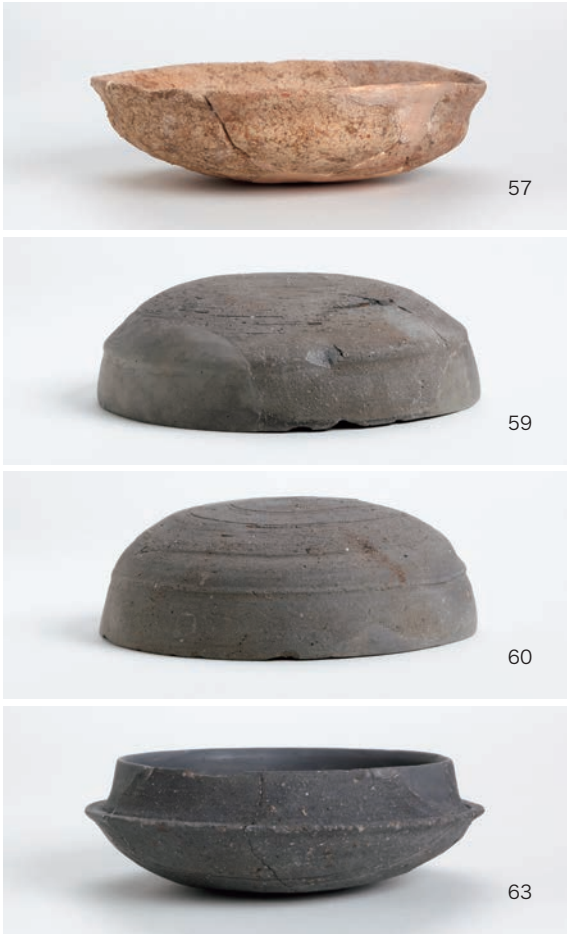
67

68

69

65

第 3 –27 図　溝 SD18 出土遺物– 1



第 3 –28 図　溝 SD18 出土遺物– 2

第 3 –29 図　竪穴建物 SH05 出土遺物

4．長岡京跡右京第 301 次調査

～ 長岡京跡、甕据え付け建物・土器埋納坑出土資料 ～

調 査 地　長岡京市開田二丁目 120　　**地 区 名**　7ANKTR － 4 地区

調査期間　1988（昭和 63）年 4 月 14 日～ 6 月 10 日　　**調査面積**　180㎡

時　　期　飛鳥時代、長岡京期　　**出土遺物**　5 箱

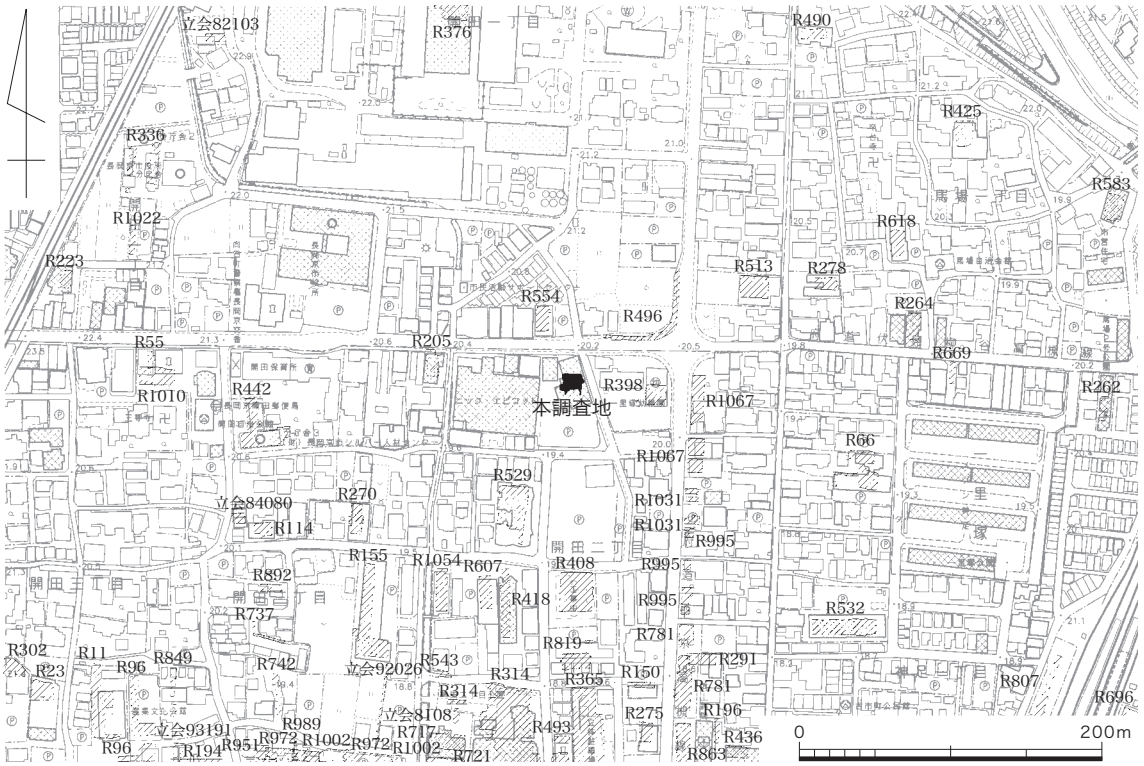
立　　地　低位段丘 I　　標高約 19.5 m

参考文献　「右京第 301 次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和 63 年度　1990 年

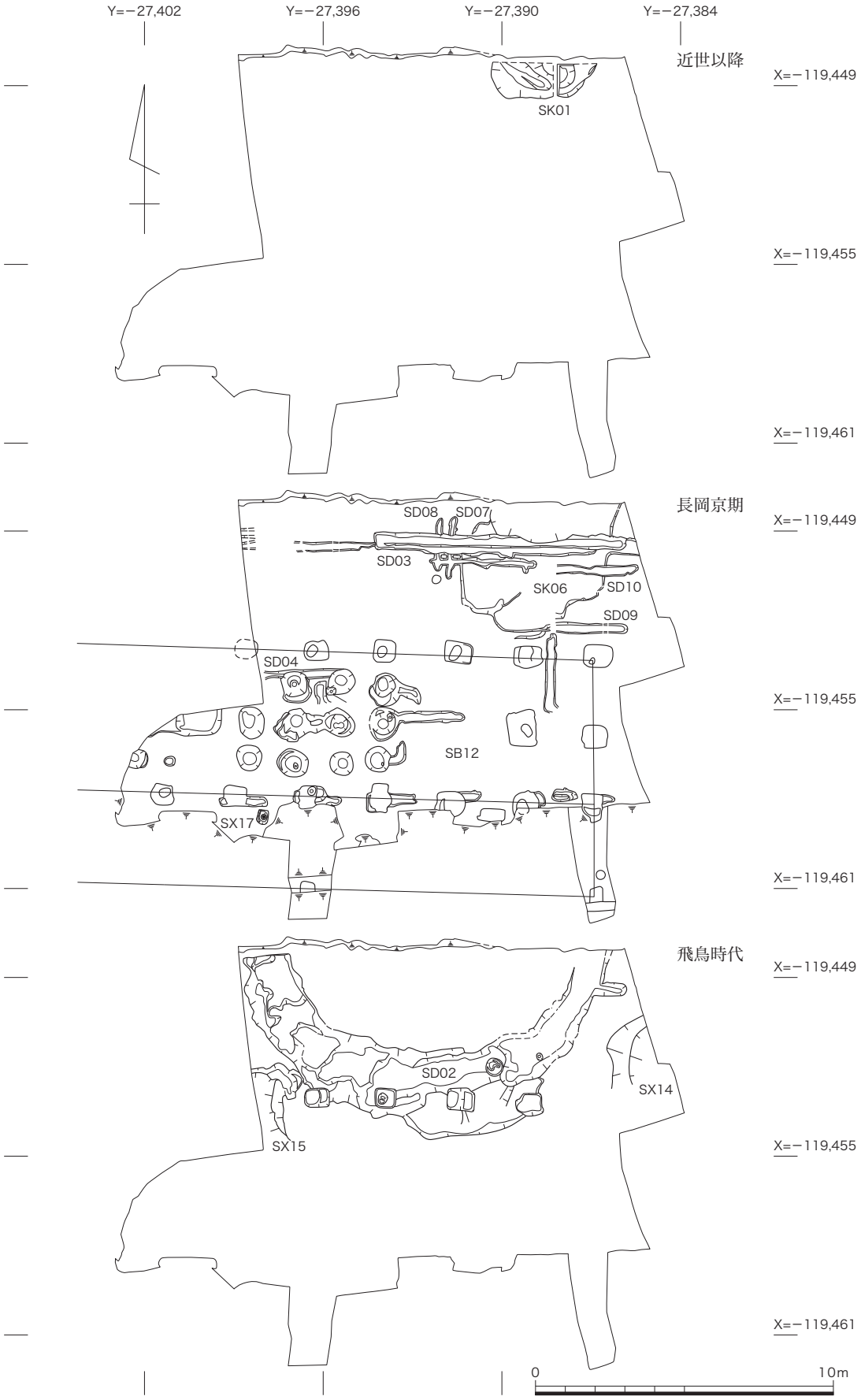
調査の概要

集合住宅建設工事に伴って実施した発掘調査である。調査地は、阪急京都線長岡天神駅の東方約 400 mに位置する市街地の一角で、すぐ北側には府道伏見柳谷高槻線が東西に、東約 70 mの地点には府道西京高槻線が南北に通っている。長岡京の条坊復原によると、右京六条二坊一町の北東部に相当し、すぐ北側には五条大路が東西に、すぐ東側には西一坊大路が南北に走っているなど、町の二辺を幅員約 24 m規模の大路によって区画されていた。このため、この町の利用しうる敷地は東西、南北幅とも狭くなっている特徴がある。

調査にあたっては、当初東西 8 m、南北 17 mの南北に長い調査区を設定して 4 月 14 日から重機で盛土、耕作土などを掘り下げることから始めた。ところが、地表下約 1.6 mまで大きく撹乱を受けていることが判明したため、急遽調査区の設定位置と規模を変更することになり、東西



第 4 － 1 図　発掘調査地位置図（1/5000）



第４－２図　時代別検出遺構図（1/200）

13.5 m、南北約 5 mの調査区に再設定し直して調査を進めた。その結果、地表下約 1.3 mの地山面上において円弧状を呈する溝をはじめ、溝、土坑、建物など新旧の遺構を重複した状態で確認することができた。さらに、建物を追究するため、5 月 27 日から調査区を南側へ拡張に拡張を重ねたところ、最終的には極めて異形な調査区になってしまった。建物は、全体を把握するまでには至らなかったが、内部に複数の穴を配列する甕据え付け建物になること、建物内に土器埋納坑があることなど興味深い遺構であることが明らかになった。そして、遺構の全景写真と実測作業を行い、6 月 10 日に現地での調査を終了した。

検出遺構

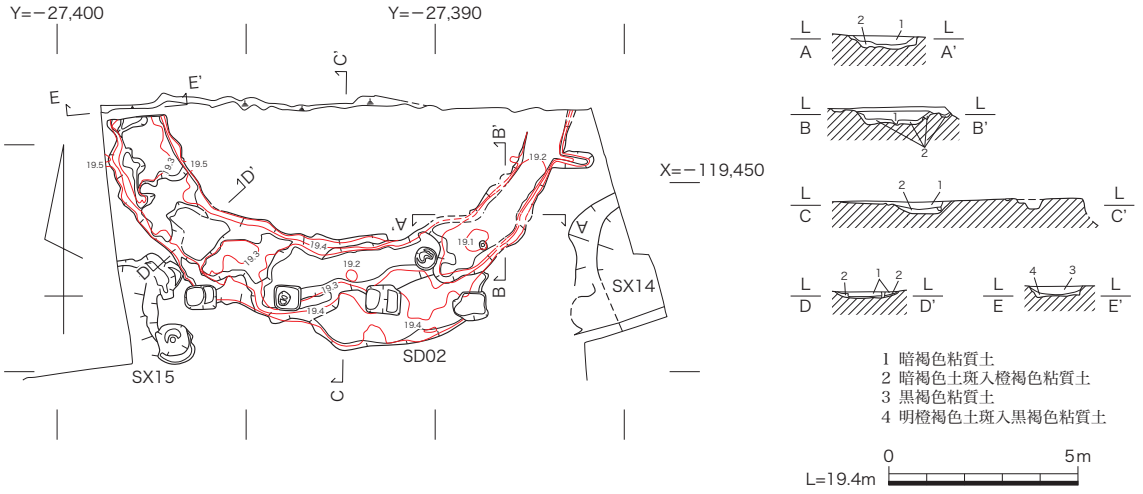
（1）飛鳥時代の遺構

古墳の周溝 SD02　調査区の北部で検出した円弧状を呈する素掘り溝であるが、北側は撹乱によって大きく破壊されていた。溝は、幅が 0.9 ～ 3 m、深さ 0.15 ～ 0.3 m程度の規模があり、断面は逆台形を呈している。溝底は平坦ではなく、凹凸が顕著に認められた。埋土は、おおむね上下 2 層に分けることができ、A ～ Dのセクションでは暗褐色粘質土層と暗褐色土斑入橙褐色粘質土層、Eセクションでは黒褐色粘質土層と明橙褐色土斑入黒褐色粘質土層であった。この溝は、円弧状を呈するという平面形態を重視して、径 10.5 m程度の規模に復元できる円墳の周溝であると判断した。墳丘は完全に削平を受けているようで、埋葬施設に関わる情報も全く得られなかった。また、周溝からの出土遺物が極めて乏しく、わずかに須恵器の平瓶や甕の体部片などが出土したにすぎない。

この円墳に復元した埋没古墳は、調査時点で小字名を付して東羅古墳と命名したが、その後周辺での調査の進展に伴って埋没古墳や土壙墓などの検出が相次いだため、開田古墳群の東羅支群 1 号墳と古墳名を変更した。

（2）長岡京期の遺構

この時代の遺構には、溝、土坑、甕据え付け建物、土器埋納坑などがある。以下、主な遺構の概要を説明する。



第 4 – 3 図　古墳周溝 SD02 実測図（1/200）

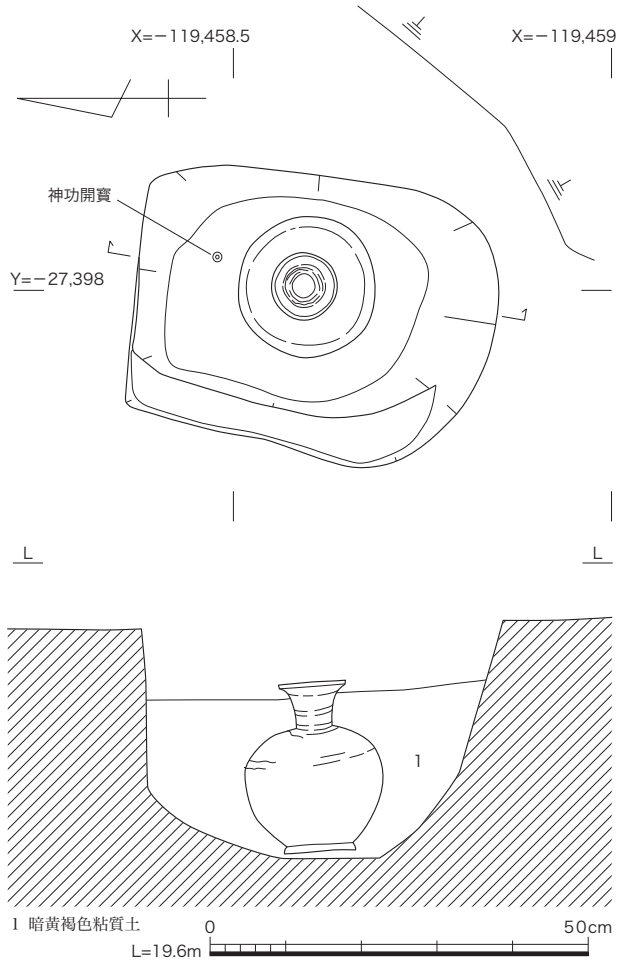
溝 SD03　調査区の北部で検出した東西方向に延びる素掘り溝で、調査区の西部で途切れていた。溝の幅は 0.5 ～ 0.7 m、深さは 0.15 mほどの規模があり、埋土は褐色粘質土層、暗褐色粘質土層、暗褐色土斑入明橙褐色土層であった。溝内からは、土師器、須恵器、平瓦など長岡京期の遺物が少量出土している。

溝 SD07・08　ともに幅約 0.3 m、深さ 0.1 m程度の南北方向の素掘り溝であるが、短く途切れている。

溝 SD09　溝 SD03 の南約 2.5 mで確認した東西方向の素掘り溝であるが、土坑 SK06 より以西には続いて行かない。幅 0.3 m、深さ 0.1 m、埋土は暗褐色粘質土層で、土師器、須恵器の破片が少量出土している。

溝 SD10　溝 SD03 のすぐ南にある東西方向の素掘り溝で、幅 0.3 ～ 0.35 m、深さは 0.05 mしか遺存していない。埋土は暗褐色粘質土層で、土師器、須恵器の破片が少量出土している。

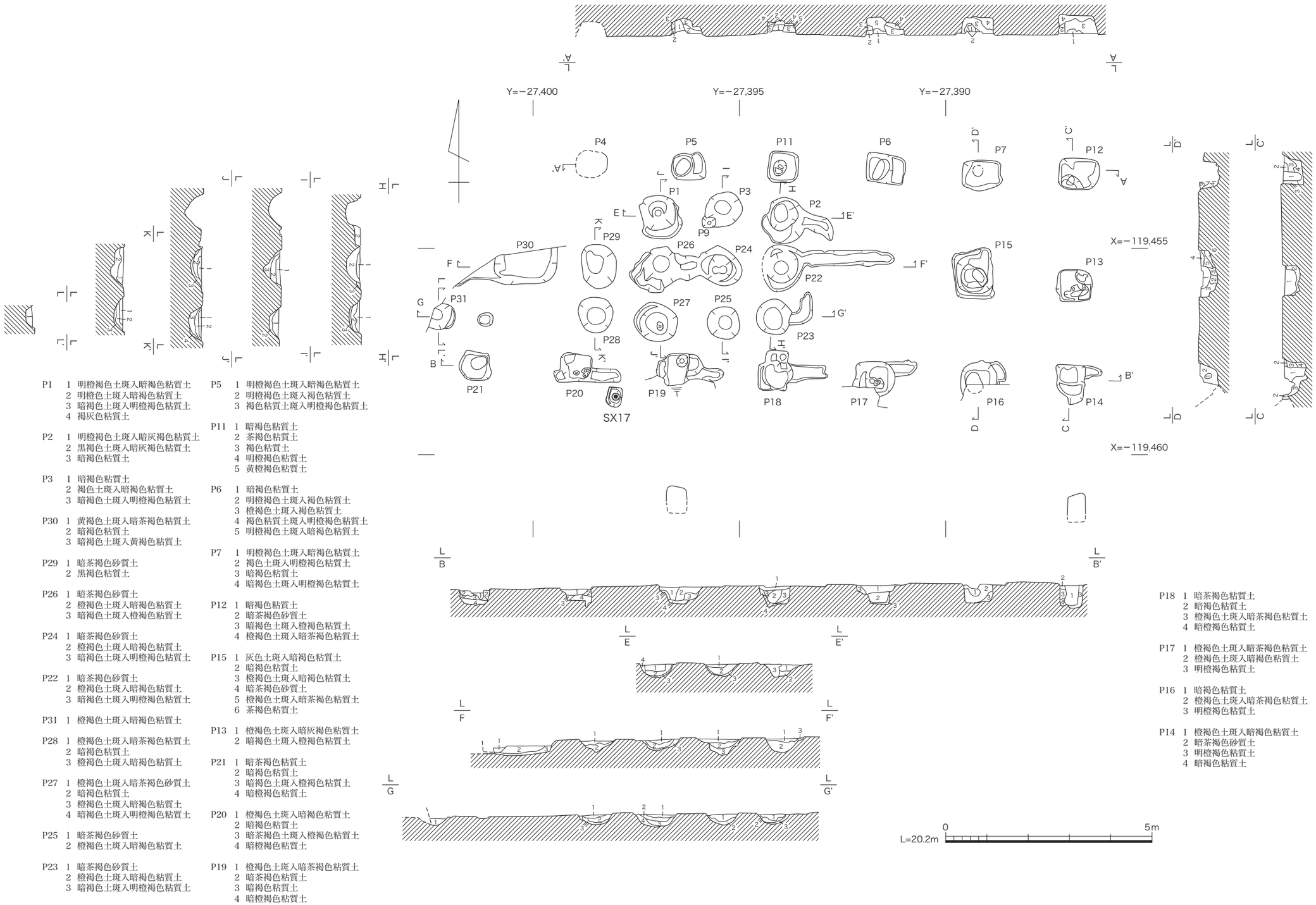
土坑 SK06　調査区の北東部で検出した不整形な土坑である。周溝 SD02 および溝 SD03 と重複しており、前者よりも新しいことが知られたが、後者との新旧関係を確認することはできなかった。東西約 5 m、南北 4.4 m以上、深さは 0.1 m程度の規模があり、埋土は暗茶褐色粘質土層であった。土坑内からは、土師器、須恵器、製塩土器、黒色土器、平瓦など長岡京期の遺物片が出土していることから、塵芥処理用の性格が考えられる。



第 4 – 4 図　土器埋納坑 SX17 実測図（1/10）

甕据え付け建物 SB12　南に廂が付く東西棟建物であるが、西側はさらに調査区外に延びている。身舎は、桁行が 6 間以上、梁行は 2 間に復元することができ、東から 1 間目には間仕切りが存在する。柱掘形は、身舎が一辺 0.8 ～ 1.2 mの隅円方形を呈し、深さは 0.3 ～ 0.6 m程度であった。廂は、確認できた掘形が 2 基のみであったが、一辺 0.4 ～ 0.5 m程度の隅円長方形を呈していた。掘形内の柱痕跡は径約 0.2 m前後であり、柱間寸法は桁行、梁行とも約 2.4 m（8 尺）等間、廂の出は 3 m（10 尺）に復元できる。

この建物で特徴的なのは、身舎の西半部に楕円形を呈する穴が南北に 3 列、東西に 7 列以上配されていることである。楕円形の穴は、直径が 0.8 ～ 1 m、



P1　1 明橙褐色土斑入暗褐色粘質土
2 明橙色土斑入暗褐色粘質土
3 暗褐色土斑入明橙褐色粘質土
4 褐灰色粘質土

P2　1 明橙褐色土斑入暗灰褐色粘質土
2 黒褐色土斑入暗灰褐色粘質土
3 暗褐色粘質土

P3　1 暗褐色粘質土
2 褐色土斑入暗褐色粘質土
3 暗褐色土斑入明橙褐色粘質土

P30　1 黄褐色土斑入暗茶褐色粘質土
2 暗褐色粘質土
3 暗褐色土斑入黄褐色粘質土

P29　1 暗茶褐色砂質土
2 黒褐色粘質土

P26　1 暗茶褐色砂質土
2 橙褐色土斑入暗褐色粘質土
3 暗褐色土斑入橙褐色粘質土

P24　1 暗茶褐色砂質土
2 橙褐色土斑入暗褐色粘質土
3 暗褐色土斑入明橙褐色粘質土

P22　1 暗茶褐色砂質土
2 橙褐色土斑入暗褐色粘質土
3 暗褐色土斑入明橙褐色粘質土

P31　1 橙褐色土斑入暗褐色粘質土

P28　1 橙褐色土斑入暗茶褐色粘質土
2 暗褐色粘質土
3 橙褐色土斑入暗褐色粘質土

P27　1 橙褐色土斑入暗茶褐色砂質土
2 暗褐色粘質土
3 橙褐色土斑入暗褐色粘質土
4 暗褐色土斑入明橙褐色粘質土

P25　1 暗茶褐色砂質土
2 橙褐色土斑入暗褐色粘質土

P23　1 暗茶褐色砂質土
2 橙褐色土斑入暗褐色粘質土
3 暗褐色土斑入明橙褐色粘質土

P5　1 明橙褐色土斑入暗褐色粘質土
2 明橙褐色土斑入褐色粘質土
3 褐色粘質土斑入明橙褐色粘質土

P11　1 暗褐色粘質土
2 茶褐色粘質土
3 褐色粘質土
4 明橙褐色粘質土
5 黄橙褐色粘質土

P6　1 暗褐色粘質土
2 明橙褐色土斑入褐色粘質土
3 橙褐色土斑入褐色粘質土
4 褐色粘質土斑入明橙褐色粘質土
5 明橙褐色土斑入暗褐色粘質土

P7　1 明橙褐色土斑入暗褐色粘質土
2 褐色土斑入明橙褐色粘質土
3 暗褐色粘質土
4 暗褐色土斑入明橙褐色粘質土

P12　1 暗褐色粘質土
2 暗茶褐色砂質土
3 暗褐色土斑入橙褐色粘質土
4 橙褐色土斑入暗茶褐色粘質土

P15　1 灰色土斑入暗褐色粘質土
2 暗褐色粘質土
3 橙褐色土斑入暗褐色粘質土
4 暗茶褐色砂質土
5 橙褐色土斑入暗茶褐色粘質土
6 茶褐色粘質土

P13　1 橙褐色土斑入暗灰褐色粘質土
2 暗褐色土斑入橙褐色粘質土

P21　1 暗茶褐色粘質土
2 暗褐色粘質土
3 暗褐色土斑入橙褐色粘質土
4 暗橙褐色粘質土

P20　1 橙褐色土斑入暗褐色粘質土
2 暗褐色粘質土
3 暗茶褐色土斑入橙褐色粘質土
4 暗橙褐色粘質土

P19　1 橙褐色土斑入暗茶褐色粘質土
2 暗茶褐色粘質土
3 暗褐色粘質土
4 暗橙褐色粘質土

P18　1 暗茶褐色粘質土
2 暗褐色粘質土
3 橙褐色土斑入暗茶褐色粘質土
4 暗橙褐色粘質土

P17　1 橙褐色土斑入暗茶褐色粘質土
2 橙褐色土斑入暗褐色粘質土
3 明橙褐色粘質土

P16　1 暗褐色粘質土
2 橙褐色土斑入暗茶褐色粘質土
3 明橙褐色粘質土

P14　1 橙褐色土斑入暗褐色粘質土
2 暗茶褐色砂質土
3 明橙褐色粘質土
4 暗褐色粘質土

第４−５図　甕据え付け建物 SB12 実測図（1/100）

深さは 0.25 ～ 0.4 mほどの規模があり、いずれも擂り鉢状に掘り窪められていた。その中には、P30 のように東西に連結して長楕円形を呈するものも認められた。楕円形穴の中からは、何も遺物は出土しなかったが、須恵器の大甕などを据え付けるために施されたものと推察でき、いわゆる甕据え付け建物であると判断するに至った。

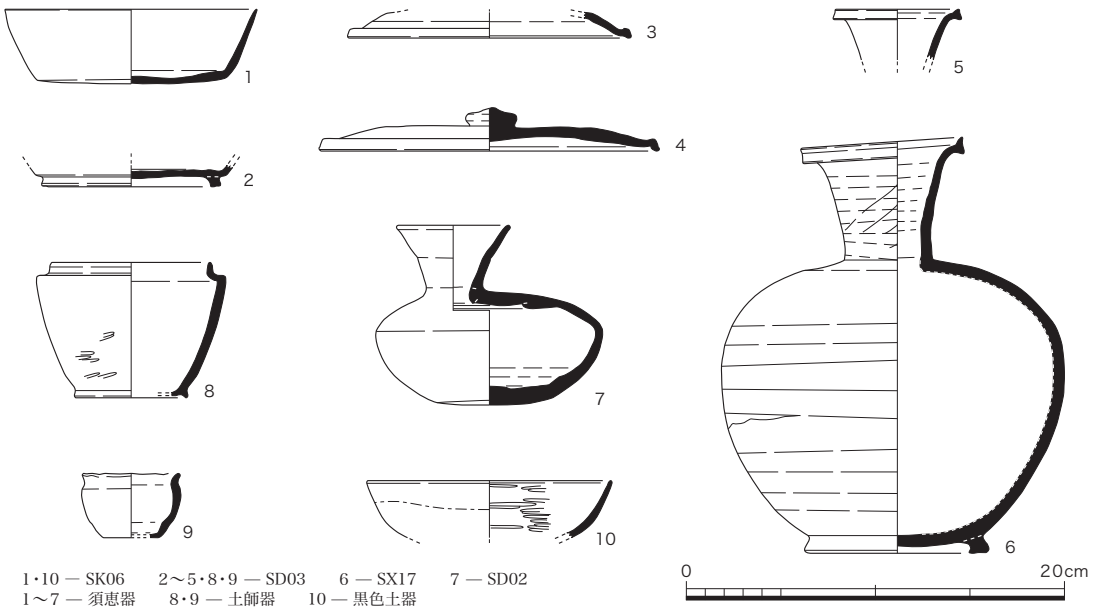
土器埋納坑 SX17　甕据え付け建物 SB12 の東から 5 間目の廂内で検出された土器埋納坑である。埋納坑は、東西 0.36 m、南北 0.47 mの南北にやや長い隅円長方形を呈しており、深さは 0.31 m程度で、ほぼ垂直に近く掘り窪められていた。底部はおおむね平坦で、そのほぼ中央には完形の須恵器の壺Ｌが正位の状態で据え置かれていた。埋納坑内の埋土は、暗黄褐色粘質土層であり、壺Ｌの北側の底部付近から神功開寶が 1 点出土したが、遺存状態が極めて悪く、取り上げ時に破砕してしまった。須恵器の壺Ｌ内には、水が入っていた以外は何も出土しなかった。

この他、近世の土坑 SK01 や時期不明の土坑 SK14・15 などの遺構があるが、ここでは説明を省略した。

出土遺物

（1）飛鳥時代の遺物

古墳の周溝 SD02 から出土した遺物には、須恵器の平瓶や甕、土師器の甕などがある。平瓶（第４－６図 7）は、体部最大径が 12cm の小型品である。扁球状の体部と上方に大きく開く口縁部が付く形態で、底部は丸みを帯びている。口縁部内面と体部外面には、灰緑色を呈した自然釉の付着が認められた。甕は体部の破片で、図示していないが、外面に平行タタキ、内面に同心円の当て具痕をとどめ、自然釉の付着が認められる。厚さは 0.5 ～ 0.6cm 程度に薄く仕上げている。平瓶の形態や法量などの特徴からみて、陶邑窯の TK209 型式ないし TK217 型式に比定することができる。したがって、飛鳥時代（古墳時代終末期）の範疇に属するものと考えておきたい。



1･10 ― SK06　2～5･8･9 ― SD03　6 ― SX17　7 ― SD02
1～7 ― 須恵器　8･9 ― 土師器　10 ― 黒色土器

第４－６図　出土遺物実測図（1/4）

付表４－１　出土遺物観察表

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	出土遺構	備考
			口径	器高	底径				
須恵器	杯A	1	13.3	4	–	淡灰褐色	回転ナデ、底部はヘラ切り	SK06	軟質焼成
	杯B	2	–	(1.1)	9.4	灰色	回転ナデ、底部はヘラ切り	SD03	
	杯B蓋	3	15	(1.4)	–	灰色	回転ナデ、天井部はヘラ切り	SD03	
		4	18	2.3	–	灰色	回転ナデ、天井部はヘラ切り	SD03	
	壺M	5	6.8	(2.7)	–	淡灰色	回転ナデ	SD03	
	壺L	6	8.6	22	9.8	灰色	回転ナデ、体部下半は回転ヘラケズリ	SX17	完形品 外面に自然釉が付着
	平瓶	7	5.8	9.5	12	灰緑色	回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ	SD02	口縁部内外面、体部外面に自然釉が付着
土師器	壺E	8	8.6	7.2	6	淡赤褐色	外面：ヘラケズリの後ミガキ 内面：ナデ	SD03	
	ミニチュア甕	9	5.2	3.4	3.1	茶褐色	口縁部内外面ナデ、他は未調整	SD03	
黒色土器	杯A	10	13	(3)	–	外面：茶褐色 内面：漆黒色	外面：ナデ 内面：ナデの後ミガキ	SK06	口縁部外面と内面を黒色化

（２）長岡京期の遺物

土坑 SK06 からは、土師器の皿Ａ・甕、須恵器の杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｂ蓋、黒色土器の杯Ａ、製塩土器、平瓦などの遺物が出土している。須恵器杯Ａ（1）は、焼成が甘くて軟質に仕上がっているため、全体に摩滅している。黒色土器の杯Ａ（10）は、口縁部外面と内面を黒色化した黒色土器Ａ類であり、胎土に砂粒を比較的多く含み、色調は茶褐色を呈している。

溝 SD03 出土遺物には、須恵器の杯Ｂ（2）・杯Ｂ蓋（3・4）・壺Ｍ（5）、土師器の壺Ｅ（8）・ミニチュア土器（9）などがある。須恵器杯Ｂ蓋は、ともに口縁端部が屈曲するタイプで、４は扁平なつまみを貼り付けている。土師器壺Ｅは、全体に摩滅しているため調整手法は不明瞭であるが、外面にミガキの痕跡をとどめている。ミニチュア土器は、カマドとセットになる甕形で、底部は平底、口縁部のみをヨコナデ調整して仕上げている。

土器埋納坑 SX17 からは、須恵器壺Ｌ（6）と神功開寶が１点出土している。須恵器壺Ｌは、球形に近い体部に細長く上方に延びる口縁部が付く形態で、口縁端部は上下に拡張させて面をなしている。頸部には絞り目の痕跡をとどめており、底部には高さ 0.6cm 程度の高台を貼り付けている。完形品で、胎土に長石、石英などを含み、色調は灰色を呈している。内外面には、自然釉の付着が部分的に認められる。

小　結

右京第 301 次調査は、小規模な調査であったが、多岐にわたる成果を得ることができた。以

下にまとめておきたい。

まず、この調査で検出した埋没古墳は、径 10 m程度の小円墳に復元できるものであって、明確な築造時期の決めてに欠けるが、おおむね 7 世紀前半頃に比定することができた。開田古墳群東羅支群 1 号墳と名称を付したが、その後周辺における発掘調査が進展した結果、東羅支群では現在のところ古墳 13 基と土壙墓 4 基程度が確認されている。古墳の多くが、低位墳丘をもつ方墳で、埋葬施設が木棺直葬に復元されていること、埴輪を持つ古墳があること、時期的には古墳時代中期後半～飛鳥時代（古墳時代終末期）であることが知られる。これらの点からすれば、本例の墳形は異質であるといえよう。また、長岡京期の溝や土坑、建物と重複していることから、長岡京を造営する際に取り残されず、破壊された可能性が濃厚と考えられる。

次に、甕据え付け建物についてであるが、この特徴ある建物は長岡京の右京第 217 次調査[注1]で確認されて以来、広く類例が知られるようになったものである。長岡京ではこれまでのところ、右京域で 7 例、左京域で 8 例の計 15 例が確認されているが、長岡宮内では未確認である。傾向としては、廂付き建物が多いこと、東西棟建物が多いことなどの特徴を指摘することができ、特に右京八条二坊七町という長岡京の南部地域に複数存在することは興味深いことである。こうした甕据え付け建物の性格については、酒や麹などの醸造に関係する施設との指摘がなされており、平城宮の酒造司推定地では井戸とセットになって複数確認されている[2]。

最後に土器埋納坑については、平城京跡や長岡京跡などの都城遺跡はもとより、寺院跡や官衙遺跡、それに一般の集落遺跡においても確認されている。平城京跡では 140 例近くも確認されており、長岡京跡では管見にのぼる限り 20 数例ほどある。埋納坑内に埋め置かれた埋納容器としての土器類は、蓋をした須恵器の杯Ｂや壺Ａ、土師器甕などの器種が多くを占めており、本例のように須恵器の壺Ｌは稀少である。たとえば、平城京跡では左京五条三坊八坪で 1 例（SX06）[3]、左京五条四坊十坪で 2 例（SX804・SX814）[4] 確認されているが、SX804 は三彩の火舎、SX814 は土師器の皿Ａや椀Ａと共伴しており、本例のように単独で埋納される場合はさらに少ないようである。こうした土器埋納坑の性格については、鎮壇や地鎮など鎮祭に関係するもの、あるいは「胞衣壺」に関わるものなど様々な解釈がなされている[5]が、甕据え付け建物内で確認された本事例は興味深い資料といえよう。（山本　輝雄）

注 1）木村泰彦「右京第 217 次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和 60 年度　1987 年

2）甕据え付け穴建物に関する主な論考には以下のものがある。
堀内明博「長岡京出土の特殊建物遺構に関する 2・3 の覚え書き」『長岡京古文化論叢』 1992 年
木村泰彦「甕据え付け穴を持つ建物について」『瓦衣千年』 1999 年
玉田芳英「平城宮の酒造り」『文化財論叢』Ⅲ　2002 年

3）原田香織「平城京跡（左京五条三坊八坪・東三坊坊間路）の調査」『奈良市埋蔵文化財調査年報』
平成 19（2007）年度　2010 年

4）宮崎正裕他「平城京跡（左京五条四坊十坪・坊間東小路）の調査」『奈良市埋蔵文化財調査年報』
平成 20（2008）年度　2011 年

5）上村和直「都城における埋納遺構」『瓦衣千年』 1999 年
森川　実「平城京の地鎮とその執行者」『文化財論叢』Ⅳ　2012 年

第 4 – 7 図　古墳周溝 SD02 検出状況（西から）

第 4 – 8 図　古墳周溝 SD02 完掘状況（西から）

第 4 – 9 図　古墳周溝 SD02 全景（南西から）

第 4 –10 図　甕据え付け建物 SB12 全景（西から）

第 4 –11 図　甕据え付け建物 SB12 の甕据え付け穴（南東から）

第 4 –12 図　土器埋納坑 SX17 全景（西から）

第 4 –13 図　出土遺物

5．長岡京跡右京第 376 次調査

～ 古墳時代・長岡京期　開田古墳群、古墳・土坑等出土資料 ～

調 査 地　長岡京市開田一丁目 6 － 6　　**地 区 名**　7ANKAN － 1 地区

調査期間　1991（平成 3）年 6 月 25 日～ 10 月 31 日　　**調査面積**　1,473㎡

時　　期　古墳時代後期、長岡京期　　**出土遺物**　35 箱

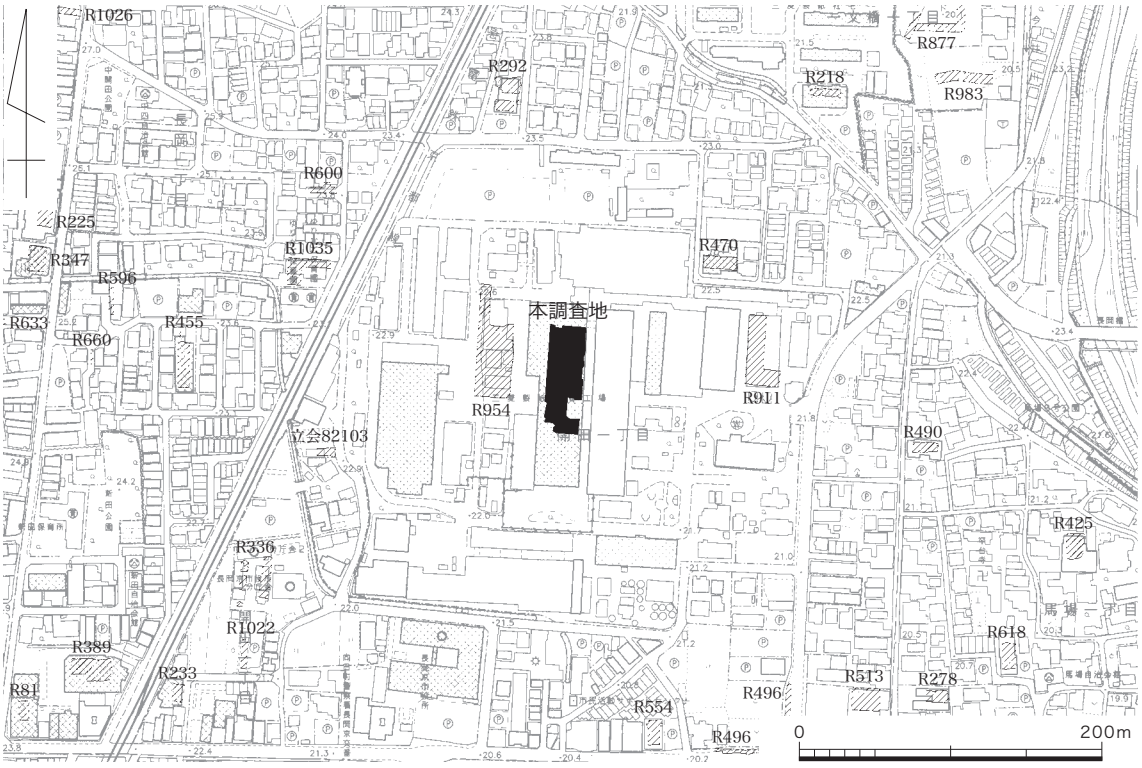
立　　地　低位段丘Ⅰ　　標高 24 m

参考文献　「右京第 376 次調査略報」『長岡京市センター年報』平成 3 年度　1993 年

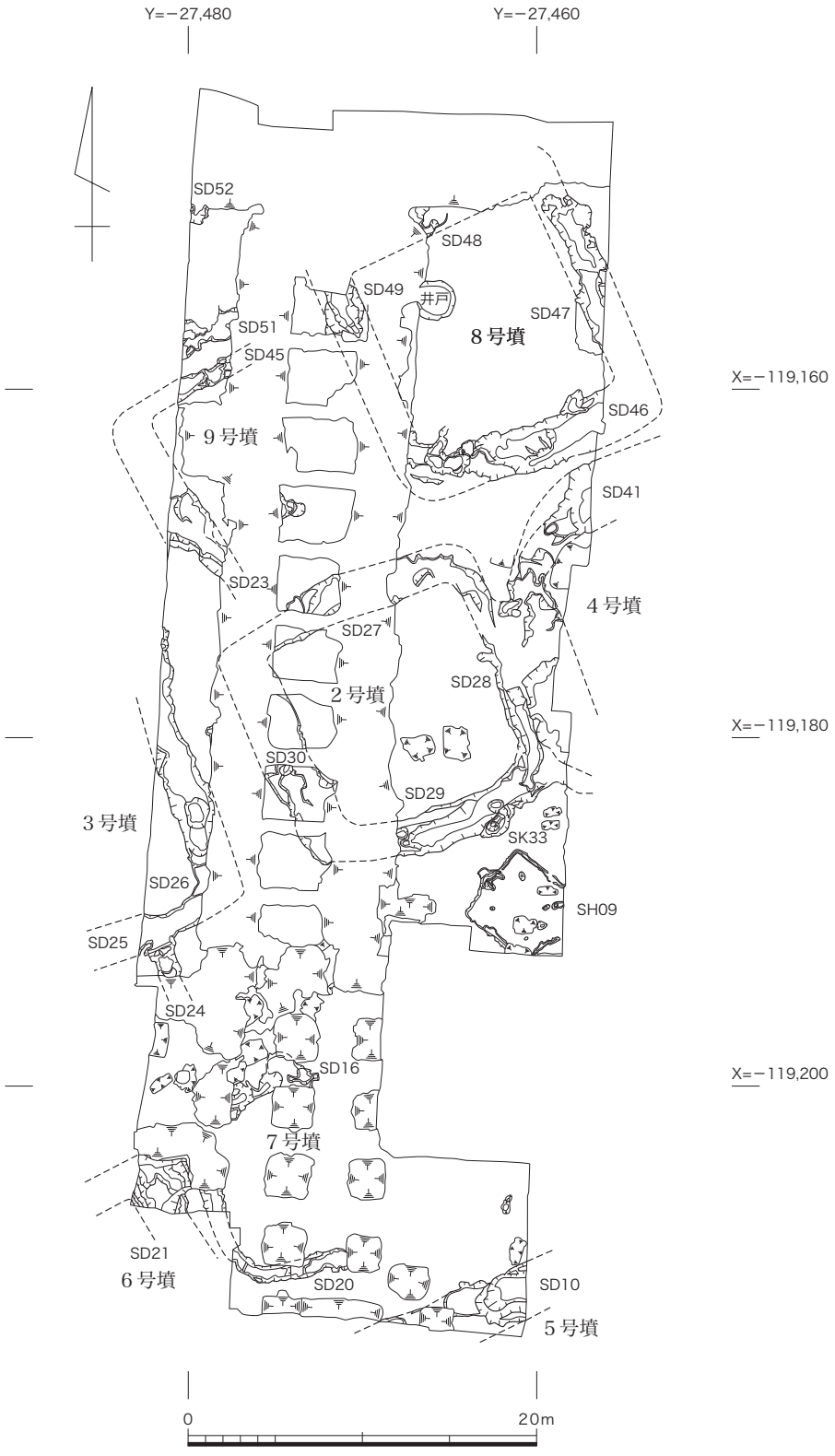
調査の概要

調査は、工場の施設建設工事に伴い実施したものである。調査地は、阪急京都線長岡天神駅より北北東約 500 mの地点に所在しており、地形的には標高が 24 m前後の低位段丘Ⅰ上に立地している。長岡京の条坊復原によると、右京五条二坊三町の北西部に相当し、すぐ北側には五条条間小路が東西に、すぐ西側には西二坊坊間東小路が想定される所であった。

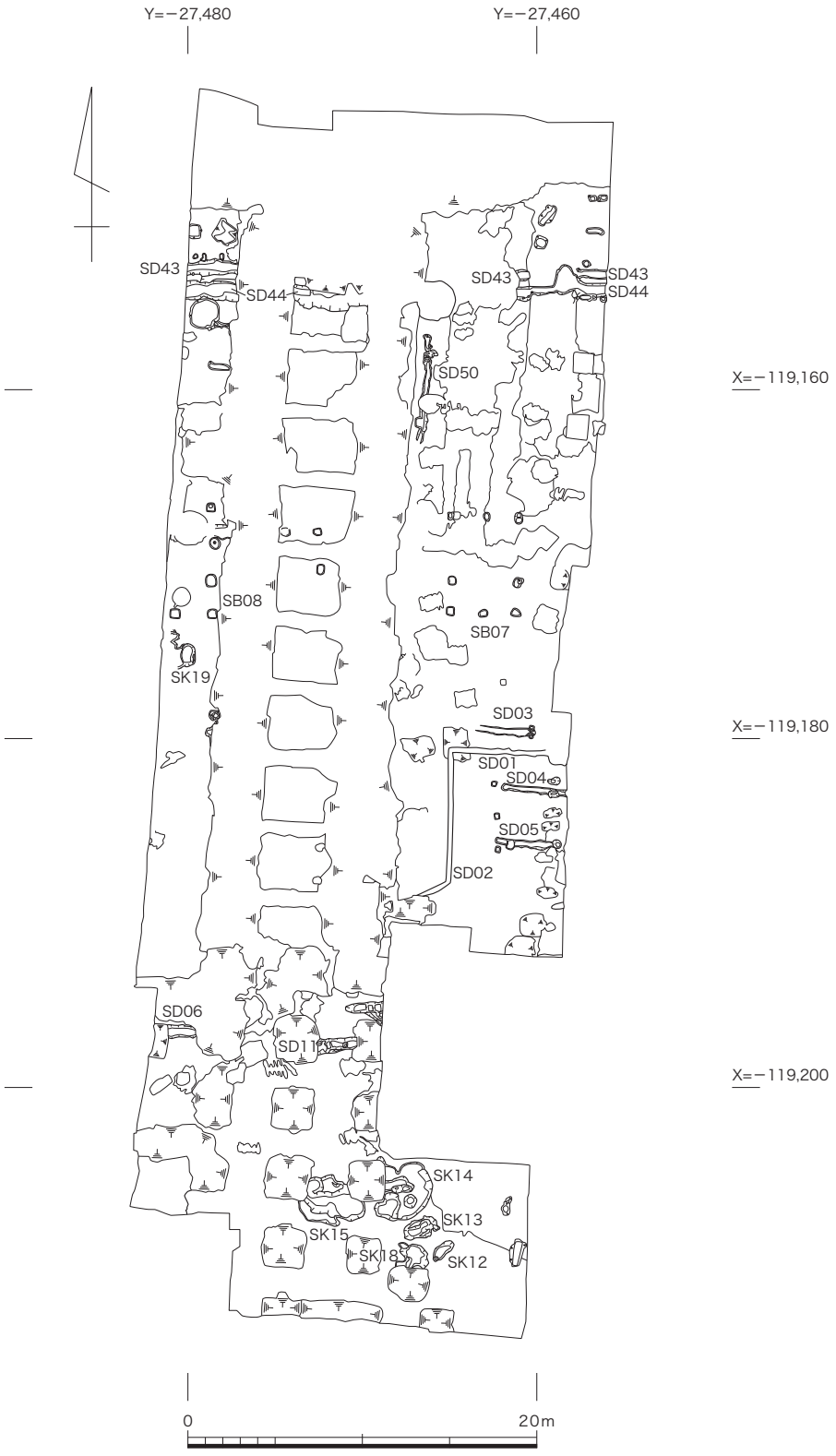
調査にあたっては、敷地内に残土置き場を確保する必要から南北 2 回に分けて行うことになった。まず、6 月 25 日から南半部の調査に着手し、それが終了した 9 月 11 日からは北半部の調査に移行し、10 月 31 日に現地での調査を終了した。調査区内は、工場の建物基礎などによって縦横に大きく撹乱を受けていたため、当初の調査面積を縮小することになるとともに、遺構の残存度も良好とはいえない状況であった。しかしながら、地表下 0.3 mほどの地山面上において



第 5 – 1 図　発掘調査地位置図（1/5000）



第 5 − 2 図　古墳時代の検出遺構図（1/400）



第 5 − 3 図　長岡京期以降の検出遺構図（1/400）

開田古墳群に関わる埋没古墳７基と竪穴建物１棟をはじめ、長岡京期の掘立柱建物２棟や土坑１基、それに近世の小溝など数多くの遺構を重複した状態で検出することができ、大きな成果を得ることができた。また、遺物の出土状況や遺構の重複関係から見て、埋没古墳はいずれも長岡京を造営する際に墳丘が削平され、周溝の埋め立てられたことが判明したことも、都の造営に際し古墳がどのように取り扱われたかを検討する上に興味深い成果であるといえよう。

ちなみに、五条条間小路については、その想定地が大きく撹乱を受けており、確認することはできなかった。

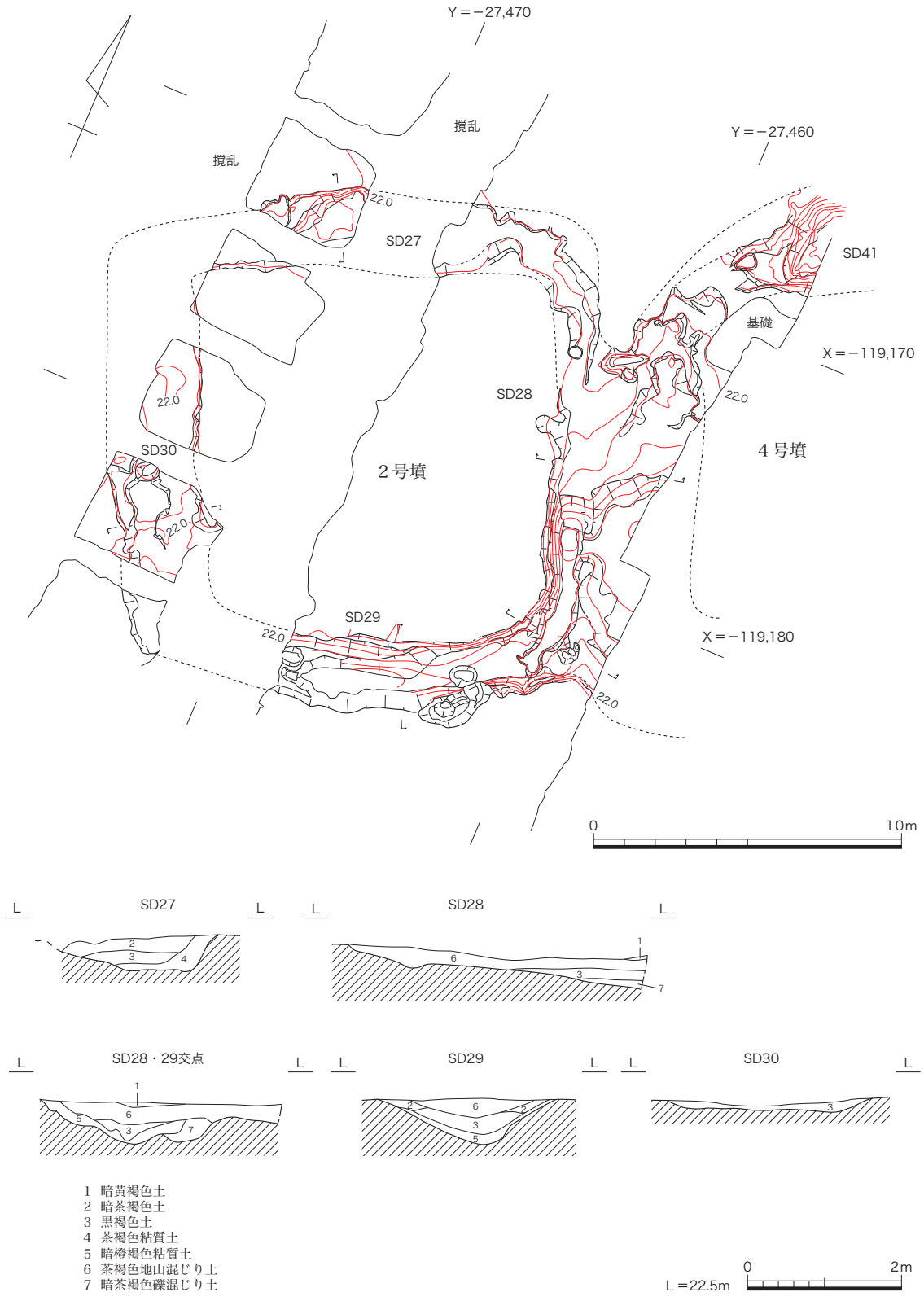
検出遺構

（１）古墳時代の遺構

この時代の遺構としては、墳丘が削平を受けたいわゆる埋没古墳７基と竪穴建物１棟を確認することができた。埋没古墳は、いずれも地形の傾斜に沿っておおむね方位を揃えて築造されており、周溝を近接させつつ密に分布していた。

開田２号墳　調査区のほぼ中央部で確認した埋没古墳で、主軸はおおむね北で西に 25° 程度振れた方墳であることが判明した。墳丘や埋葬施設は、完全に削平を受けて遺存しておらず、四周に巡らされた周溝も撹乱によって分断された状況であった。このため、正確な数値を把握することはできないが、一辺が 12 m前後の規模に復元することができる。南周溝 SD29 は、幅 2.1 ～ 2.4 m、深さは 0.4 ～ 0.5 mほどの規模があり、底部は平坦ではなく、凹凸が顕著に認められた。周溝内の埋土は、上から茶褐色地山混じり土層（第１層）、暗茶褐色土層（第２層）、黒褐色土層（第３層）、暗橙褐色粘質土層（第４層）に分けることができ、土師器の甕や須恵器の壺・甕など古墳に供献されたとみられる遺物が散乱した状態で出土した。北周溝 SD27 は、幅 2.2 m前後、深さ 0.15 ～ 0.45 mあり、埋土は上から暗茶褐色土層（第１層）、黒褐色土層（第２層）、茶褐色粘質土層（第３層）に分けられ、須恵器の甕や土師器の甕などの遺物が出土している。東周溝 SD28 は、後述する４号墳の西周溝と接していたが、新旧の関係を確認することはできず、一体のものとして掘り下げを行った。全体の幅は 3.8 m以上、深さ 0.65 ～ 0.85 m程度あって、埋土は上から茶褐色地山混じり土層（第１層）、黒褐色粘質土層（第２層）、暗茶褐色礫混じり土層（第３層）の３層に分けられ、須恵器の壺や土師器の甕などの遺物が出土した。西周溝 SD30 は、幅約 2.8 m、深さ 0.25 ～ 0.35 m、埋土は黒褐色土層のみであり、古墳に伴う遺物は出土していないが、布にくるまれたとみられる銭貨が出土している。このように周溝内から、銭貨が出土していることで、長岡京期に周溝が埋め立てられたことを窺い知ることができる。

開田３号墳　２号墳の西側約３ｍを隔てて所在する方墳である。東周溝 SD26 と南周溝 SD25 の一部を確認したのみで、大半が調査区域外にあるため規模の詳細は不明といわざるを得ない。東周溝 SD26 は、幅約 2.2 m、深さ 0.2 ～ 0.75 mの規模で、埋土は上から暗茶褐色土層（第１層）、黒褐色土層（第２層）の上下２層に分けることができた。南周溝 SD25 は、幅 1.3 ～ 1.7 m、深さ 0.2 ～ 0.3 mほどで、埋土は黒褐色土層のみであった。周溝内からは、須恵器の杯身・甕などの遺物が少量出土している。

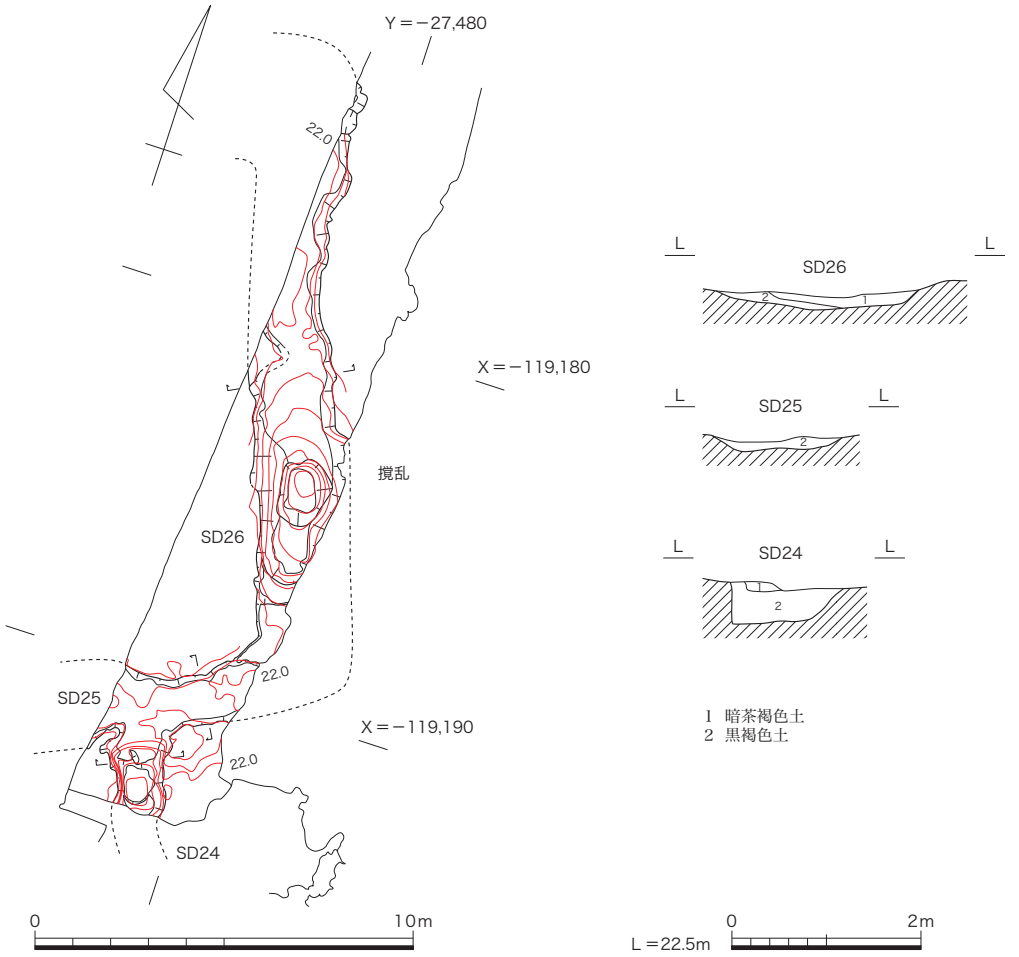


第 5 − 4 図　開田 2 ・ 4 号墳実測図（1/200・1/80）

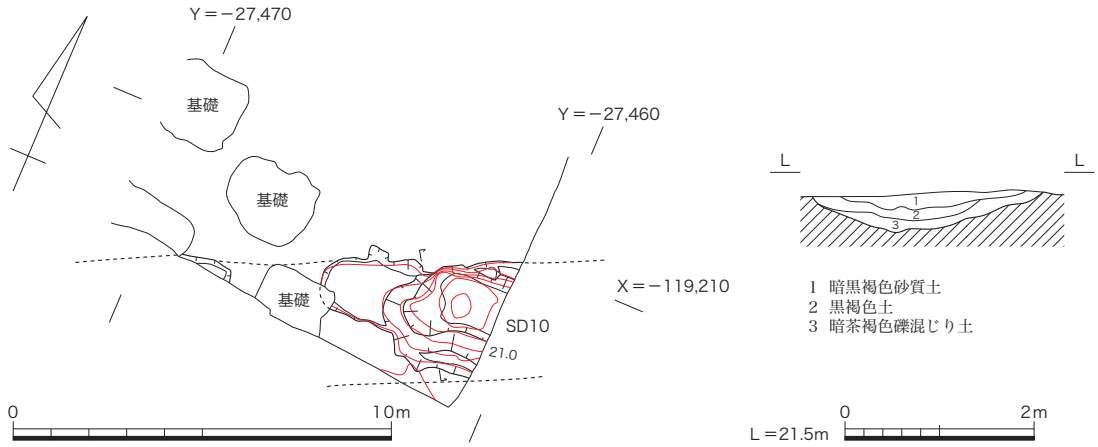
開田４号墳　２号墳の東側に所在する方墳で、西周溝は２号墳の東周溝 SD28 に連接している。大半が調査区外にあるため、形態や規模などの詳細は不詳であるが、２号墳と同程度の規模ではないかと考えられる。北周溝 SD41 の幅は 1.5 ～ 3.5 m前後、深さ 0.15 ～ 0.95 mほどあり、埋土は上から黒褐色粘質土層（第１層）、暗茶褐色粘質土層（第２層）、茶褐色粘質土層（第３層）、暗黄褐色砂質土層（第４層）に分けることができた。周溝内からは、須恵器の杯身・杯蓋・大甕など古墳に伴うとみられる遺物の他、長岡京期の土師器羽釜なども出土しており、長岡京期に周溝の埋没したことが知れた。

開田５号墳　調査区の南東隅で検出した北東～南西方向の斜行溝 SD10 で、溝の方位や出土した遺物の内容から方墳の周溝と判断し、南側に墳丘が存在したものと考えられた。幅 2.8 m前後、深さは 0.1 ～ 0.6 mの規模で、溝底は凹凸が認められた。埋土は、上から暗褐色砂質土層（第１層）、黒褐色土層（第２層）、暗茶褐色礫混じり土層（第３層）に分けることができ、普通円筒埴輪の破片の他に、長岡京期の土師器や須恵器など新旧の遺物が混在した状態で出土しており、この周溝も長岡京期に埋没したことが知られる。

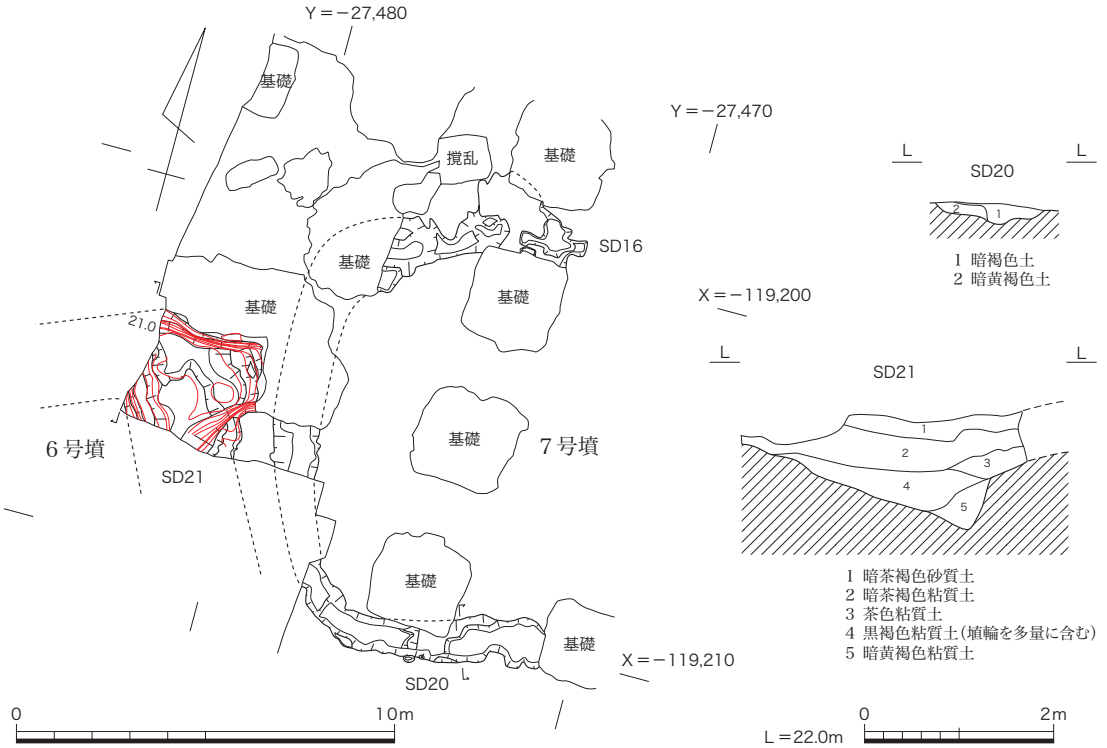
開田６号墳　調査区の南西隅部で検出した溝 SD21 は、埴輪片が出土したことから古墳の周溝と判断した。ただし、周溝の一端しか確認していないので、墳形や規模などの詳細は不明であ



第５－５図　開田３号墳実測図（1/200・1/80）



第５－６図　開田５号墳実測図（1/200・1/80）



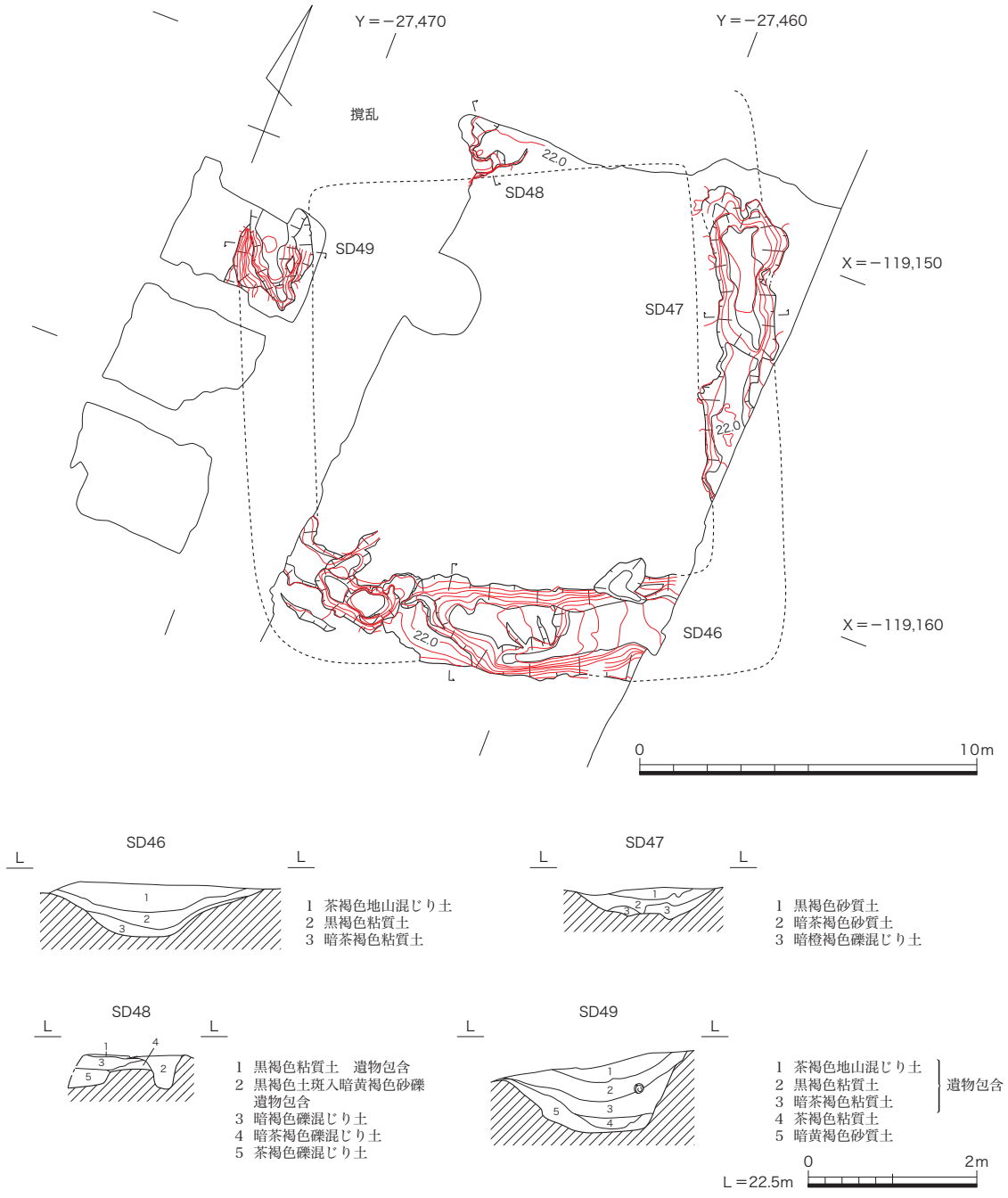
第５－７図　開田６・７号墳実測図（1/200・1/80）

るが、方墳の北東隅に相当するものと考えられる。周溝 SD21 は、幅約３m、深さ１m程度の規模があり、断面がU字状に深く掘り窪められていた。埋土は、上から暗茶褐色砂質土層（第１層）、暗茶褐色粘質土層（第２層）、茶色粘質土層（第３層）、黒褐色粘質土層（第４層）、暗黄褐色粘質土層（第５層）に分けることができた。そのうち第４層からは、須恵器の瑞や甕、普通円筒埴輪、家形埴輪などの遺物がまとまって出土している。埴輪は、大半が細片の状態であって、埋没時に破砕された可能性が濃厚と考えられる。

開田７号墳　５号墳の北側、６号墳の東側に接するように位置する方墳である。北周溝 SD16 と南周溝 SD20 は、ともに途中で途切れており、東周溝は確認できなかったため、確証すること

はできないが、本来は全周しているものと推察される。古墳の規模は、一辺 9 m前後に復元することができ、今回確認した古墳の中では最も規模の小さなものである。北周溝 SD16 は、幅が 0.4 ～ 1.5 m、深さは 0.05 ～ 0.2 m、南周溝 SD20 の幅は約 1.2 m、深さ 0.25 m程度の規模があり、埋土は暗褐色土層（第 1 層）と暗黄褐色土層（第 2 層）の上下 2 層に分けられるが、周溝内からの遺物は土師器の小片が少量出土したにすぎなかった。このため、明確な時期を特定するまでには至らなかった。

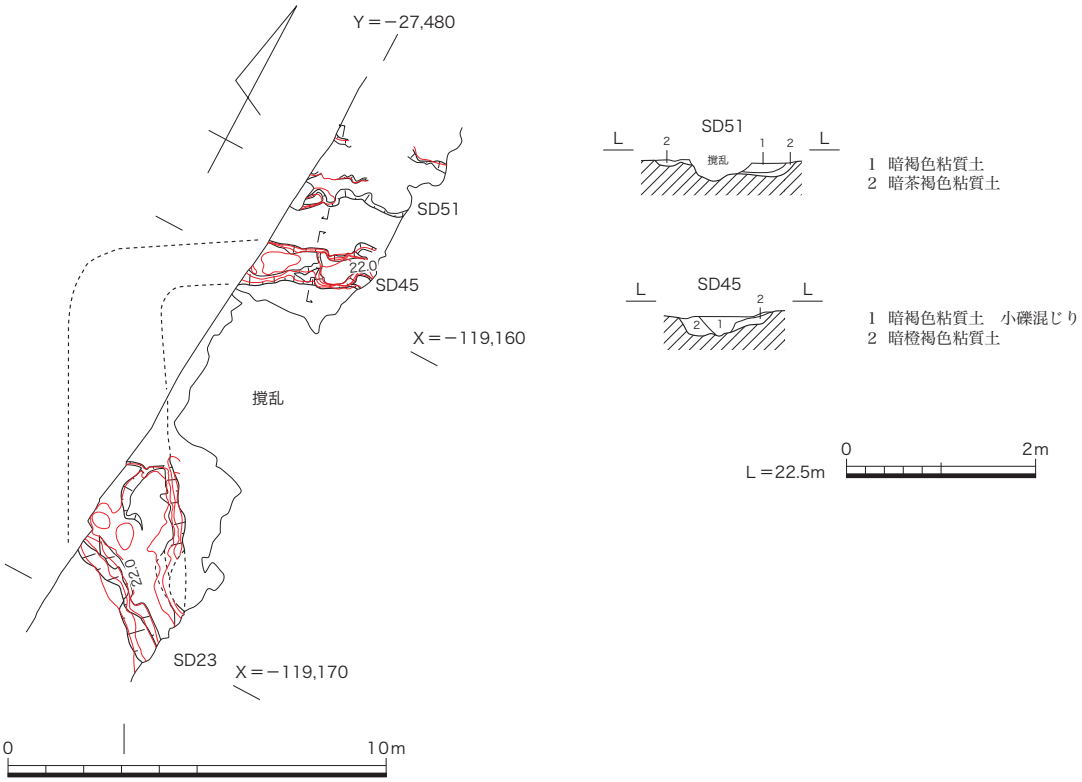
開田 8 号墳　調査区の北東部で検出した方墳で、北周溝 SD48、南周溝 SD46、東周溝 SD47、西周溝 SD49 を確認したが、いずれも断片的なもので、とりわけ北周溝 SD48 と西周溝 SD49 の



第 5 − 8 図　開田 8 号墳実測図（1/200・1/80）

残存の度合いは悪い状況であった。このため、墳丘の規模は確定できないが、おおよそ一辺 12 m程度に復元することができる。各周溝の底部は平坦ではなく、凹凸が顕著に認められた。埋土の状況は、東周溝 SD47 は、幅 1.7 ～ 2.2 m、深さ 0.2 ～ 0.45 m程度あり、上から黒褐色砂質土層（第 1 層）、暗茶褐色砂質土層（第 2 層）、暗橙褐色礫混じり土層（第 3 層）の 3 層に分けられる埋土が堆積していた。西周溝 SD49 は、幅 2.5 m前後、深さは 0.7 ～ 1.15 mで、上から茶褐色地山混じり土層（第 1 層）、黒褐色粘質土層（第 2 層）、暗茶褐色粘質土層（第 3 層）、茶褐色粘質土層（第 4 層）、暗黄褐色砂質土層（第 5 層）に細分できる埋土が堆積していた。南周溝 SD46 は、幅 2.6 m前後、深さ 0.4 ～ 0.85 mほどあり、埋土は茶褐色地山混じり土層（第 1 層）、黒褐色粘質土層（第 2 層）、暗茶褐色粘質土層（第 3 層）に分けられた。遺物は、西周溝 SD49 および南周溝 SD46 に偏在しており、前者の第 2・3 層からは須恵器の杯身、甕、土師器の小壺などが、また後者の第 2 層からは須恵器の杯身・杯蓋・短頸壺・甕・甕、土師器の甕・小壺など多彩な遺物がまとまって出土している。土師器や須恵器の小型器種類は、完形もしくはそれに近い状態で出土したが、須恵器の甕類については散乱した状態であった。

開田 9 号墳　2 号墳の北側、8 号墳の西側に位置する方墳と考えられ、東周溝は 8 号墳の西周溝 SD49 と、また南周溝は 2 号墳の北周溝 SD27 と共有しているものと推察できる。一辺の規模は、11 m前後に復元することができる。北周溝 SD45 は、幅 0.9 ～ 1.1 m前後、深さは 0.1 ～ 0.3 mしかなく、埋土は上から暗褐色粘質土層（第 1 層）、暗橙褐色粘質土層（第 2 層）の上下 2 層に分けられた。西周溝 SD23 は、幅 1.3 ～ 3 m、深さ 0.35 m程度の規模である。周溝内からは、



第 5 – 9 図　開田 9 号墳実測図（1/200・1/80）

遺物はほとんど出土していなかったため、明確な時期を決めかねるが、他の古墳と大きな時期差はないものと推察することができる。

竪穴建物 SH09　2 号墳のすぐ南側で確認した竪穴建物である。平面の形態は、一辺約 4.9 m 四方の隅円方形を呈しているが、深さは 0.1 ～ 0.15 m程度しか遺存していなかった。建物は、地形の傾斜に沿って営まれており、主軸の振れは北で西に約 50° 程度で、先に説明した方墳群の主軸の振れとは明らかに異なっていた。四周に幅 0.2 ～ 0.3 m、深さが 0.1 mほどの周壁溝を巡

第 5 –10 図　竪穴建物 SH09 実測図（1/50）

らせているが、北西部には及んでいなかった。比較的平坦な建物の床面上では、P1 ～ 4 の主柱穴を確認することができた。P1 は、径 0.15 ～ 0.2 mの楕円形を呈し、深さは約 0.38 mである。P2 は、長径 0.3 ～ 0.5 mの長楕円形で、深さは約 0.45 mである。P3 は、径約 0.2 mの円形、0.2 mの深さがある。P4 は、上面を撹乱されていたが、径 0.25 ～ 0.3 mの楕円形で、深さは約 0.25 mであった。これらの主柱穴は、おおむね建物の対角線上に配置されており、それぞれの間隔は 2.6 m程度で、大きな差はなかった。また、いずれの主柱穴からも遺物は出土しなかった。

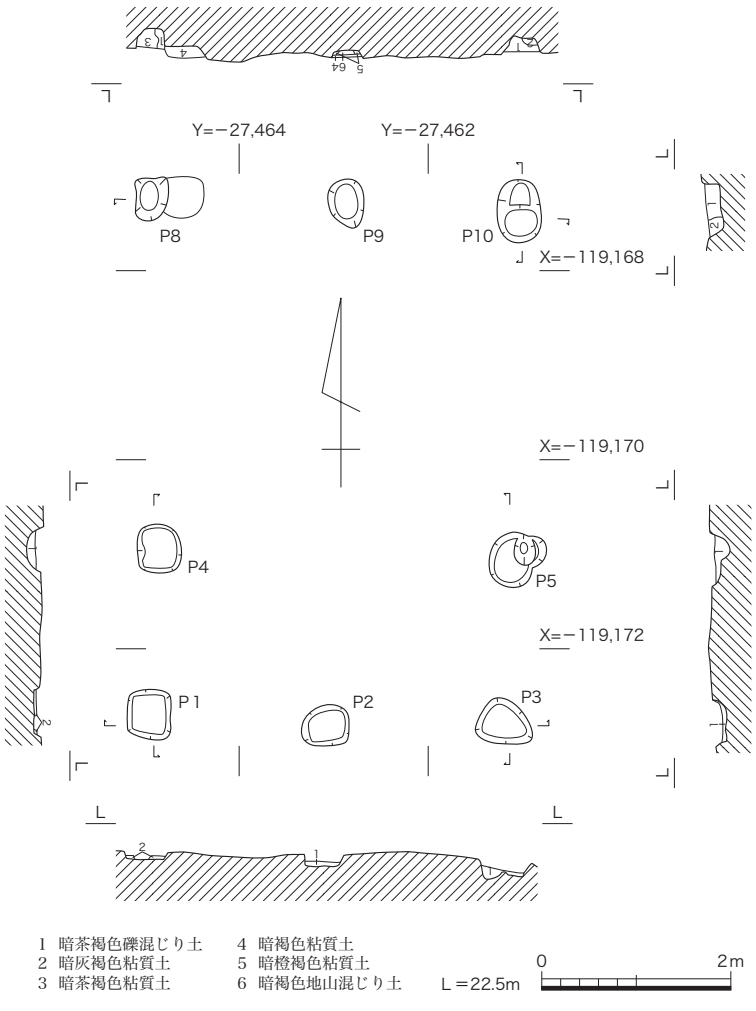
この建物には、北西辺のほぼ中央部に造り付けのカマドを設けていた。カマドは、黄色系の粘土を馬蹄形に施して構築したもので、長さ約 1.1 m、幅約 0.75 mの規模があり、北側に突出するように煙道を施していた。カマドの中央には、13cm 四方の石材を据え置いて支脚としていて、その周辺からは煮炊きに使用されたと考えられる土師器の甕が散乱した状態で出土した。また、建物の北東隅からは土師器の甕片が出土した他、北西辺の中央付近では須恵器の杯身が 1 点正位の状態で出土している。この他、長岡京期の須恵器杯Ｂ蓋など新しい時代の遺物も少量ではあるが混入した状態で出土している。

（2）長岡京期の遺構

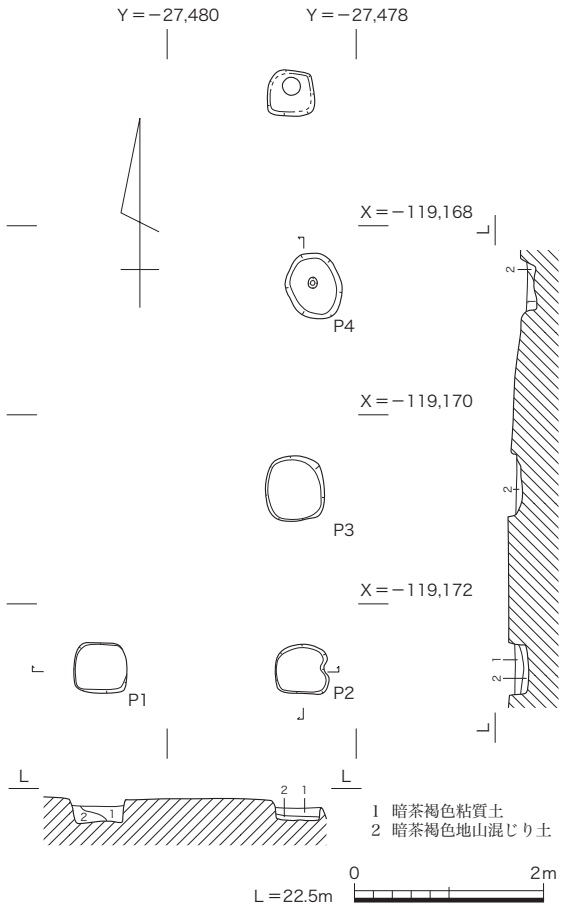
この時期の遺構には、掘立柱建物 2 棟と土坑 1 基などがあるが、埋没古墳の場合と同様に、遺存状態は良好ではなかった。

掘立柱建物 SB07　調査区の北東部で検出した桁行 3 間、梁行 2 間に復元できる南北棟建物で、北から 2 列目の柱掘形は撹乱により破壊されて存在しない。2・4 号墳と重複しており、両者を破壊して建設されていることが判明した。柱掘形は、一辺 0.4 ～ 0.5 m程度の隅円方形を呈しており、柱痕跡は不明瞭であったが、柱間寸法は桁行、梁行とも約 1.8 m（6 尺）等間に復元することができる。

掘立柱建物 SB08　調査区の北西部で、土坑 SK19 の



第 5 −11 図　掘立柱建物 SB07 実測図（1/80）



第 5 −12 図　掘立柱建物 SB08 実測図（1/80）

すぐ北側において検出した桁行 3 間、梁行 2 間程度の南北棟建物と考えられる。9 号墳と重複しており、それを破壊して建てられているものと考えられる。また、南柱列は SB07 の南柱列と柱筋をおおむね揃えるように建てられている。柱掘形は、一辺 0.4 ～ 0.6 m程度の隅円方形を呈しており、柱間寸法は桁行、梁行とも 2.1 m（7 尺）等間に復元できる。

土坑 SK19　調査区の西辺中央部で検出した南北にやや長い不整形な土坑である。長辺約 1.3 m、短辺 0.8 m、深さは 0.3 m前後の規模があり、埋土は茶褐色砂質土層のみであった。土坑内からは、拳大程度の石材とともに須恵器の杯 B と平瓦の破片、それに獣歯が出土していることは注目される。

この他、掘立柱建物 SB07 と掘立柱建物 SB08 の間で柱掘形状の遺構を 2、3 基検出しているが、建物になるか否かを確認することはできなかった。

（3）近世の遺構

この時期の遺構には、溝 SD03 ～ 06・11・43・44 など東西方向の小溝や土坑 SK12 ～ 15・18 など不整形な土坑を確認している。

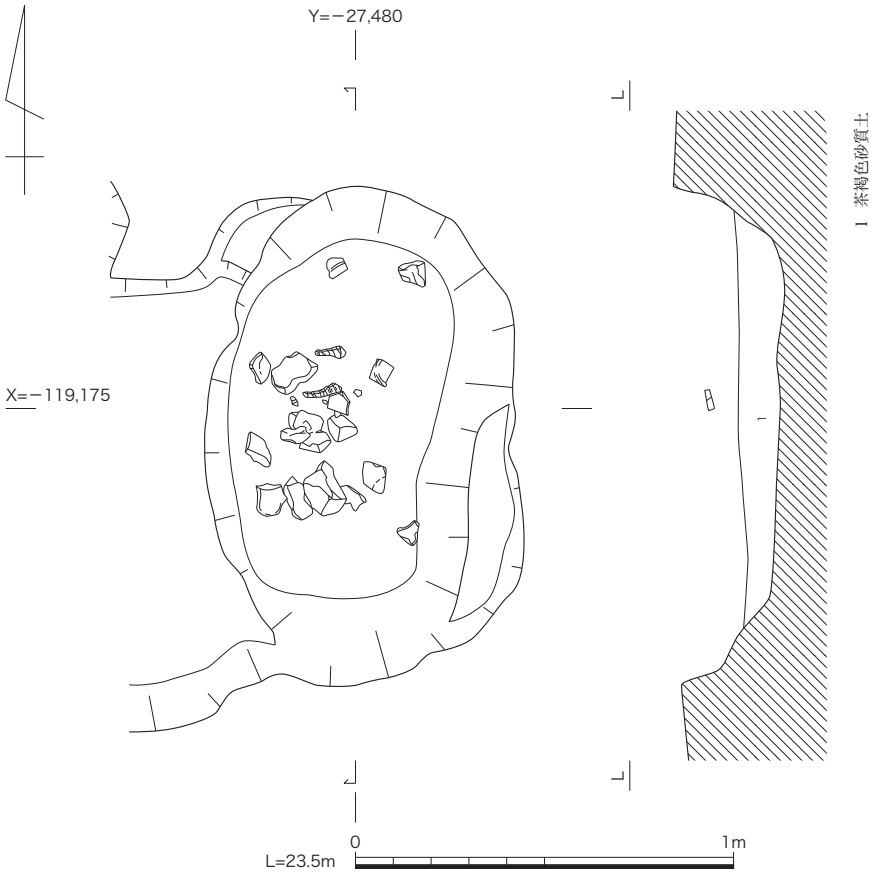
出土遺物

（1）古墳時代の遺物

開田 2 号墳出土遺物（第 5 −14 図、付表 5 − 1）　土師器、須恵器、銭貨など古墳時代と長岡京期のものが出土している。以下、古墳時代の遺構から出土した長岡京期の遺物については、次節でまとめて説明する。

土師器には、壺（6・7）・甕（5）などがある。5 は、緩やかに屈曲する口縁部をもち、長胴の甕になるものと考えられる。体部の内外面をタテハケによって調整する。壺は、くの字状に外反する口縁部をもち、体部外面はナナメハケ、内面は 6 がナナメハケ、7 が板状のナデを施して仕上げている。

須恵器には、広口壺（2・3）・甕（1・4）などがある。広口壺は、頸部に断面三角形の突帯と波状文を巡らして加飾しており、体部下半の外面には格子状のタタキ痕をとどめている。1 は、甕の口縁部片で、端部を上下に拡張させて外傾する面をなし、頸部外面には波状文を施している。4 は、南周溝 SD29 から出土した大型の甕で、口頸部は装飾を施さず、口縁端部は肥厚させて丸



第 5 −13 図　土坑 SK19 実測図（1/20）

くおさめている。

開田 4 号墳出土遺物（第 5 −15 図、付表 5 − 2）　土師器、須恵器などが北周溝 SD41 から出土しているが、須恵器には古墳時代のものと長岡京期のものがある。

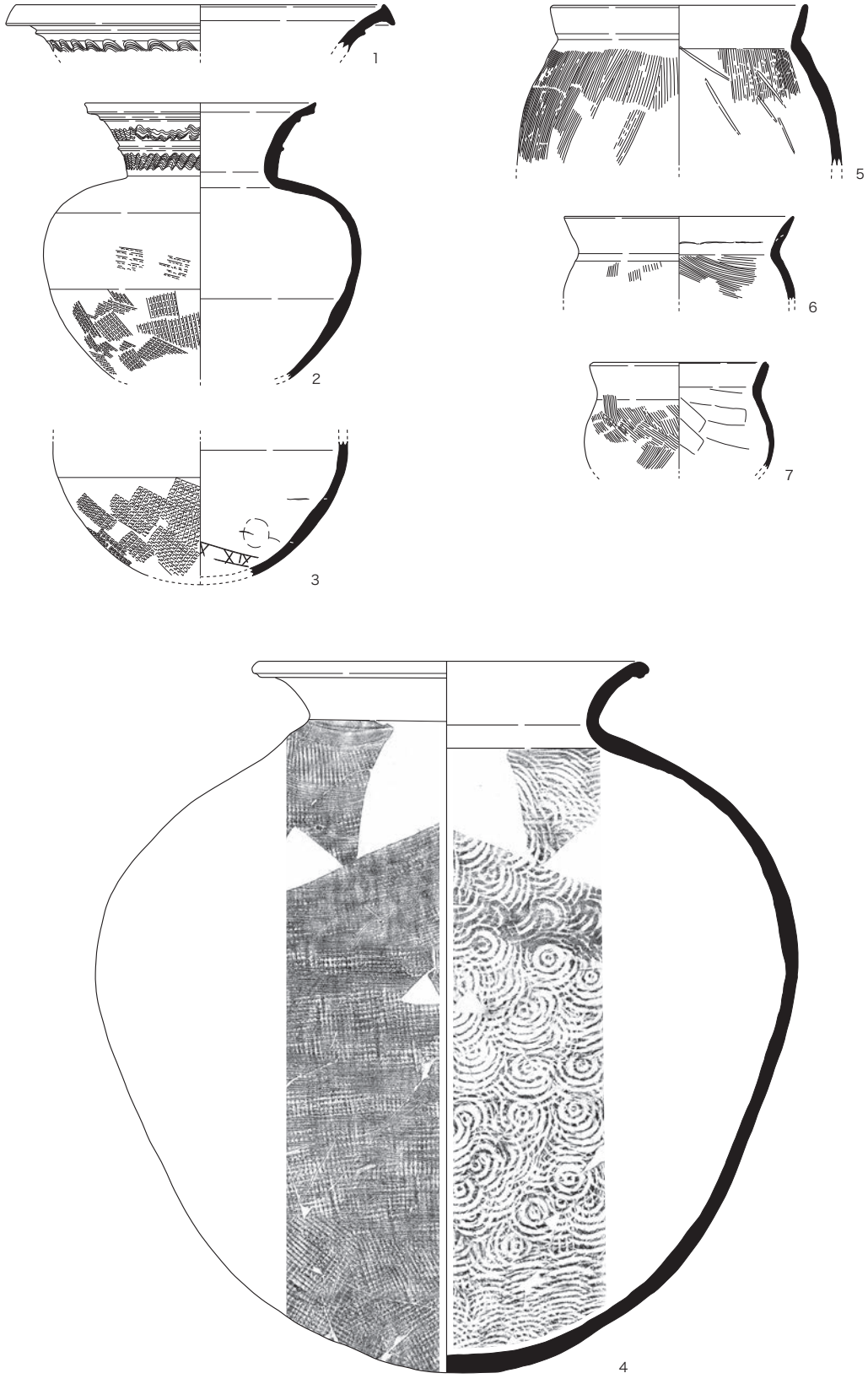
土師器には、甕（12）・甑の把手（13）などがある。甕は、くの字状に屈曲する口縁部をもち、口縁端部を上方につまみ上げている。外面はハケメ、内面は板状のナデにより調整する。13 は、把手の付いた甑の体部片で、体部外面は単位の細かなタテハケを施し、把手は三角形状で湾曲するように手づくねで成形している。

須恵器には、杯身（9・10）・杯蓋（8）・甕（11）などがある。杯身は、いずれも短く内傾気味に立ち上がる口縁部をもち、口縁端部は丸くおさめている。甕は、口径が 42cm にもなる大型品で、器壁の分厚い体部の破片も出土しているが、そのうち口縁部片のみを図示したものである。口頸部は、カキメを施した後、凸帯と櫛描波状文を施して装飾しており、内外面には自然釉の付着が認められた。

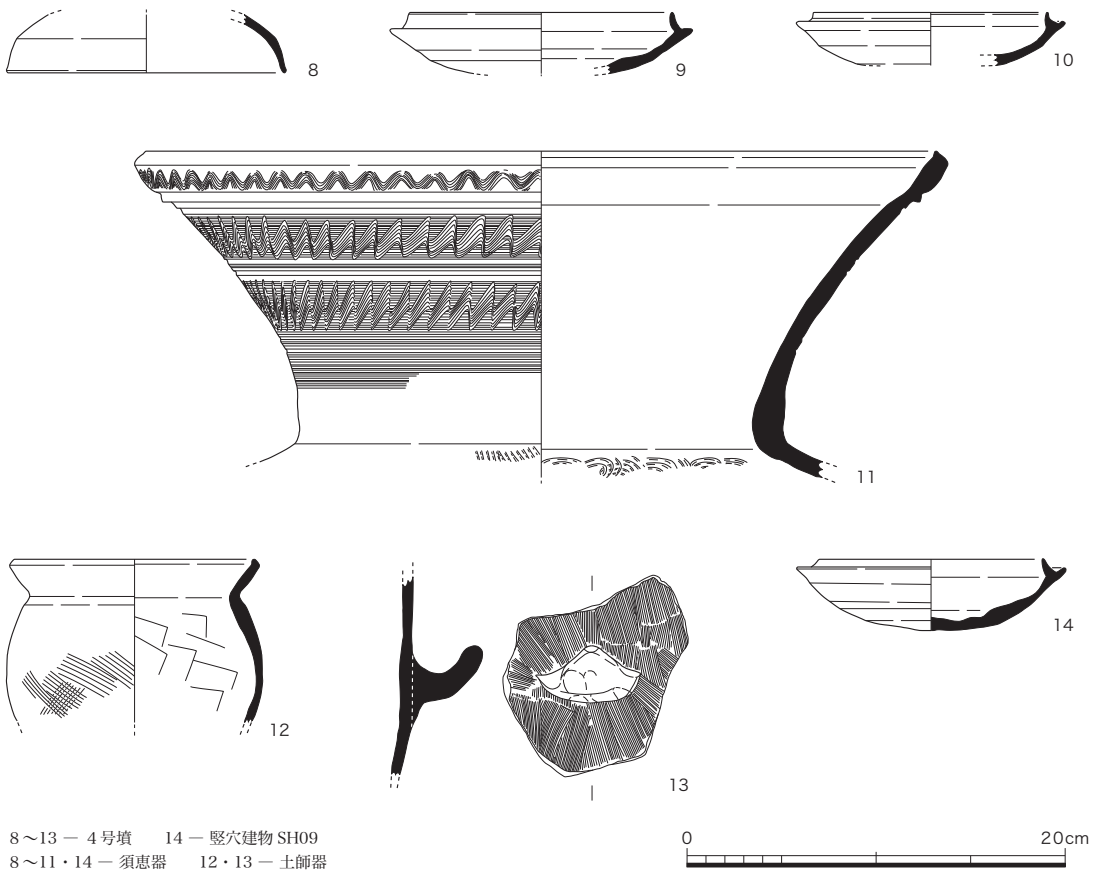
上記の須恵器の特徴からすると、陶邑窯の TK43 型式に比定することができ、6 世紀後半の所産であると考えることができる。

開田 5 号墳出土遺物（第 5 −16 図、付表 5 − 3）　5 号墳の周溝 SD10 からは、普通円筒埴輪や長岡京期の土師器高杯など新旧の遺物が混在した状態で出土している。

普通円筒埴輪は、小破片になったものばかりであったため、全形に復元できるものはなかった



第 5 –14 図　開田 2 号墳出土遺物実測図（1/4）



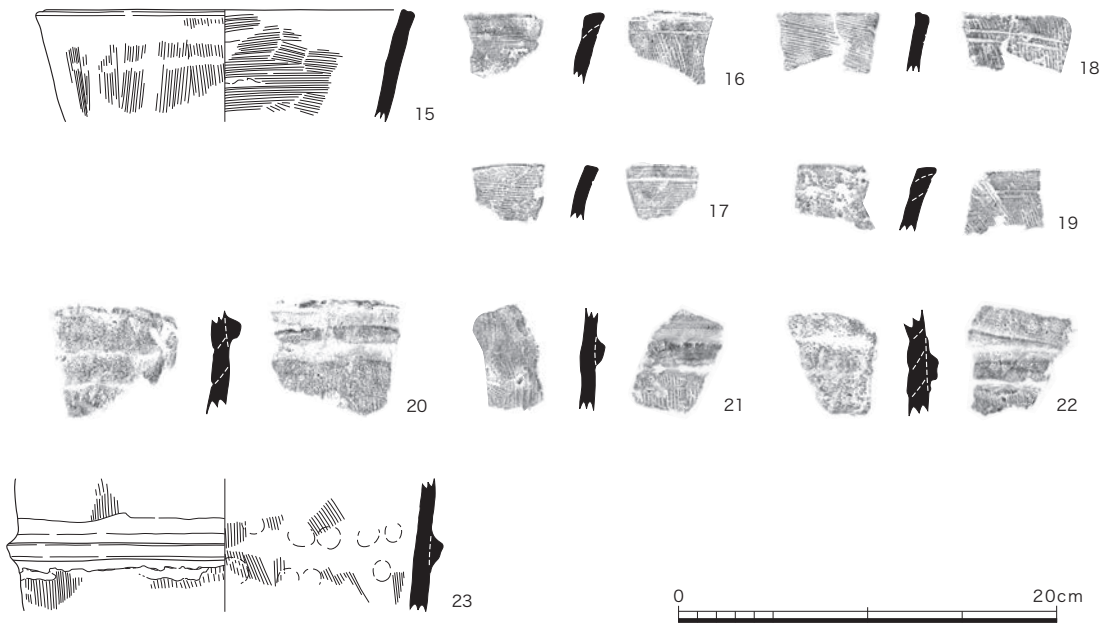
第 5 –15 図　開田 4 号墳・竪穴建物 SH09 出土遺物実測図（1/4）

が、口縁部は直線的に外上方に開く形態である（15）。器壁は薄く、突帯の形態は台形ないし三角形を呈しており、突出度は小さいものである。外面の器壁調整は、タテハケを施したものが多いが、ヨコハケを施すもの（17）もある。内面は、ナデ調整に加え、ナナメないしヨコハケ調整して仕上げている。焼成は、硬質に仕上がったものが多いことから、窖窯によるものと考えられるが、15 のように黒斑が認められるものもある。また、16 〜 19 には、口縁端部よりやや下に横方向の沈線が認められる。

これらの埴輪は、おおむねⅤ期の特徴を備えていることからすると、6 世紀前半に比定することができよう。

開田 6 号墳出土遺物（第 5 –17 図、付表 5–4）　普通円筒埴輪と家形埴輪、それに須恵器の瑞・甕などが出土している。

普通円筒埴輪は、小破片ばかりで全形を窺い知れるものはなかったが、口縁部は緩やかに湾曲しながら外上方に広がる形態で（24）、法量からすると 3 突帯 4 段構成ではないかと考えられる。突帯は、断面が台形を呈しているが、突出の度合いは小さい。外面は、ヨコハケを施して調整しているが、ヨコハケは静止の痕跡が認められる B 種ヨコハケである。内面の調整は、ナデと、ヨコないしナナメハケで仕上げている。焼成は、黒斑の認められるものがないことから、窖窯によるものと考えられる。ヘラ記号は、焼成前に線刻によって施されたもので、4 条の線を放射状



第 5 –16 図　開田 5 号墳出土遺物実測図（1/4）

に施したもの（24）、U字状を二重に施したもの（28・29）などがある。同様のヘラ記号でも、28 は硬質に、29 は軟質に焼成されている。33 は、家形埴輪の柱の部位であると考えられるものである。外面は、タテハケを施し、内面はナデ調整する。32 は、幅の広い突帯を貼り付けた破片で、直線的であることから、家形埴輪の破片である可能性が考えられる。

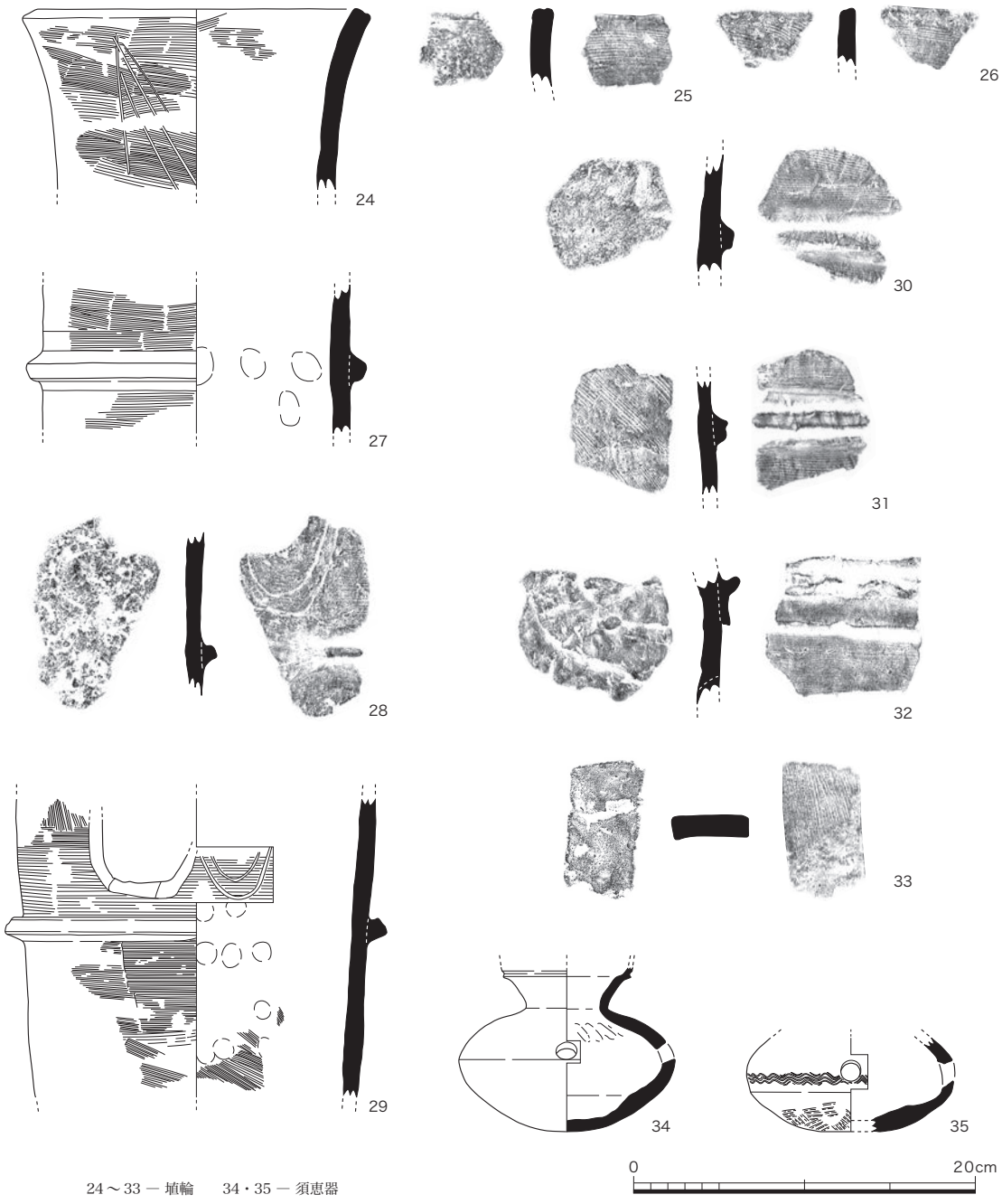
これらの埴輪は、調整や焼成の方法からみて、Ⅳ期の範疇に属するものと考えることができ、5 号墳出土埴輪よりも古い特徴を示している。

須恵器の瑞である 34・35 は、ともに口縁部を欠損するが、体部は扁平な楕円球形を呈している。34 は無文であるが、口縁部と頸部との境に段を有している。35 は、体部中央に櫛描波状文を施し、底部外面には平行タタキの痕跡をわずかにとどめている。

開田 8 号墳出土遺物（第 5 –18 図、付表 5 – 5）　土師器、須恵器がまとまって出土しているが、埴輪は出土していない。

土師器には、短頸壺（50 ～ 52）・甕（49）などがある。短頸壺は、いずれも小型品で、くの字状に短く外反する口縁部と丸みを帯びた底部からなる形態である。体部最大径が口径や器高よりも上回り、やや扁平な様相を呈している。外面は、タタキを行った後にナデ調整して仕上げ、内面は口縁部をヨコハケ、体部をナデ調整する。甕は、くの字状にゆるく外反する口縁部をもつ形態で、体部外面はタテハケを施すが、内面は横方向にケズリを施して仕上げている。

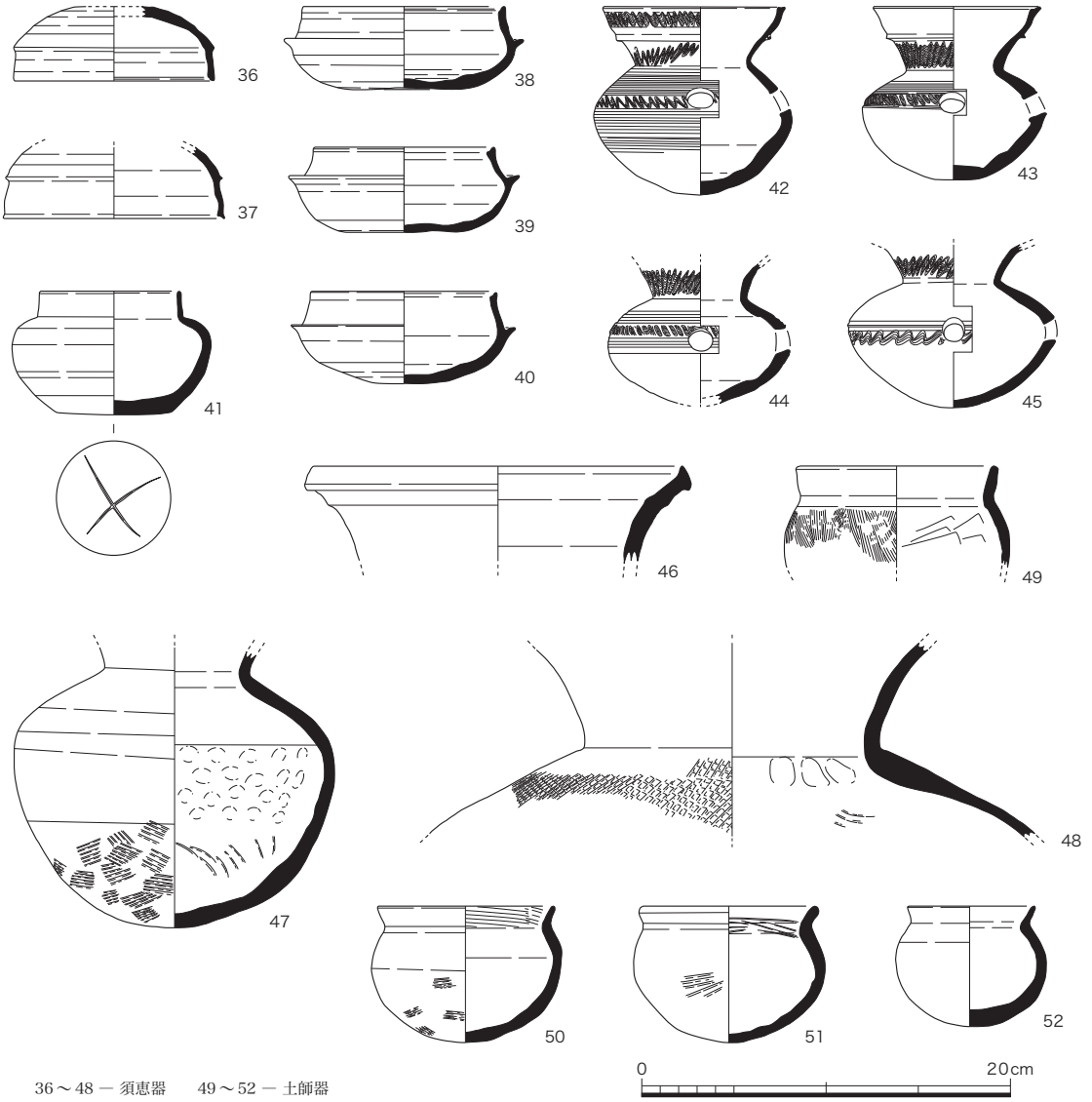
須恵器には、杯蓋（36・37）・杯身（38 ～ 40）・短頸壺（41）・広口壺（47）・瑞（42 ～ 45）・甕（46・48）などの器種がある。杯蓋は、天井部が丸みをもっており、天井部と体部との境は段になっている。杯身は、立ち上がりが直線的で、端部は内傾する段をもつ。底部は、比較的平坦なもの（38・39）と丸みを帯びたもの（40）がある。底部外面は、回転ヘラケズリ調整して仕上げている。短頸壺は、直立する口縁部が比較的長めで、端部を丸くおさめている。底部



第 5 –17 図　開田 6 号墳出土遺物実測図（1/4）

は平底で、外面には焼成前に十文字状のヘラ記号が施されている。広口壺は、口縁部を欠損するが、体部下半外面に平行タタキ、内面に同心円の当て具痕をとどめている。瑞は、いずれも口径と体部最大径が拮抗する法量で、底部は丸底であるがやや尖り気味である。口縁端部は内傾する面をもち、外面の屈曲部には突帯を巡らし、頸部には櫛描波状文を密に施している。体部は、カキメを施した後に櫛描波状文や列点文を施す。自然釉の付着している場合が多く、胎土は砂粒を含むものも多い。

これら須恵器の特徴を検討すると、おおむね陶邑窯の TK47 型式～ TK23 型式に比定することができ、5 世紀末～ 6 世紀初頭の所産であると考えることができる。



第 5 –18 図　開田 8 号墳出土遺物実測図（1/4）

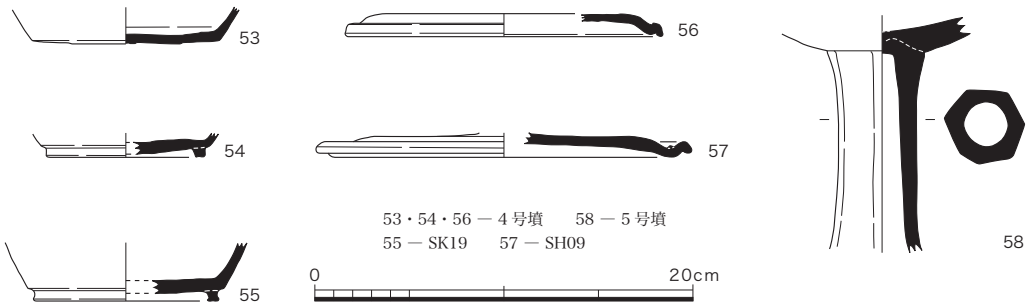
竪穴建物 SH09 出土遺物（第 5 –15 図、付表 5 – 2）　土師器の壺や甕、須恵器の杯身などが出土した他、長岡京期の須恵器杯 B 蓋も出土している。

土師器は、図示していないが、長胴に復元できる甕や壺がある。

須恵器の杯身（14）は、立ち上がりが短く内傾し、底部は丸みを帯びている。外面の約 1/3 ほどを時計回りに回転ヘラケズリして仕上げている。胎土は緻密で、淡灰色を呈し、硬質に焼成されている。4 号墳の北周溝 SD41 から出土した須恵器杯身（8 ～ 10）と同じく、陶邑窯の TK43 型式に比定することができ、6 世紀後半の時期に位置付けることができよう。

（2）長岡京期の遺物

この時期の遺物には、土師器、須恵器、平瓦などがあり、長岡京期の遺構である土坑 SK19 の他に、4 号墳や 5 号墳など方墳の周溝、それに竪穴建物 SH09 など古墳時代の遺構からも出土しているが、数量的にはそれほど多くない。



第 5 –19 図　長岡京期の遺物実測図（1/4）

須恵器の杯 A（53）・杯 B（54）・杯 B 蓋（56）は、4 号墳の北周溝 SD41 から出土したものである。杯 A は軟質に焼成されており、遺存状態は不良である。杯 B 蓋（57）は、竪穴建物 SH09 から出土したもので、内面は非常に平滑であることから、硯に転用されたものと考えられる。杯 B（55）は、土坑 SK19 から出土したものである。

土師器の高杯（58）は、5 号墳の周溝 SD10 から出土したもので、粘土紐を巻き上げて脚柱状部を成形し、ケズリにより七角形に面取りして仕上げている。

2 号墳の西周溝 SD30 第 1 層から出土した銭貨は 13 点あり、融着した状態で、表面にはわずかに布目の痕跡が認められたことから、布などでくるまれた可能性が考えられる。そのうち銭文が確認できたものは、和同開珎と神功開寶であった。

小　　結

（1）開田古墳群の特徴

開田古墳については、朝日園古墳とも呼ばれ、昭和 23（1948）年頃に工場敷地の南西部から古墳時代後期の遺物が出土したことによってその存在が想定されたものであるが、古墳の所在地や墳丘、規模などの詳細は全く不明であった。出土した遺物には、須恵器の杯身、杯蓋、短頸壺、提瓶、横瓶、鉄刀、馬具、獣歯などがあり、京都大学文学部考古学研究室の資料目録第 2 部に収録されている。その後、立会調査によって土壙墓が 1 基確認されたことで、古墳群の存在が予想されるようになり、この右京第 376 次調査で方墳を主体とする埋没古墳が 8 基検出されたことで、古墳群が形成されていることが確定した。その後、右京第 600 次調査で 2 基、右京第 954 次調査で 5 基、そして右京第 1035 次調査で 1 基が確認された結果、前方後円墳の可能性があるもの 2 基、方墳 14 基、墳形不明 1 基、それに土壙墓が 1 基となり、さらに東側に展開する東羅支群をも加えると、30 数基の古墳が存在したことになる。したがって、かなり規模の大きな群集墳であることが明らかになってきた。そこで、以下では最近の調査成果をも考慮しながら開田古墳群[(注1)]の特徴をまとめ、若干の検討を加えておきたい。

まず、古墳群が立地する地形は、後期の群集墳の多くが分布する山腹や丘陵地などではなくて、比較的平坦な低位段丘上であり、標高にすると 22・23 m前後であった。古墳は、いずれも地形の傾斜に沿った状態、すなわち北西から南東の方向におおむね主軸を向けて築造されていた。各古墳は、各々近接した状態を保持しており、中には周溝を共有するものも見られ、密に築造され

付表５－１　開田２号墳出土遺物観察表

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	出土遺構層位	備考
			口径	器高	底径				
須恵器	甕	1	24.4	(2.9)	-	灰色	回転ナデ	SD27	頸部に波状文
	壺	2	14.5	(18.3)	最大径 19.9	灰白色	回転ナデ、体部外面に格子タタキ	SD28	頸部に波状文
		3	-	(8.4)	最大径 18.4	灰白色	回転ナデ、体部外面に格子タタキ	SD29	
	甕	4	25.4	44.5	最大径 44	灰色	回転ナデ、体部外面に格子タタキ、体部内面に同心円の当具痕	SD29	体部外面に自然釉付着
土師器	甕	5	16.1	(10.1)	-	橙色	体部外面タテハケ 体部内面タテハケ後板状ナデ	SD29 第１層	
	壺	6	14.4	(5.2)	-	橙色	口縁部内外面ナデ、体部外面タテハケ、体部内面ヨコハケ	SD28	
		7	11.2	(6.7)	-	橙色	体部外面タテハケ 体部内面ケズリ	SD27 第１層	

付表５－２　開田４号墳・竪穴建物 SH09 出土遺物観察表

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	出土遺構	備考
			口径	器高	底径				
須恵器	杯蓋	8	14.8	(3.1)	-	灰白色	回転ナデ	SD41	
	杯身	9	14.8	(3.1)	-	灰色	回転ナデ、底部外面回転ケズリ	SD41	
		10	14	(3.3)	-	灰色	回転ナデ	SD41	
	甕	11	42	(17.3)	-	灰白色	外面：回転ナデ、カキメ 内面：回転ナデ、同心円当て具痕	SD41	内外面に自然釉付着
	杯身	14	12	3.8	-	灰色	回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ	SH09	
土師器	甕	12	12.8	(8.6)	-	黄橙色	外面：ハケメ 内面：板状ナデ	SD41	外面に煤付着
	甑	13	-	(10.5)	-	橙色	外面：ハケメ 内面：ナデ、把手はナデ	SD41	

付表５－３　開田５号墳出土遺物観察表

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	出土遺構層位	備考
			口径	残存高	厚さ				
埴輪	円筒	15	20	(5.9)	0.7	にぶい黄橙色	外面：タテハケ 内面：ヨコハケ	SD10	黒斑有り
		16	-	(3.7)	0.8	橙色	外面：ナナメハケ 内面：ヨコナデ	SD10 第２層	口縁端部外面に２条の沈線を施す
		17	-	(2.8)	0.7	にぶい黄橙色	内外面ともヨコハケ	SD10 第２層	口縁端部外面に１条の沈線を施す

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	出土遺構 層位	備考
			口径	残存高	厚さ				
埴輪	円筒	18	-	(3.1)	0.7	橙色	外面：ナナメハケ 内面：ヨコハケ	SD10 第２層	口縁端部外面に２条の沈線を施す
		19	-	(3.3)	0.8	橙色	外面：ナナメハケ 内面：ヨコナデ	SD10 第２層	口縁端部外面に２条の沈線を施す
		20	-	(5.9)	0.9	にぶい黄橙色	外面：タテハケ後ヨコハケ 内面：ナデ	SD10	
		21	-	(5.8)	0.7	橙色	外面：タテハケ 内面：タテハケ後ナデ	SD10 第１層	
		22	-	(5.8)	1	橙色	外面：タテハケ後ヨコハケ 内面：ナデ	SD10 第１層	
		23	-	(7)	0.9	橙色	外面：タテハケ 内面：タテハケ後ナデ	SD10	

付表５－４　開田６号墳出土遺物観察表

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	出土遺構	備考
			口径	残存高	厚さ				
埴輪	円筒	24	20.4	(10.6)	1.2	浅黄橙色	内外面ともヨコハケ	SD21	ヘラ記号有り
		25	-	(4.6)	1.2	橙色	外面：ヨコハケ 内面：ナデ	SD21	
		26	-	(3.7)	1	橙色	外面：ヨコハケ 内面：ナナメハケ	SD21	
		27	-	(8.7)	-	橙色	外面：ヨコハケ 内面：ナナメハケ	SD21	
		28	-	(11.6)	0.9	にぶい黄橙色	外面：ヨコハケ 内面：ナデ	SD21	ヘラ記号有り
		29	-	(17.4)	1	にぶい黄橙色	外面：タテハケ後ヨコハケ 内面：ナナメハケ後ナデ	SD21	５と同じヘラ記号有り
		30	-	(7.8)	1.3	にぶい黄橙色	外面：ヨコハケ 内面：ナデ	SD21	
		31	-	(6.6)	0.9	橙色	外面：ヨコハケ 内面：ナナメハケ	SD21	
	形象	32	-	(7.7)	1	橙色	外面：ヨコハケ 内面：ナデ	SD21	硬質に焼成
		33	(4.8)	(8.5)	1.2	橙色	外面：タテハケ 内面：ナデ	SD21	
須恵器	甕	34	-	(9.5)	最大径 12.6	灰色	回転ナデ	SD21	内外面に自然釉付着
		35	-	(5.5)	最大径 12.2	黄灰色	回転ナデ、底部外面に平行タタキ痕	SD21	内外面に自然釉付着、体部に波状文

付表５－５　開田８号墳出土遺物観察表

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	出土遺構 層位	備考
			口径	器高	底径				
須恵器	杯蓋	36	10.8	(4.9)	-	青灰色	回転ナデ 天井部外面回転ヘラケズリ	SD46	外面に自然釉付着
		37	12	(4)	-	灰色	回転ナデ 天井部外面回転ヘラケズリ	SD46	
	杯身	38	11	4.5		青灰色	回転ナデ 底部外面回転ヘラケズリ	SD49	
		39	11	4.5		灰色	回転ナデ 底部外面回転ヘラケズリ	SD46	
		40	10	5	-	灰色	回転ナデ 底部外面回転ヘラケズリ	SD46	
	短頸壺	41	7.2	6.7	6	灰色	回転ナデ 底部外面回転ヘラケズリ	SD46	肩部外面に重ね焼きの痕跡、底部外面にヘラ記号を施す
	瓶	42	9.9	10.2	最大径	灰色	外面：回転ナデ、カキメ 内面：回転ナデ	SD46	口縁部から体部外面に自然釉付着
		43	9	9.4	最大径 10	灰色	外面：回転ナデ、カキメ 内面：回転ナデ	SD46	
		44	-	(7.4)	最大径 10.1	灰色	外面：回転ナデ、カキメ 内面：回転ナデ	SD46	体部外面と底部内面に自然釉付着
		45	-	(8.9)	最大径 11.4	灰色	回転ナデ	SD49	口縁部内外面と底部内面に自然釉付着
	甕	46	21	(5.2)	-	灰色	回転ナデ	SD46	内外面に自然釉付着
	広口壺	47	-	(15.2)	最大径 17.4	灰色	外面：回転ナデ、平行タタキ 内面：回転ナデ、同心円当て具痕	SD46	体部外面と底部内面に自然釉付着
	甕	48	-	(10.5)	頸部径 16.2	灰色	外面：回転ナデ、格子タタキ 内面：回転ナデ、同心円当て具痕	SD46	
土師器	甕	49	10.9	(5.5)	-	橙色	外面：体部タテハケ、口縁部ナデ 内面：横方向にケズリ	SD46 第３層	
	短頸壺	50	9.6	7.2	-	橙色	体部外面平行タタキ後ナデ 口縁部内面ヨコハケ	SD46	
		51	9.2	7.4	-	黄褐色	体部外面平行タタキ後ナデ 口縁部内面ヨコハケ	SD49 第３層	
		52	6.9	6.5	-	橙色	内外面ともナデ	SD49 第３層	

付表５－６　長岡京期の遺物観察表

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	出土遺構・層位	備考
			口径	器高	底部径				
須恵器	杯A	53	-	(2)	10	灰色	回転ナデ	SD41	
	杯B	54	-	(1.3)	8.4	灰色	回転ナデ	SD41	底部から体部外面に火襷の痕跡
		55	-	(3.1)	9.8	灰色	回転ナデ	SK19	
	杯B蓋	56	16.8	(1.2)	-	灰白色	回転ナデ	SD41	
		57	20	(1.3)	-	灰色	回転ナデ	SH09	口縁端部外面に重ね焼きの痕跡、転用硯
土師器	高杯	58	-	(12.4)	-	橙色	心棒作り。脚柱部をケズリによって７角形に面取	SD10 第１層	

ていることが知られた。

墳形と規模については、前方後円墳の可能性がある２基以外はすべて方墳であり、規模は最も大きいものが一辺 14 mの 13 号墳、小さいもので約５mの 14 号墳であって、全体的に見ると小規模墳が大半を占めていることが知られる。さらには、先にも述べたように墳丘を有しない土壙墓が１基存在することも確認されている。前方後円墳は、後円部とおぼしき円弧状の周溝が右京第 600 次調査（10 号墳）と右京第 1035 次調査（17 号墳）において南北に近接して確認されているのみで、全体の形態や規模などの情報は得られていないが、それほど規模の大きくない前方後円墳と考えて大きな間違いはないであろう。また、埋葬施設は、墳丘が完全に削平を受けているため、その内容を知る情報は全く得られていないが、木棺直葬など竪穴系の施設と考えて大きな間違いはないものと考えられる。

出土遺物について、埋葬施設に伴う副葬品の内容は土壙墓に須恵器が供えられている以外は不明だが、各古墳の周溝からは埴輪や土師器、須恵器などが出土している。埴輪は、普通円筒と朝顔形円筒の他に、家形、蓋形、動物形、人物形、靱形、盾形など多彩な形象埴輪が確認されており、小規模な古墳といえども埴輪の種類が豊富であることは注意すべきである。器壁の調整手法は、一次調整のタテハケのみを施すものが主体であるが、二次調整にＢ種ヨコハケを施すものも認められる。また焼成は、黒斑を有する個体も少数あるとはいえ、窖窯によって硬質に仕上げられたものが大半を占めていることなどからすると、Ⅳ期からⅤ期にかけての範疇に属するものであることが知られる。こうした埴輪を伴う古墳は、方墳が３基（５号墳・６号墳・13 号墳）と前方後円墳の可能性があるもの２基（10 号墳・17 号墳）の計５基であり、墳形の相違と埴輪の有無に相関関係はなさそうである。ただし、前方後円墳の可能性がある古墳が２基とも埴輪を伴っている事実は興味深い。また、土師器や須恵器などの土器類を出土する古墳が比較的多く、須恵器を伴う古墳は 12 基もあり、特に８号墳と 13 号墳は種類、数量ともに突出している。土

付表５－７　開田古墳群一覧表

古墳名	長岡京跡調査次数	墳　形	規　模	周　溝	埴　輪	土師器	須恵器	備　考	文献
1号墳	-	不明	不明	不明			杯身、杯蓋、短頸壺	馬具、鉄刀	1
2号墳	R376	方墳	12 m	4 号墳と共有		甕、壺	甕、広口壺		本書
3号墳	R376	方墳	8 m以上	有			杯身、甕		本書
4号墳	R376	方墳	3.5 m 以上	2 号墳と共有		甕、甑	杯身、杯蓋、甕		本書
5号墳	R376	方墳	不明	有	普通円筒				本書
6号墳	R376	方墳か	不明	有	普通円筒、家形		廻、甕		本書
7号墳	R376	方墳	9 m	有					本書
8号墳	R376	方墳	12 m	9 号墳と共有		短頸壺、甕	杯身、杯蓋、短頸壺、広口壺、廻、甕		本書
9号墳	R376	方墳	不明	有					本書
10号墳	R600	前方後円墳か	不明	有	普通円筒、動物形		杯身		2
11号墳	R600	方墳	6 m以上	有			杯身		2
12号墳	R954	方墳	10 m	有		壺、甕	杯身、杯蓋、有蓋高杯、甕		3
13号墳	R954	方墳	14 m	14 号墳と共有	普通円筒、朝顔形、蓋形、家形、鶏形、馬形、甲冑形、盾形、靱形	壺、廻、甕	杯身、杯蓋、有蓋高杯、短頸壺、廻、甕	周溝内から馬歯出土	3
14号墳	R954	方墳	5 m	12 号墳、13 号墳と共有			杯身、甕		3
15号墳	R954	方墳	8 m	16 号墳と共有		壺、甕	廻、甕		3
16号墳	R954	方墳	4 m以上	15 号墳と共有		壺			3
17号墳	R1035	前方後円墳か	不明	有	普通円筒、朝顔形、蓋形、人物形、動物形、盾形				4
遺構名	長岡京跡立会次数	種　類	規　模	副　葬　品		備　考			文献
SX82103032	第 82103 次立会	土壙墓	長 2.25m 幅 0.73m	須恵器杯身、杯蓋、短頸壺、広口壺		須恵器類は小口にまとめて副葬			5

文献 1 『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第 2 部　1969 年
文献 2 『長岡京市センター年報』平成 10 年度　2000 年
文献 3 『長岡京市センター年報』平成 20 年度　2010 年
文献 4 『長岡京市センター年報』平成 23 年度　2013 年
文献 5 『長岡京市センター年報』昭和 57 年度　1983 年

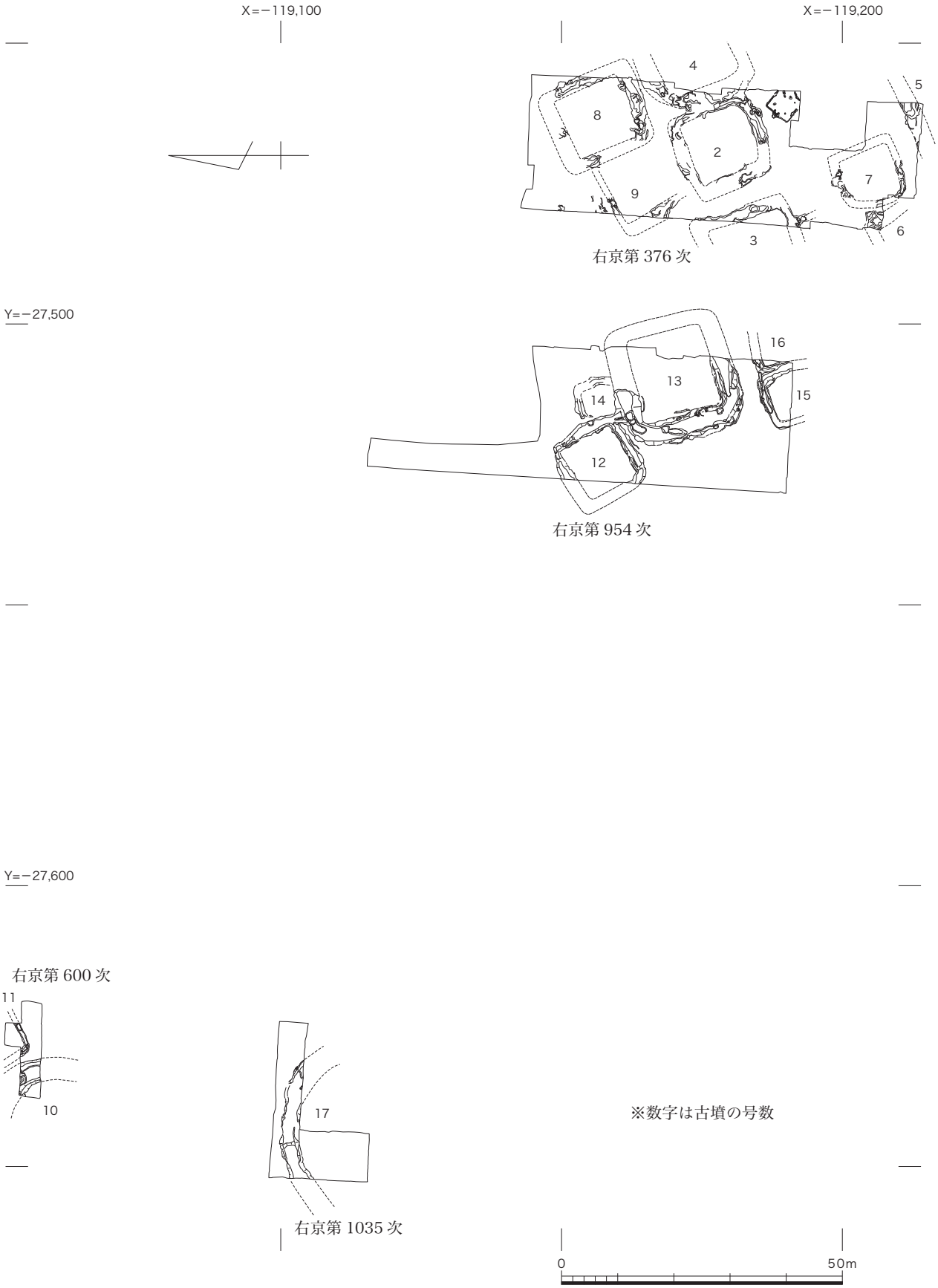
師器は、小型の壺類や甕、それに韈を模倣したものもあり、一方須恵器では杯身、杯蓋、壺、甕に加えて韈の出土が目立ち、高杯が極めて少ない傾向にあることが特徴と言えそうである。須恵器の特徴からすると、古いもので陶邑窯の TK47 型式ないし TK23 型式、新しいもので TK43 型式前後のものと推察することができよう。以上のような遺物の特徴からみて、古墳群の形成は古墳時代中期後半にあたる 5 世紀後半に 6 号墳、8 号墳、13 号墳などの築造が始まり、後期を通じて展開しているものと考えられ、4 号墳、12 号墳などが新しい後期後半に比定することができる。

以上のように、開田古墳群は少数の前方後円墳と多数の方墳、そして墳丘をもたない土壙墓で構成されていることになり、きわめて階層差が明瞭な古墳群であるということができる。開田古墳群のような属性を有する群集墳については、初期群集墳あるいは古式群集墳などと呼称され、横穴式石室を埋葬施設とする円墳で構成される新式群集墳とは区別されている。こうした初期群集墳を桂川右岸流域で他に類例を求めると、長岡京市の宇津久志古墳群や井ノ内古墳群、向日市の山畑古墳群などがそれに相当するであろう。宇津久志古墳群では、1 号墳に中心の埋葬施設が遺存しており、勾玉、管玉、ガラス玉など豊富な装身具類と鉄刀などの武器が副葬されていることは、一辺 7 m規模の方墳としては特筆すべき内容を備えている。また、井ノ内 3 号墳では開田 8 号墳や開田 13 号墳と同じ型式の須恵器がまとまって出土しており、その類似性をうかがい知ることができる。

（2）古墳群と集落

古墳群を構成する複数の方墳と共に竪穴建物を 1 棟ではあるが検出できたことは、先に述べたとおりである。この建物は、地形の傾斜に沿って建てられているが、主軸の方位は古墳群のそれと異なっていた。また時期は、古墳時代の後期後半に比定できることから、古墳群の築造が開始された後、半世紀ほどの時間を経過してから古墳群に隣接するように竪穴建物が営まれたことを示唆している。当地の東約 130 mの地点で実施した右京第 911 次調査[(2)]でも、後期の竪穴建物が 1 基検出されており、方位やカマドの位置が今回の SH09 と類似していることからみて、同じ集落内の建物である可能性が考えられる。この想定が妥当だとすれば、規模の大きな集落に復元することができ、この集落内に古墳群の被葬者層が居住している可能性は濃厚であろう。初期群集墳の被葬者層については、大陸や韓半島からの渡来人を含む新興勢力の有力者集団ではないかと指摘されており、今後周辺での調査が進み、集落に関わる遺構を確認することによって改めて検討することにしたい。

（3）古墳群と長岡京の造営



第 5 –20 図　開田古墳群分布図（1/1000）

遺構の重複関係や遺物の出土状況を考慮すると、長岡京期に墳丘が削平を受け、周溝を埋め立てるという行為がなされたことが判明したことは重要である。右京第 954 次調査や右京第 1035 次調査においても同様の状況が確認されており、開田古墳群一帯が長岡京遷都に伴う造成工事の犠牲になったことは確実視できる。そして、こうした古墳の破壊行為に対して、何らかの祭祀が行われたであろうことは容易に想像することができるのであって、2 号墳の周溝から銭貨がまとまって出土していることは示唆的である。銭貨は、貨幣という経済的な機能に加えて、まじないなど祭祀との繋がりを想起させる機能をも有しており、古墳破壊に伴う鎮魂などを考える上で興味深い資料になるであろう。

（山本　輝雄）

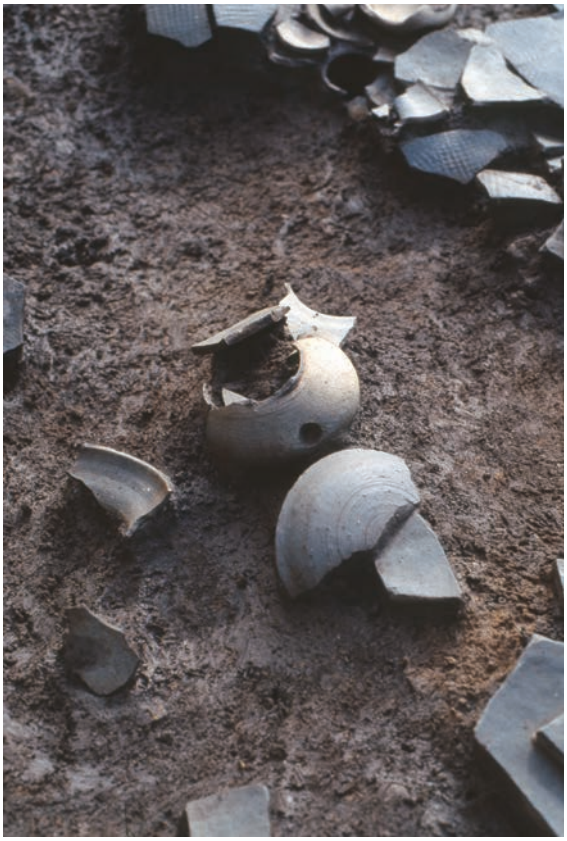
注 1）開田古墳群に関わる報告には、以下の文献がある。
京都大学文学部『京都大学文学部考古学資料目録第二部』1968 年
白川成明他「第 82103 次立会調査概報」『長岡京市センター年報』昭和 57 年度　1983 年
山本輝雄「開田古墳群」『長岡京市史』資料編一　2000 年
中島皆夫「右京第 600 次調査概報」『長岡京市センター年報』平成 10 年度　2000 年
山本輝雄「右京第 954 次調査略報」『長岡京市センター年報』平成 20 年度　2010 年
山本輝雄「右京第 1035 次調査概報」『長岡京市センター年報』平成 23 年度　2013 年
2）原　秀樹「右京第 911 次調査略報」『長岡京市センター年報』平成 19 年度　2009 年

第 5 –21 図　調査区南半部全景（南から）

第 5 –22 図　調査区北半部全景（北から）

第 5 –23 図　開田 2 ～ 4 号墳検出状況（東から）

第 5 –24 図　開田 8 号墳・ 9 号墳全景（北東から）



第 5 –25 図　開田 8 号墳須恵器出土状況（北西から）

第 5 –26 図　開田 8 号墳土師器出土状況（南東から）

第 5 –27 図　竪穴建物 SH09 全景（北西から）

第 5 –28 図　竪穴建物 SH09 のカマドと支脚（南東から）

第 5 –29 図　掘立柱建物 SB07 南部（南から）

第 5 –30 図　掘立柱建物 SB08（東から）

第 5 –31 図　土坑 SK19（東から）

36

38

40

41

42

45

44

第 5 –32 図　出土遺物– 1

第 5 –33 図　出土遺物– 2

第 5 –34 図　出土遺物– 3

第 5 –35 図　出土遺物– 4

第 5 –35 図　出土遺物– 5

第 5 –36 図　出土遺物– 6 （8 号墳出土遺物）

長岡京市埋蔵文化財発掘調査資料選（四）

平成 26 年 7 月 28 日　発行

編集発行　　公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

〒 617–0853　京都府長岡京市奥海印寺東条 10 番地の 1

電　話　075–955–3622
ＦＡＸ　075–951–0427

印　　刷　　山代印刷株式会社

〒 602–0062　京都府京都市上京区寺之内通小川西入
宝鏡院東町 588 番地
電　話　075–441–8177
ＦＡＸ　075–441–8179